黄昏をとどめて

溝部　成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄昏をとどめて

【Ｎコード】
Ｎ６８７５Ｙ

【作者名】
溝部　成

【あらすじ】
「君と僕の好きは、違いすぎるよ」
内憂外患により崩壊しつつある帝国。
かつて国首と呼ばれ、繁栄を謳歌した青家一族の末娘エンジュは、西部戦役の和約のあかしとして、西家の公子ソウセツと婚約し、辺境へ向かう。
年も育った環境も大きく違う相手に、戸惑うが…。
一方、皇宮では皇位継承をめぐる対立から、大きく政局が動こうとしていた――。

1

空を大鳥が旋回している。
遠く、幟がいくつも翻る城塞。見渡す荒野。
草はほとんどなく、遠い地平まで赤い土に埋め尽くされている。
曇天だ。雲が厚く立ちこめる。
激しく風が吹きつけ、吹雪のような音を立てた。人の泣き声のようにも聞こえる。

砦は鉄の厳めしい大門で固く閉じられ、見張りが壁に等間隔に配置されている。
戦場だ。

「お前はここで補給の指揮を」
大柄な体を曲げるようにして、男は狭い戸口で振り返った。堂々とした体躯の青年だ。
ずいぶん土にまみれてはいたが、彼がまとっているのは紛れもなく絹の白い軍装で、左手には大ぶりの実用的な刀剣をもっている。
唯一の装飾品は額飾りで、白銀の複雑な紋がぬいとられ、中央には涙型の大粒真珠が揺れている。
白は、西家の色だ。

「いいな?」
大らかで人をひきつける笑顔で彼は言った。
外では鬨の声が上がる。
むき出しの石壁に、西からの陽が、うすく光をさし入れる。

「なぜ。…厭だ、わたしも連れて行け」
木の椅子に座った別の青年が、頑是ない子どものように首を振っ

た。

彼の前には部屋の大部分を占める卓が置かれ、書きかけと思しき書類と筆が転がっていた。

振り返った青年とは同年代、そして口調から同輩に見えるが、彼には行軍の将校らしい様相がまったく感じられない。

略式の軍装を身につけはしているが剣は佩かず、長く伸ばした髪を白と赤の組みひもで結わえている。

白い服にも殆ど汚れらしきものは見当たらない。そして軍人としては、繊細な面。

その顔は今は怒りで、上気している。

出て行こうとしていた青年が、苦笑した。

「もう決めんだ、お前はここに残す」

狭い部屋には2人しかいない。

石の壁に沈黙が落ち、兵士たちの士気の昂りが木製の床を通して伝わってくる。

剣を入り口に立てかけ、自分を睨む青年の前までくると、卓上の紙をとりあげて目を走らせた。

口笛をふく。

完璧だな、彼の口がそう動いた。

その行為に、座ったままの青年の眉間に皺がよる。目には剣呑な光がともった。

「サイカ、わたしの話を聞け」

しかし、サイカと呼ばれた青年は口元に笑みをたたえている。

「おう、でもまず俺の話からだ」

彼は片手を挙げて制止すると、早口に語った。

「総指揮権は叔父上にゆずった。俺が連れていくのは、４隊。お前は居残り」
「だから、なんでわたしがここにいなければならない、」
「お前が俺の副官だから」
「だったら、なおのこと」

しかし、サイカの意思は変わらなかった。
立ち上がろうとする相手をじゃれるように椅子に押しとどめ、紙をひらひら振る。
「急襲が俺の担当なら、これはお前の担当」
うまくいったら、な。
軽口だったが、その言葉に青年は押し黙った。
薄暗い室の中では、紙の内容も彼の表情もはっきりとは読み取れない。

どうやら、サイカの言葉をしぶしぶ受け入れたらしく、大きなため息を聞かせて、青年は椅子から静かに立ち上がった。
「吾が友に武運を。勝ちて帰れ」
勝ちて、帰れ――。

古くから繰り返されてきた戦士への餞の言葉を、口にする。
「我らの風に、勝利を」
サイカはそう返すと、相手の肩を軽く抱き、部屋をあとにした。

2

荒野のその地平線。

鉄の鎧で覆われた軍馬が、横列にずらりと並んでいるのが見えた。
鈍いてい鉄と、盾を打ち鳴らす音。その数、十万。
強い風が、耳元でごうごうと鳴り響く。騎士たちが身につける鎧は鉛色に輝き、兜は十字に切りこみが入れられている。
グルジムカの騎馬の軍勢だ。大陸最強と呼ばれる騎馬軍。
帝国の西部をおびやかす敵。

大門の前でサイカは合図をして、馬にまたがった。
砦の上に、軍旗がひるがえる。
幾度も洗いをかけた白。

今日は、戻ってこられるだろうか…。
サイカは、弱気な自分を嗤うように一度、目を閉じた。
この作戦は、誰が見ても無謀だ。
だが、退路はない。

年若い騎士たちが緊張した面持ちで、彼の号令を待っている。
グルジムカの軍はここからは見えない。鋼鉄の軍団に対して、彼らは胸当てと盾で武装しているものの顔をさらしていて、いかにも無防備に見える。

騎士たちが風を呼ぶ祈りの声が耳を過ぎる。
耳慣れた言葉。
武運を願うまじないだ。
西家の部隊の真ん中で、サイカは息をついた。

「若、ソウセツ様は」
老騎士が先頭のサイカの横に馬をつける。
白いあごひげを加えた武人で、彼の剣の師でもあった。タカサキという。

「あいつは、置いてきた」
「それはそれは」
サイカの簡潔な返事に、タカサキは声を立てて笑った。
戦場での気負いもない、朗らかな声。
サイカも歴戦の老将に軽口で答える。
「ソウセツに何かあれば、羽鳥（ハトリ）が泣く」目線を前へ戻して、続ける。
「敵は怖くないが、妹は怖い」

サイカの周りでどっと、にぎやかに笑い声が上がった。
行軍を共にした騎士たちだ。
「いよいよですな」
タカサキが揚々と言う。サイカは静かだが、強く頷いた。
「ああ、エテを得て還るぞ」

敵領にある交易都市をあげる。
この西部国境は、隣国グルジムカの侵攻を受け続けている。
戦線は一進一退を繰り返し、特に打つ手もない。

「今こそ、徹底的な打撃を与えて、蛮族を追い払う。雪が来る前に」

巨大な領土や豊かな資源を誇るグルジムカと、この弱小の帝国とは、根本的に持久力が違う。
総力戦ともなれば、長くは保つまい。
グルジムカと半島で隣接した西部地域が一番多くの犠牲を払うで

あろうことは、簡明な事実だ。

そのまえに。

そうなる前に、敵を大きく叩いておかねばならない。

サイカの声音は、焦りと気負いさえ孕んでいる。

「勝って帰る」

「御意」

「必ずだ」

「いくぞ」

短い掛け声とともに、サイカは馬を走らせた。彼に従う４隊も遅れじと騎首を返す。

１００名足らずの奇襲隊。

機動性にすぐれた、年若い騎士たちで構成された臨時の部隊だ。

陽が落ちてから、２隊を本営にぶつけ、その残りで敵軍の裏をかく。

それが、彼らに課された任務だ。

砦に残った叔父とは最後まで相容れなかった。

「せいぜい、グルジムカの大軍におびえているがいいさ」

かげる陽を追うように、馬を走らせながら、サイカは口の中でつぶやいた。

3

北の星が、白く輝き始めるのが合図だった。

馬のいななき。嵐のような怒号。
整然と並んだ鉄の甲冑の右軍へ、急襲がかけられる。
白い軍勢の中心でサイカが、刀身を頭上に掲げて叫ぶ。

「大地を血で染めよ！我らの風を呼べ！勝利を！！」

圧倒的な大地の震動と、舞い上がる砂塵。
血しぶきと、周りで上がる悲鳴。引きずられそうになる、生々しい戦場の様相。
彼は、集団の陣形を解き、果敢に敵の中へ馬を走らせていく。

相手のふるいかぶった剣を見事な綱さばきでかわし、踵を返す。
そのまま相手の懐へ刀を突き出す。血が彼の顔を染める。
息つく間もなく、後方からも敵が刀を振るってくる。サイカは渾身の力で相手を突き返し、軍馬に剣を突きたてた。

馬の悲鳴。棒立ちになった馬から相手は勢いよく投げ出され、その期を逃さず、彼は短刀を相手の喉元に正確に突きたてた。
サイカはほぅ、とため息をつき乗馬したまま屈みこみ短刀を抜き取ると髪をかきあげ、口元についた血をなめた。

「おのれ、白い幽鬼め！」
大陸西方訛りの罵りが聞こえ、横手から彼のもとへ斬り込んでくる。
強い怒りとともに繰り出された刀は重く、打ち合いは数度続く。

しかし、サイカの剣の腕の方が優れて速く、相手は喉元に刃を受けて馬から滑り落ちた。

サイカは肩で息をつくと、血に濡れた刀を振った。
そのときだった。
背後から風をうなるような音が響き、強い衝撃とともに振りかえる間もなく、どぅっと矢が突き刺さった。

サイカはその勢いのまま、馬から滑り落ち、前に倒れるように両手を地面につく。
赤い砂煙と、周りの怒号が一瞬、止んだ。
衝撃に痛みが加わる。
背がもえる。
燃えるように熱い。

は、と彼は声を出すように息を吸った。
吐き出す息とともに、口から鮮血が溢れる。

とっさにサイカは口元を押さえたが、次に吸った息はすぐに咳にかわった。
まだ、…まだだ。
まだ、終わっていない。

苦しい息の中で、彼は胸元から白い布を引っ張りだした。
明らかに武人の持ち物ではない、繊細な布地。ハンカチだ。銀糸で花の刺繍が縫いとられている。その、ひと針ひと針を確認するように彼は指先で撫で、口元におしあてた。

「羽鳥…」
約束が、という言葉を風が拾う。

タカサキが、叫び声をあげながら、馬を走らせてくるのが目に入った。

ああ、すまない…彼は胸をつかれるような痛みとともに、暗闇に身をゆだねた。

4

誰かが呼んでいるような気がした。
蝋燭のほのおが揺れる音がし、エンジュははっと目を開く。
どうやら、うたた寝をしていたらしい。
幾度かまばたきをすると、徐々に意識がはっきりとして、頭の後ろが重く痛んだ。
開いたままの分厚い装丁の本を閉じると、エンジュは机に突っ伏した。

「エンジュ様、エンジュ――」
その声で、もう一度彼女は我に返った。
「なあに、」
あわてて手すりに寄って、階下をのぞく。コウヒだ。

「もうすぐ終わります。いつもつき合わせて、ごめんなさいね」
コウヒは、彼女が寝ていたことを見抜いたらしい。こちらを見上げる顔は微苦笑を浮かべている。
エンジュはきまり悪くなって、机の本を脇にかかえると、古びたはしごを細心の注意を払って降りた。

分厚い硝子の天窓からは薄く光がさしこみ、はしごは1段を踏むごとにぎしぎしなり、埃が舞う。
エンジュは最後の段から石床におりると、ほっと息をついた。
確認するまでもなく、年月と湿気によって、はしごは根元から腐りつつあった。
それだけではない。
石床は、一部が隆起、陥没し、土が見えている部分もある。

「もう上にあがるのは、およしくださいな」
あなたがケガしないかと、ひやひやします。
コウヒは心配顔で、ため息をついた。
「でも、上の棚にしか物語が置いてないのだもの」
エンジュは、にっこり笑って手に持った本を見せた。

孤独な竜と美しき姫巫女の恋物語である。
この国の者なら、幼い頃に一度は寝物語に聞いたことがあるだろう。誰でも知っているおとぎ話だ。
「あら『竜と姫君』。懐かしいわ。そんなのも、ここにありますのね」
装丁の美しい表紙をのぞきこんで、感心したようにコウヒは言う。
エンジュは、曖昧にほほ笑んだ。

これは、ただのおとぎ話ではないかもしれない、そうコウヒに言いたかったが、なぜか喉の奥に言葉がつっかえた。
裏表紙には、英秀（エイシュウ）王の御世の年号が刻まれていたが、作者の記名はなかった。
今から２５０年も昔に書かれた本だ。
段の上の史書に紛れるようにして、置かれていたのを見つけたのだ。
ぱらぱらとめくっただけだが、乳母たちに聞いた物語よりよっぽど詳しく書かれているようだ。

ぼんやりとそんな物思いにふけっていると、コウヒが嬉しそうに話を継いだ。
「ここは本当に、さまざまな文献があって、素晴らしいですわ」
勿論、ここには重要な外交文書やいにしえの法令、史書が眠っている。
コウヒと禁を破って入った、青家の古文書庫なのだから。

ここに置いてあるのは、大半が原本であり、重要な法文書である。ただし、その多くは虫にくわれ、黴におかされ、判読することも難しい。

青家が有り余る富を支配していた頃――いや、『国首の君』と呼ばれ権勢に酔ったころには既に、法書など見向きもされなくなっていたに違いない。

風雨にさらされ、朽ちるにまかせた古い禁書庫など、訪れる者とてない。

ある日エンジュが割れ窓から書庫への出入りを見つけたことと、彼女の家庭教師であるコウヒが学院で歴史を専攻していたことは、偶然だったと言えよう。

5

エンジュはコウヒと、書架に文献を並べ直しながら、机いっぱいに散らされたメモに目をやった。

書きなぐりの省略記号ばかりで、エンジュには意味が分からないながらも、どうやら収穫があったらしいことは、コウヒの表情で分かる。

「今日は何を調べていたの？」

「貿易の収支報告です」

２８０年前の交易の様相にはまだほど遠いですが、とコウヒは語った。

彼女は、最高学府である国学院に籍をおいている。

『専門化はよろしくない。よい研究者というのは、満天下のあらゆる歴史事象に対応できなければならない』

師である高名な歴史家ジケイは、つねづね政治的、外交的、制度的、叙述的な出来事記述の歴史を否定しているのだという。

弟子であるコウヒたちにも、それは求められている。

未来志向の歴史学を推進することを。

彼女が選んだのは、縦糸に鎖国という貿易の転換期を、横糸に人物をとるという手法だった。

「どれくらい進んだ？」

「６頁、といったところです」

読み進めている文書は、古語で書かれており、なかなか思うようには進まない。

コウヒは先は長い、とばかりに肩をすくめた。

エンジュは、微笑をもらしてしまいそうになり、とっさに吐息にかえた。
コウヒが青家にいるのは、研究のためだ。ここには当時の外交文書が山のように残っている。
エンジュの父が寄宿を認める代わりに、彼女に提案したのは、末娘の家庭教師をすることだった。

「ずっと居てくれればいいのに」

「何か言いましたか？エンジュ様」
「いいえ、何も」
とっさにエンジュは首を振る。うっかり本音を聞かれてしまうところだった。
取り繕うように、重くて破損しやすい書物を本棚に戻す作業に、気持ちを切り替える。

そのときだった。
耳元で風が髪をふわり、ともちあげる気配がした。
さわさわと木々がざわめくのが、割れた窓越しに見える。

『…でいるわ…はやく。…もどらなきゃ…』
ささやくような、笑い声のような、軽やかな声が聞こえる。
風の知らせだ。
エンジュは外に視線を向けた。
遠くに、回廊を早足でゆく侍女たちが見えた。エンジュを探しているに違いない。

「戻りましょうか、」
コウヒも理解したらしい。荷物を手早くまとめると、内鍵を開け

て書庫の外へ出た。
彼女が出たことを確認してから、エンジュは内側から鍵をかけ直す。そうして割れた窓辺から、外へ出た。

入るときは、この手順が反対になる。
ここは禁じられた書庫である。鍵のありかをエンジュは知らない。年齢より小柄で痩せているエンジュには、窓からの侵入が可能だが、コウヒはそうはいかないのである。

出るときに窓枠で、首と足をひっかけ、いつまでこれが可能なのか、エンジュは物語を胸に抱きかかえながら、自問自答した。

6

「姫、どちらにおいででしたか」
空気を張るような、凛とした声が響いた。
エンジュは慌てて本を閉じ、振り返る。
まなじりをつり上げて立っているのは、彼女の教育係であるオノセだ。
白いかんばせ。一部の隙もなく髪を結いあげ、流行りの形に複雑に結ばれたえび茶色の腰帯。いつも通り、完璧な装い。

「どこも」
エンジュはそっけなく答えた。

「わたくしが何度も申しあげていますように、」
あとの言葉を引き取って、エンジュは続けた。
「父君のいる邸で、外をうろうろと歩き回ってはならない、でしょ？」

「どこでも、でございます。御身に危険が及ばぬようにするのが、わたくしのつとめ」
「退屈な仕事ね」
「…また、コウヒ様と一緒に出かけられたのですね」
「図書室に行っていただけよ」
「探しに行かせましたが、侍女たちは見つからないと戻ってきましたわ」
「本を探していた時だったのよ、きっと」
「明りを消して、ですか？」

ばれている。
エンジュは、唇をかみしめた。禁書庫に入ったことだけは、知られるとまずい。
「じゃあ、休憩に外に出ていたのよ」
「コウヒ様がいらしてから、姫はかわりましたわ」
以前は、嘘をついたりはなさらなかった…。

その言葉にエンジュは、オノセを睨みつけた。
「オノセは、コウヒが嫌いだものね」
「そんなことを申し上げているのではありません」
「じゃあ、何なの」
「あの方は、――――」
そこまで言って、はっとオノセは息をのみこんだ。
エンジュには彼女が言葉をのみこんだ理由を知っていた。知っていたから、不機嫌に別の話題をふる。

「私たち、今にここで埃にまみれて、死んでしまうわ。何もすることがなくってね」
「そんなことはありませんわ」
オノセは噛んで含めるように続ける。
「美しく整えられていますもの、お部屋も調度も」
かみ合わない言葉に、お手上げだと、エンジュは天井を睨んでため息をこぼした。

確かに、この邸も部屋も豪奢で美しい。
父の権勢があまねく国中から、一級品ばかりを集めているのだから。
「あなたは、美しいものに囲まれていたら、満足なのでしょ」
つい、うらみ事が出る。
滑らかな漆塗りの文机、瀟洒な紋様が施された椅子、天井から掛

け下ろされた濃い藍絹や薄衣。
身の周りの物は、オノセの趣味で選ばれている。

「まあ、美しいものが一番じゃありませんか。他に、どんな基準がおありだと？」
美しく整えた眉をあげて当然のように、こう返されれば、返事のしようもない。
「男に生まれたかったわ」
エンジュはむっつりと文句を言う。
「なんてことを。お父君がどれほどあなたに贅沢を許しておいでか、ご存じでしょうに！」
オノセは首を振る。
紅や絹に人生のすべてを奉げているとも云える彼女には、到底信じがたい言葉なのだろう。

「兄君のように、ここを出たい」
口から出たら、その言葉は真実味を帯びた。
「エンジュ様」
制止の声は、彼女を勢いづけただけだった。

「兄君のように外を見たい。兄君のように学校へ行きたい。
兄君のようにたくさんの友達に囲まれてみたい。
兄君のように買い食いをしたり、いたずらをして宿舎の罰掃除をしたり、こっそり規則を破って外出したり、…」

言っているうちに、苛々としてきた。
「エンジュ様、駄々っ子のようですわ。おやめあそばせ」
オノセはふう、と額を押さえてため息をつく。
「ウオン様からいったい何をお聞きになったのです」
ひとしきり地団太を踏むとエンジュは、大きな声で言い募った自

分が情けなくなって、あーあと肩を落とした。

４つ年上の兄君は、学問の中心地・朱都（シュト）で、貴族の子弟たちが通う学府『緋（ヒ）の学院』に入っている。

長期の休みで、年に数度、この都の本邸へ戻ってくる以外は、会うこともない。

帝の傍で、宰相という重責を務める父君とは違い、肩の力の抜き方を十二分に心得た兄は青家嫡男でありながら、問題児でもあるらしい。

時折思い出したように妹に届けられる便りは、学院で起こした騒動で埋められている。

ちょっとした暇つぶしにと、と風をつかまえる方法を教えてくれたのも彼だった。

『こうやって、生気（イキ）を送るんだ。ほら、やってごらん、』

ちょうちょの乗ってきた春風をつかまえて、いたずらっぽく兄は言った。

体が丈夫でないと侍医に云われ、年中、邸の中で過ごす妹を彼なりに気遣っていたのだろう。

エンジュが見よう見まねに、風に息を送ると、彼はひゅぅ、と口笛をふいた。

『こりゃ、すごい。生きてるみたいだ』

兄が送った息は、風をのばしたり、大きくしてただ戯れるだけだったが、彼女が教えられたようにやると、まるで感情をもった生き物のように風は声を伴い、その思いさえ伝える存在へと転化した。

青いほのおに変わった春風は、その光の奥に、黄色い花畑で花をつみとる女たちを映しだした。

粗末な無地の衣と日よけの頭巾をかぶった平民たち。日々の糧を

得るための、荒れた手。
その周りを飛び交う、ちょうちょ、ちょうちょ、ちょうちょ。
そして、見渡す限りの黄色い花。

ああ、この花は何と云うのだろう。くるくると回って、きれいだった。
青い抜けるような空。ああ、明るい。はじめて、見た。もっと、もっと、もっと。

興奮にぼぅ、となっているエンジュの手を握り、兄は風を解放させる呪文を唱えたが彼女の呼気で縛られた風は、変化しなかった。
『強すぎる、』
と彼は小さく舌打ちをしてから、自分の指先を歯で噛み、血を餌に風を元の姿に戻してから、言った。

『いいか、エンジュ』その声は、低く憂いの響きを含んでいた。
『絶対にその力、あいつに知られてはいけない。絶対にだ』

「あいつ、って誰だったのかしら?」

エンジュは口の中で、呟く。
あの日以来、兄の彼女に対する態度が変化したように思う。
以前と同様、軽い口調と穏やかな物腰、からかう様な仕草は変わらなかったが、時折、困惑にも似た表情がよぎることがあった。
その理由を問いたいと彼女は思う。しかし、まだ今年は兄の帰省が許されていない。

「…エンジュ様、お聞きですか」
彼女は、意識をオノセに戻した。
「何、オノセ」

「お召し替えのお時間にございます、本日はご当主にご挨拶なさる予定です」

エンジュは内心で、重いため息をついた。

7

オノセが5本爪の龍が縫いとられた蒼のとばりをまきあげ、控えの部屋に彼女を通す。

香炉からゆるく煙がくゆり、侍女たちが反対の部屋から装飾品や衣を手に入ってくる。

日に3度の召し替え。

人に会うことがあれば、その数だけ着替えの数は、増えた。

地には極彩色で織られた足元までのオーバドレスの上に、胸の下で、幅が指4本程度の太さの帯を巻きつけ結ぶ。これがこの国の女性たちの一般的な装いだ。

改まった場にでるときは、地の模様がうつる薄物をドレスの上に幾重にも重ねたり、下に織りの違う裾を重ねたりという重ねの色合いを楽しむ衣装が好まれる。エンジュの場合、普段着とは言っても、オーバドレスの上に色みの違う青を2枚も重ねている。

貴婦人たる者、たくさんの重ねを着崩れせず纏い、重さも感じさせないよう、優雅に動くことを求められる。貴族の女性たちの日常と云われれば、仕方のないことなのだが、自室といくつかの部屋の行き来のみが平生のエンジュには、幾度もの着脱は煩わしいことこの上ない。

勿論、オノセをはじめ、彼女に仕える侍女たちは、青家のひとり娘である彼女を華やかに着飾ることが誉れであり、当然であるとの認識がある。

それにしても、衣が重い。

エンジュは、銀の腰帯びを結んでもらいながら、思った。

身にまとう絹には、全面に錦糸の刺繍が施されているからだ。頭

ももげるほど、重い。
背を覆う髪は複雑な編み込みで半分ほどが結いあげられ、その上に翡翠玉のついたかんざしを6本差される。
しゃらんしゃらん、と華奢に揺れるかんざしがどれほどの重さなのか、見ている者は考えたことがあるだろうか。

侍女がオノセに水差しを差しだす。
エンジュが水に浮いた花の中から、青い花の蕾を指さすと、オノセが慎重に手に取り髪にさしてくれる。鏡で位置を確認する。

「いいわ、ありがとう」
ほぅ、と侍女たちがため息をつく。彼女たちのため息は、エンジュのものとは違う。
賞賛であり、感嘆であり、満足の色なのである。

エンジュは背筋をのばし、頭を揺らさないように歩幅を小さくとりながら部屋を出た。
オノセがすぐ後ろを歩いてくるのを承知で、うめき声をあげてみせる。
「服も髪も重い」
「何をおっしゃいます、女は我慢ですわ」
平然と、オノセが返す。
何を言っても無駄な気がしたので、せめて顔つきに不満を浮かべて、エンジュは廊下を歩く。

幾つもの部屋を通り過ぎ、幾つもの角を曲がる。
「もっと、にこやかなお顔をなさいませ」
「気分が悪いのだから、これが精一杯よ」
鼻を鳴らして、エンジュは答える。
蝋燭の炎が紙を通して、明るく足元を照らす。昼間なのに、勿体

ないことだ。
夜には、光々と明かりがともる。この明かりの番をするためだけの召使が、邸には十数人もいるのだと、兄君が教えてくれたことがあるのを、エンジュはぼんやり思い出した。

行きかう人々が、脇に控えて頭を下げるなか、エンジュとオノセは、中央を進んでいく。
その時、行く手の角を曲がってこちらへ来るひときわ美々しい女性の一団が目に入った。
エンジュは、オノセに目配せすると廊下の端へ寄った。

「ごきげんよう、」

一団の中心を進む女性は、エンジュの前で足をとめ、そっけない挨拶を寄こした。
ナルミヤだ。彩模様の扇で顔の大半を覆っているため、表情はほとんど窺えない。

帝の近親にしか許されない黄の絹を幾重にもあわせた衣装。
冠のように飾り玉が額に幾筋も揺れるかんざしは黄金でできており、左側に結いあげた髪は黒く豊かにまとめられている。
白いかんばせは人形のように硬質で若々しく、実際、年齢もエンジュとは姉妹といっても通用する。
美しく整えられた手に持つ扇からは、貴族の女性たちに最も珍重されている百合の香がつん、と匂った。

エンジュは極めて事務的に膝を軽くおった。
「ごきげんよろしゅう、お母上」
この挨拶に、相手はわずかに険のある眼差しを向けたようだった。

しかしエンジュは気付かぬふりでオノセを促し、歩き出す。
その背中へ、棘のある言葉が投げかけられる。
「可愛げのない娘だこと」

十二分に離れて次の廊下を曲がったところで、エンジュは長く吐息をついた。
「お母上は、相変わらずね」
「気になさいませんように」

オノセが慰めたが、エンジュはこうも毎回刺々しく顔を合わせられるのは、避けたいと思ってしまう。
ナルミヤは父君の最も新しい、かつ唯一の妻だ。
現帝の異腹の妹宮である。妾妃から生まれた皇女としては異例の、一品の身分を賜って青家に降嫁してきた。
この婚姻は先帝の遺言だったとかで、当時くちさがない年配の侍女たちなどは、父君がナルミヤをめとる為に先妻たちを呪い殺したのだ、と噂した。

まだ年若く気位の高い姫宮と、エンジュとの親娘関係は、そんなわけで最初から芳しくない。
それでも同じ邸に過ごすようになって、6年が経とうとしている。

「3週間ぶりだわ」
エンジュは、オノセに苦々しく呟く。
父君とは、もっと会っていない。ともすると、顔さえ忘れてしまいそうになる。
挨拶の時間を意図的に作らねばならないほど、彼女の家族関係は希薄だ。

父君は、エンジュだけでなく一人息子の雨音（ウオン）にも全くと言ってい

いほど、関心を持っていないようだった。

8

回廊を出ると、よく磨かれた青石で敷かれた玉砂利が広がる庭園に出た。

青家の本邸は石庭で名高く、雨が降ると琴をはじくような音が響く。

代わりに、花や木など生きたものは配されていない。

都の喧噪のなかにあるとは思えぬほど、硬質で静謐な邸である。

屋根つきの東屋を結ぶように舗装された小道がゆるやかに延び、エンジュは歩調を落としてオノセに並んだ。

「父君はいつお戻りに？」

エンジュは話しかけた。

「一昨日、とうかがっておりますが」

「皇宮から？」

「そのようですわね」

オノセは答えながら難しい顔つきで、考え事をしているようだった。

「先ごろ、西家を通じ、和約のための隣国の使者が到着したとか」

「西家？」

ええ、とオノセはうなづく。

西家は、文字通り帝国西部を治める大諸侯だ。

東を治める青家とは同格の『大公』の位を与えられている。

本家である白家（ハク）は、とうの昔に断絶しており、今はその流れをくむ１２の分家が持ち回りで当主の座に就いている。

西と言えば、半島で国境を接するグルジムカである。
屈強な騎馬軍、圧倒的な行軍力で周辺国を脅えさせる、巨大な軍事国家。
長年、帝国とは戦火を交えてきた相手だ。

「和約？」
意外な響きにエンジュは首をかしげた。
積雪のための中断はあっても、停戦や和約などという言葉は、好戦的なグルジムカが使うことなどない。
「国境の砦から出撃した我がほうの少数部隊が、奇襲によってグルジムカの騎馬軍を壊滅せしめた、と聞きましたわ」

奇襲。エンジュは確かめるように、くりかえした。
奇襲とは、騎士の風上にもおけぬ策。
その策をとらねばならぬほどの不利な戦であったということか。

エンジュは胸に痛みを覚え、頭1つ分背の高いオノセを見上げた。
「勝ったの？――和約の条件は、」
エンジュの問いに、オノセはめずらしく逡巡してから口を開いた。

「西家の公女と、グルジムカの王太子の婚姻。および、捕虜の交換です」

「西家の？」
皇族や王家の姫ではないのか、と尋ねるエンジュに、オノセは説明を加える。
「おそらく、こちらの国情をくんでの申し出だと思われますけど」
帝国は今まで、皇女を異国へ嫁がせたことがない。
それで、国境を接する西方諸侯の娘を、ということか。

「騎士たちが無事でいると良いけれど」
「姫、」
エンジュは、この条件から勝利ではないことを悟った。
それでもここでは、負けたと口にすることはできない。オノセが眉根をよせる。
「彼らが無事に帰還することを祈りましょう」

二百数十年の長きにわたり、この国の中央政治を牛耳ったのは、『国首の君』と呼ばれた青家の一族であった。
国を閉ざし、和をもって統治しようとした代々の国首たち。
しかし二百年もたたぬうちに、汚職と暗殺が横行し、内側から腐っていく果実のように、政情は悪化の一途をたどった。
変革が叫ばれる中、２０年前、先代国首は政権を再び、お飾りだった帝のもとへ戻したのだ。

一見落ち着いたかに見える帝国の内実は、内部の瓦解と並行し、外部からの侵入に悩まされ続けている。
呪術と異能の少数集団で国の根幹を支えてきたが、それもこれ以上続くかどうか。
特にここ数年は国境があわただしく、西方地域をあずかる白家の一族は苦しい負担にあえいでいる。

「このままでは、西から帝国は崩壊するでしょうね」
エンジュは、強く言った。
オノセは、慌てて彼女の口をふさぐ。
「し。どこに耳があるかしれません」
「かまうものか。ここにいる私が何をできるというの」

「父君は何と？」
「わたくしには、分かりかねます…ただ、手をこまねいておられる

わけではありますまい」

表で取次をすることも多いオノセは、父君の置かれた政情をおぼろげながら描くことができるのだろう。

ため息をつく。

「たとえ今は『宰相の君』とはいえ、総ての権力を手にしているわけではありません。それよりも」

オノセの口調が変化する。

「エンジュ様、幾度も申しあげておりますように、力を使って厄介なことに首をつっこんではいけませんよ」

「厄介なことって？」

「あなたの趣味の、例ののぞき見です」

ずばりと言われ、エンジュは口をとがらせた。

兄君から教えてもらって以降、風をつかまえて外の世界をのぞいていたのをオノセは知っていたらしい。

「迷惑はかけてないわ」

「必要のない力をお使いになることが、迷惑というのです」

いつもの繰り言だ。

オノセは、どんな簡単な術であってもエンジュが異能を使うことを嫌がる。

なぜ、と訊いてもはぐらかされるばかりだ。

エンジュは分かった、と頷き、それきり会話は途絶えた。

しばらく進むと翠の玉で屋根を敷かれた壮大な建物が、姿を現す。

ここは父の居宮、すなわち「表」だ。

長く広い大階段を登りきると、侍従が進み出て、オノセに耳打ちする。

階でとめられるなど、普段では考えられない。

エンジュは横目でオノセの表情をうかがったが、その白い顔に何の色も読めなかった。

しばらくして二人は奥から出てきた別の侍従の案内で、当主・青龍（セイリュウ）が私的な応接に使う部屋の前に立った。

ここからは、エンジュひとりだ。

9

「父君、エンジュです」

低く応えが返り、エンジュはなかへ入った。

額の前で両手を組み、膝を軽くおり礼をとる。

「やぁ、これは大した貴婦人ぶりだね、エンジュ」

明るく、屈託のない若い声を聞いて、彼女はまさか、と顔をあげた。

そこには、1年ぶりに見る兄の姿がある。ゆるく波がかった髪が肩まで届いているのと、身長がずいぶん伸びたような気がすること以外は、去年のままだ。

彼は長椅子から立ち上がり、にっこりと笑った。

「兄君！」

「ただいま」

彼女は父の部屋だということも忘れて、歓声をあげ、兄に抱きついた。

「そんなに歓迎してくれるなんてね、僕も帰ってきたかいがあるってもんだよ」

と、彼らしい軽口で妹の手を取って「ねぇ、父上」と振り返った。

「雨音（ウオン）、」

冬の朝の池にはった氷のような声音で、父君が呼んだ。

彼は、良く磨かれた黒くて立派な卓の前に、座っている。右の脇には、書類の載った盆を持って書記官が立つ。

エンジュが見慣れた、ここのいつもの風景だ。

「なんです？」
父の声音にも、兄は自分のペースを崩そうとはしなかった。
父君は、左の眉をぴくりと動かした。これは、彼が気に入らないときの仕草だ。
エンジュは、父の叱責を予期して体をこわばらせた。

「下がっていい」
だが、父は息子に対してではなく、側の書記官に静かに言った。
壮年の書記官は目礼すると、家族を残して退出した。
彼が出ていくと、兄君はまるで嘘のように笑顔をひっこめ、エンジュの手をするり、と離した。
そうして苦々しげな表情で、長い手足を投げ出すように、椅子に深々と座りこむ。

「さあ、はやく聞かせてくださいよ。なぜ、貴方の前に兄妹揃って居るのかをね、父上」
「兄君」

エンジュが雨音に咎める視線を送れば、父が「おや、」とわざとらしく、彼女を見つめた。
初めて、娘がそこにいることに気付いた、とでもいう風に。
父君は静かに、机の上で両手を重ねる。

その左手の中指には、5本爪の龍が彫られた銀細工の指輪がはまっている。青家の当主・青龍（セイリュウ）のあかしである。
龍の目に使われているのは、さすように蒼く輝く2対のダイヤモンドだ。
この宝石には特別な力が宿っていると伝えられ、自ら持ち主を選ぶという。

右眼は『氷涙（ヒルイ）』、左眼は『流呼（リュウコ）』と呼ばれている。
今は「流呼」が嵌っていない。
父君が最後の国首の座を帝に返還した時、離れたという。
エンジュはいつも、目を見ることができなくて、指輪の嵌った父君の美しく女性的な手に視線を落としてしまう。

父君の声が落ち、エンジュは顔をあげた。
「四宮（シミヤ）が、神殿より戻ってきた」
青龍は、微笑をうかべている。

不満げに結ばれた兄君の口がぴくりと動いた。
「皇太子が内定したのですか、」
「そうとは言っていない」
「では――――」

「確かに彼は、有力だ。お前もいずれ任官しよう。その目で、見たいかと思ってな」
父君は、造作の良く似た息子に視線を投げる。
背に流れる波立った髪も、神経質そうな眉も、高く整った鼻梁も、広い額も、うすく引き結ばれた唇も、雨音が年をとればかく、とばかりの類似。

２人の圧倒的な違いは、ただ体にまとう力の差である。
溢れんばかりに立ち昇る父の異能に対して、兄のそれは仄かに体にまとっているに過ぎない。

「いずれ、であって、今ではありませんよ」
「しかし、見極めねばなるまい」

邸の奥からほとんど出ることのないエンジュには、一体、父と兄が何を話しているのか、深くは分からなかった。
不可解な表情が面に浮かんだのだろうか。父君は不意にエンジュに目をとめた。

「ときに、そなた。幾つになった？」
「…16です」
困惑しながら、こわごわエンジュが答えると、青龍は一瞬、安堵とも苦みともつかない曖昧な表情を浮かべた。

「エンジュの年が、いかがしました？」
兄君が先を制するように父に尋ねる。
父は兄に視線を戻すと、娘の顔も見ずに言った。

「嫁がせる。白桜（ハクオウ）家の嫡男だ。そう悪くはあるまい」
「それは、…決定なのですか？」
エンジュの声が自然と震える。
「不満か、」
青龍はエンジュに視線を戻したが、その顔に感情らしきものは浮かんでいない。
彼女は直ぐ首を振った。
「いえ、ただ…」

しかし、突然のことに、口を開いたはいいが何を話していいのか分からず、結局、もう一度首を振って黙った。
「父上、そのようなお話は――」
と兄が抗議の声をあげたが「反論は許さぬ」との父君の一言に押し黙る。

まさに寝耳に水とはこのことだ。

長い沈黙が落ちる。
エンジュは唇をかみしめた。父の考えていることが知れない。

「どのような相手か聞かないのか」
しばらくして雨音がエンジュをうながしたが、彼女は直接それには答えず、棒のように強張った足を前にすすめ、父君と黒い机を挟んでむきあった。
奇襲によって敵国に勝利したという情報。
同じ位階にあるとはいえ、宰相をつとめる青家と分家の白桜の婚姻。

「嫁げば、おのずと知れましょう――父君、」
「何か」
「父君は西家に、いえ、敵国グルジムカに譲歩したのですか」

10

「父君は西家に、いえ敵国グルジムカに譲歩したのですか」
そのひと言に青龍の表情が一変した、と思った途端、ごおっ、とエンジュの体を黄金の炎が包み、芯からもえあがる激痛が彼女を襲う。

あつい、あつい、あつい、あつい、あつい！
もえている！！

「父上！！」
慌てたような兄君の声が聞こえ、ああ、父君がお怒りになったのだ、とエンジュは痛みに崩れそうになりながら、思った。
この業火は、父の放った力だ。

「せいぜい、婚家ではその口のきき方に気をつけるがいい」

父君はそう言い捨てると、椅子から荒々しく立ちあがり、部屋を出て行った。
エンジュは父の退出と同時に膝から崩れ落ち、心の臓を焼く熱さに床をのたうちまわったが、けっして悲鳴を上げまいと奥歯をくいしばる。
目じりから涙がこぼれた。

何分激痛に耐えただろう、次に意識がはっきりしたときには、彼女はオノセの腕の中にいた。
火は見えない。
ほっと息をつき、ぼんやりと目元をぬぐうと焦点がはっきりし、オノセの顔が見えた。

いつもの美しい顔が涙で汚れている。

傍らには、兄君とコウヒの姿もある。

兄君は、口もとをひき結んで感情をこらえているようだ。

「…コウヒ、来てたの」

声をかけると、赤い目でエンジュを覗き込んだ。

怒りのような、悲嘆のような複雑な色が浮かんでいる。

「青龍さまに何をおっしゃったのです？」

「父君は、グルジムカに屈したのか、と聞いた」

エンジュは軽く笑ったつもりが、喉の息がひゅうひゅうと鳴って、あえぎ声のようになってしまう。

体に力を込め、半身を起こすと、びりびりと皮膚にこするような痛みが走る。

特に、むきだしになった両の手が痛い。手の甲を確認すると、肌が赤く染まっていた。

鬱血している。

「なんということを、」

コウヒは呻き声をあげたが、エンジュは意に介さなかった。

両手をとられ、低い声でオノセが癒しの呪文を唱えているのをぼんやりと聞く。

このあたりで済んで、幸運だった。兄君がかばってくれたのだろう。黙って膝をついている雨音に目を向け、エンジュは謝った。

「兄君、心配をおかけしました」

「…全く。寿命が縮んだ」

彼はいつものように、片手でエンジュの頬に軽く触れてくる。
鼻に、かすかに腐臭がついた。

エンジュは、まさか、と兄の反対側の袖口をぐい、と引っ張った。
布のぬめるような感覚に、やはりと納得する。腕に走る一筋の傷口。まだ、鮮血がにじんでいる。

「血をお使いに？」
「…少しな。お前が気にするほどじゃない」

そうは言っても、手首から肘にかけて伸びた傷では、相当の血を贖ったに違いなかった。
兄の青い顔を見ながら、エンジュは「ごめんなさい」と再び詫びる。

ただ、知りたいことは知れた。父は、先の西部戦線での大敗、あるいは失策を知っている。
そして、どうやら、グルジムカに譲歩しなければならない状況に追い込まれているらしいということも。

「すまない、お前の盾にはなれなかった」
父の力は強大で、到底僕は及ばない、と雨音が静かに言い、エンジュはその声の響きに胸がつかれるような痛みを覚えた。

『血を用いるのは、最終手段です』
神から与えられた異能という恩寵を制御するために、エンジュは幼いころからそう繰り返し、繰り返されてきた。
力を持った大量の血はまた、邪気をも呼びよせ、果てには持ち主をのみこんでしまう、と。

勿論、兄君も同様であるはずだ。

辺りには朽ちる寸前の花のように甘い匂いが漂い、兄の血を媒介とする術だと知れたが、その他にも、多数の術の残り香が鼻をつく。兄の『声』や『息』では、父の術に太刀打ちできなかったらしい。雨音は、黙ったままのエンジュに視線を転じた。

「申し訳ございません」
と、オノセがうなだれる。
「お前を責めてはいない」
「ですが、」
「いい、僕が側にいたんだから」
オノセはエンジュの教育係として、この状況に、責任を感じているらしい。
だが、雨音はそれには頓着せず、ふっと嘆息する。
「この程度ですんで、まだ良かった」

それより聞きたいことがある、と雨音は強い口調で言った。
オノセは顔を強張らせたまま、頷く。

「…皇宮のことだ。僕は学院から戻ったばかりで情報が不足している」
「神殿から、皇子が戻られたというお話でしょうか？」
「そう。父上は見極めるとおっしゃっておられたが…」
「帝の希望であらせられる、とは聞いたことがありますけれど」

「不可解だ…」
オノセの返事に、うーんと雨音は唸り、顎に手をやってしばらく考えこんでいる。
そのとき、外から彼を呼ぶ声が聞こえた。

「若、そろそろお時間です」
「分かった。すぐ行く。オノセ、君も来てくれ」

雨音は扉に返し、床に座り込んだままのエンジュに向き直った。
そのおもては、軽薄な普段の調子とは全く異なっていた。
「僕が言うべきは、１つだ。
父を怒らせるな」
僕ではお前を助けてやれない。

そう言って立ち上がると、エンジュとコウヒを残したまま、振り返らずに扉の外へと消えた。

11

コウヒは口をぎゅっと結ぶと、黙ってエンジュを立たせた。
帯を解いて多少汚れた上着を脱がせる。
重ねを2枚も脱げば、随分身軽になった。ふたたび帯を簡単に結びなおした。
スカートを直すと、足元にかんざしの花が落ちているのが目に入った。
いつの間に踏んだものやら、花びらが割れ、破片が飛んでいる。

「兄君は悪くないわ」

エンジュは手伝おうと手を伸ばしたコウヒを制し、乱れた髪からかんざしをひきぬいて、手早く髪をすく。
編み込みを解いて頭を振ると、背中へゆるく髪が滑り落ちた。
重さと痛みに解放され、エンジュはようやく顔に表情が戻るのを感じた。

「コウヒ、私、結婚するんですって」
コウヒの顔が再び凍るのを見ながら、続ける。「西家に」

「どなたにですって、」

コウヒの悲鳴のような声に、エンジュは肩をすくめた。
「別に、それで父君に逆らったわけじゃないわ」
「勿論です。それにしても…西家のどの家です？」
西家（ハク）白家は、血筋が絶えて久しい。現在はその流れをくむ、１２

の分家が西方諸侯連合という形をとって、西部地域を治めている。
家同士の諍いと権力集中を防ぐために、独特の慣習で当主・白虎（ビャッコ）の地位を守っているのだ。
それが、『白虎の地位は、持ち回りの7年任期』というものだ。

「白桜（ハクオウ）の嫡男だったと思う。悪くはあるまい、とおっしゃったわ」
「それは、…しかし」

コウヒの微妙な反応に、リュウカは心配になってきた。
もとより、青家の娘に生まれたからには、政略結婚など覚悟の上だ。
家格と政治的配慮の上、嫁ぐことが生まれたときから運命づけられている。

「もしかして、…すごーく年上とか、たくさんの奥方をお持ちだとか、醜男だとか」
「ご存じないのですか、」
「何が？」

ああ、とコウヒが大仰にため息をつく。
「あなたはきっと、宮廷では生きられませんわね」
オノセの苦労が手に取るように分かります。

各々の家の因縁や家族構成、地位や財政状態を頭に入れておくのは、貴族としてのつとめだ。
生きる術なのだから、と常々オノセはエンジュに言い聞かせていた。
普段の勉強が全くエンジュの身になっていないことを知って、コウヒは天をあおぐ。

「兄君もその点、あまり世渡りがうまいとは言えないわ」
口をとがらせて、エンジュは自己弁護した。「私は、いいのよ。だって、あなたやオノセがいるもの」
口元を引き上げると、にっこり笑う。
「それで？」

コウヒはため息をつき、
「私はもとより、オノセが嫁ぎ先までご一緒できるかは、わかりませんよ」
と言おうとしたが、結局口にはせず、エンジュをうろんに見返した。

「確か現在の白虎は、蘭家（ラン）がついでいます。私の記憶に間違いがなければ、白桜の公子は、蘭の公女と婚約していたと思いますわ…。血の近さから帝が渋られたのを、神殿のとりなしで許されたとか」
「じゃ、わたしは二号さん、てことかしら」

「まさか！」
コウヒは鼻白んだ。「青家の公女が！万が一にも起こりえません」
歴史ではあったわ、とエンジュは心の中で反駁する。
青家が帝に代わって国首の座に在り、並びない権勢をふるっていたころでさえ。
氷姫と呼ばれたサテや、大公女の位を剥奪されたナユタを、歴史学者の卵であるコウヒが思い至らぬはずない。

しかし、エンジュはそれを指摘しなかった。別の考えにとらわれたためだ。
「コウヒ、なぜ白桜なのかしら」

父君の怒りを考慮に入れれば、西家の騎士たちは善戦はしただろ

うが、戦火に散っただろう。
なのに、父君は西家にエンジュをやるという。しかも、現白虎の家族ではない。
何が、父君を決心させたのだろう。
エンジュは、父の使える唯一の娘である。
そう安売りするとも思えないが。

「何かありそうですわね」
「…お母上はどうかしら？」
コウヒに提案してみる。

こちらへ来るときに、鉢合わせしたということは、ナルミヤも父に会ったに違いなかった。

12

「それで？わたくしに聞きたいこととは、」

まさか、入室を許されるとは思わなかった。

コウヒとしては、ナルミヤの居住する東殿で侍女たちに少し話が聞ければよかったのである。

ナルミヤの居室に案内され、椅子をすすめられ、皇女にお茶を振る舞われるとは思ってもみなかった。

湯気の立ちのぼるカップに口をつけて、初めて嗅ぐ異国の香りに瞠目する。

「これは、」

「どうだ？気に入ったか？」

ナルミヤは口元を引き上げて、ほほ笑む。

そうすると、彼女は廊下で行きかう印象より、ずっと、若々しく見えた。

そういえば、この方はまだ３０歳にもなっていないのだ、とコウヒは思い返す。

「はい、とても。大陸東部からの舶来ですか？」

「ああ。近頃は異国のものを容易に手に入れることができるようになった」

穏やかなオレンジ色をした飲み物に、ナルミヤは目を細める。

コウヒは、そういえば、と部屋に目をやった。

四方の壁全面に掛けられた刺繍の壁掛けは、よく見れば幾何学模様で、染めの色づかいから、帝国のものではないと分かる。

今、自分たちが座っている椅子も、目の前のテーブルも、飾り戸

棚も。

「わたくしに尋ねても、お前の欲しい答えは得られぬだろうよ」

ナルミヤはコウヒを見つめながら、そう言った。

2人きりで、これほど近い距離で話をするのは初めてだった。

目じりを赤く引いた一重の瞼は、ナルミヤをひときわ近寄りがたく見せる。

額の中央に描かれた赤い花びら模様は、皇宮の女性独特の化粧だ。

ナルミヤの降嫁に際しての条件の1つが、嫁ぎ先でもこの宮風を通すことであったという。

「奥方さま…」

「ああ、それはやめよ」ナルミヤは気分が悪そうに首を振る。

「その呼び方は好かぬ」

「申し訳ありません、宮様」

「あれの婚約のことだろう?先ほど、わたくしも青龍から聞かされたところ。上は承諾なさるまいと、わたくしは言っておいた」

「帝が?」

なぜ、帝がエンジュの婚姻に関心を示すのか。

コウヒの問いかけるような表情を読んだのだろう、ナルミヤは分らぬか、と苦く笑った。

「あれの継ぐ血を考えてもみよ。西の辺境だと?いらぬ騒乱を招くわ」

「エンジュ様を、…ご心配くださっているのですか」

まじまじと皇女を見つめてしまう。

エンジュとナルミヤの仲の悪さは、周知の事実だった。

一緒に訪ねよう、と言ったコウヒに、エンジュが返した言葉がそれを示している。

『わたしは、あの方に嫌われているし。行っても会ってくださらないでしょ』

正確には、会ってくれないではなく、会わないようにしている、だ。

エンジュは、ナルミヤの居住空間に接触しないように、出遭ったときは叱責を受けないよう目を伏せている。

何が厭というのではない。初めて挨拶を交わした時から、ナルミヤは刺々しい態度だったらしい。

思い出したくもない、とエンジュは言う。

「わたくしが？」

まさか、とナルミヤは紅い唇を1度歪めた。

「傍にはそなたやオノセがついておろう、」兄もおれば、父親もおる。

「わたくしは、あれの母にはなれぬ」

母というほど年もはなれておらぬし。

ナルミヤはカップを口に運んだ。

その洗練された手つきと、染み1つない白い手が、何よりも雄弁に彼女の立場を語っているように思えた。

「では、なぜ私をここに？」

「なぜであろうな…」

コウヒの疑問に、皇女は面倒だとでもいいたげに、首を振った。

「エンジュは好かん。聡いわりには、頑固で若い。ゆえに、危うい。――しかし」

それをそなたに、言いたかったのかもしれぬ。

ナルミヤは、ふ、と息を落とした。

これほど側に寄りながら、コウヒはナルミヤを覆う異能を殆ど感じないことに、ふと気がついた。

『帝が、国一番の術者である』とされるこの帝国において、皇族にこれほど力が感じられないのは珍しい。

コウヒは、まじまじとナルミヤの枯葉色の瞳をのぞきこんでしまう。

「それに」

とナルミヤは言った。

「それに？」

繰り返したコウヒに、そなたには分らぬであろうが、と穏やかな声のまま告げる。

「わたくしも現状に甘んじているわけではないのだ」

13

ここ帝都の冬の到来は、貴族たちによる華やかな祝宴によって幕をあける。

冬のシーズンを祝う催しが離宮で行われると聞き、兄君はエンジュを伴って参加することに決めた。

エンジュの婚約は既に3週間前に公示され、雪で馬車が動けなくなる前に西家の拠点、彩白（サイハク）へ向かうことが決定していた。

いわゆる足入れ婚である。

今夜の祝宴で、エンジュは非公式にではあるが、帝に謁見し、婚姻の認可を賜ることになっている。

父は接見役を、雨音（ウオン）に総て任せると言って、出てこようとはしない。もちろん、ナルミヤもだ。

エンジュは、朝も早いうちから、長時間大鏡の前に座らされた。

髪に香油を塗られたうえ、たんねんにくしけずられ、細やかに編まれていく。

侍女に渡された手鏡でエンジュが後方の髪型を確認していると、背の高い兄君がさっそうと入ってくるところだった。

「エンジュ、どうだい？用意は――――」

そう言うなり、彼はしばし我を忘れたように、鏡越しに妹の顔を見つめた。

エンジュが首を傾げると、雨音はああ、と息をつく。

「本当に綺麗だ、エンジュ。これならば、どんな美姫も顔色をなくすだろう。なあ、リド」

戸口を振りかえると、笑みを浮かべながら1人の青年が部屋へ入

ってくるところだった。
「あきれるほどのシスコンぶりだね、ウオン」
「まあ、リドお兄様！」

久しぶりに会う母方の叔父に近づこうとしたが、長い裾に足をとられ倒れそうになった。
とっさに、伸ばされたた手にすがりついて態勢をもどす。
「気をつけておくれよ、エンジュ」
「ありがとう、リドお兄様」
どういたしまして、会いに来てくれて嬉しいわ、私も嬉しいよ、と会話が続いたところで、横から不機嫌な咳ばらいが聞こえた。

「妹から離れろ、リド」
「何を怒ってるんだい？君は」
「何も」

むっつりと言う雨音に、リドは苦笑いをしながら、距離をとった。
リドは叔父とはいっても、乞われてエンジュの母の実家へ養子に入ったもので、直接的な血縁関係はない。
『緋の学院』では雨音の学友でもあり、今日はエンジュたちと共に参内するという。
彼自身、既に伯の位を賜っており、若輩ながら領地もあずかっている。

「ここへは遠慮しようと思ったのだけどね。どうしても、ってウオンが言うから来てしまったよ」
エンジュの頬に片手を添え、にっこりとカラは笑いかける。
もう一方の手には白い小花がぎっしりとつめられた籠が握られている。

「それは？」
「贈り物だ。君へ」
エンジュは差しだされた籠を受け取る。
粉雪のような花は可憐で、まだ朝露が残っていた。
きれい、と声を出さずにつぶやく。
リドは瞳をすがめるように笑みを刻んだ。
エンジュはその顔を眩しそうに、見上げる。

白皙で線が細く、いかにも貴公子然としたリドは、プレイボーイとしてあちこちで浮名を流しているのだと、兄君はしきりにエンジュに語って聞かせていた。

「…でも、私にまで、こんなことをしていただかなくてよかったのに」
「え、」
と尋ね返すリドと同時に、雨音が何かをこらえるようにせき込んだ。

ひと息、沈黙したカラは意味を理解するに及んで、ちらりと友人に目をやる。
「…へえ」
「おいおい、なんだよ。その目」
「エンジュ、教えてくれるかな。ウオンはなんて言ってるの？」私のこと。

口元を引き上げて穏やかそうに微笑んでいたが、目は笑っていない。
エンジュは雨音を見たが、兄は決して彼女と目を合わそうとしなかった。

戸惑うエンジュが、リドに視線を返す。
「もしかして、こんな風に？」
と、リドは彼女の耳元に顔を寄せて囁いた。

そして、頬にかすめるような口づけを落とす。
額で分けた長い黒髪が揺れ、離れるときにリドの香がにおった。
「おい！！」
兄が顔を上気させて怒鳴った。
ふふ、とリドは軽く笑う。
「君の、その顔ったら…。第一、その花は私からじゃないよ。邸の前で言付かったんだから」
からかわれたと知って、いっそう雨音は顔を赤らめる。

「お楽しみのところ、申し訳ありませんけど、時間ですわ」
戸口に、コウヒが立っていた。
耳元で2つに結いあげた髪は豊かで、額をかざるクリスタルがきらきらと輝いている。
エンジュがどうしても、とお願いして、今日はコウヒにも参加してもらったのだ。

「やあ、コウヒ。いつもながらきれいだね」
リドが近づき手を伸ばしたところを、コウヒはさっとよけてにっこり笑った。
「いつもながら歯の浮くようなセリフですこと」
「あなたしか、見ていないからね」
「まあ、お上手」

リドの言葉に感情をこめずに答え、コウヒは、エンジュに提案する。
「少しさびしいわ。しあげに、髪にその花を飾ってはどうかしら、」

エンジュが大鏡ごしに、リドを見る。

「それは――――」

と声を濁す雨音に被せるように、「まあ、よい考えですわ」と侍女たちが口ぐちに歓声をあげる。

「贈り物を身につけて、あちらで出会われるんでしょう？ロマンチックですこと」

「あなたたち、すこし騒ぎすぎですよ」

オノセは若い侍女たちにそう注意してから、エンジュを椅子に座らせる。

「この花は使ってもよろしいのでしょうか？」

リドに確認をとる。

花の送り主が、エンジュの立場に不利に働かないかと聞いたのだ。

彼がうなづいた上で、オノセは籠から花を摘んだ。

編まれた髪の合間に、挿しこみ飾っていく。

「…さ、できました」

オノセが少し離れた位置から出来栄えを確認し、エンジュが雨音に手をとられて立つと、コウヒは頷いた。

頬を薔薇色に染め、白桜から婚約の祝いとして贈られた絹で仕立てられた白いドレスを身につけ、ゆるく波立つ長い髪に花を散らした少女の姿は、清楚な美しさで、まるでおとぎ話に出てくる精霊のように見えた。

「変じゃない？」

「まさか、」

完璧だ。そう雨音は言うと、侍女たちに扉を開けさせる。

「用意はいい？」
「ええ」
エンジュをエスコートする、誇らしげな雨音の横顔を見ながら、リドはコウヒに腕を差し出した。
「私たちも行こうか」
「はい」
コウヒが前をゆく兄妹に気がかりな視線を投げるのを見て、「君も複雑な心境だね？」とリドは囁く。
コウヒはそれには、一切答えず、ただ背を伸ばして美しい笑顔を見せた。

14

離宮の車寄せに馬車を停め、おりたったエンジュたちに、恭しく案内役が灯篭を持って、広間への道を示す。

今宵は離宮の人工池の上に設けられた大きな桟敷を幾つもつないだ屋形を会場として、宴が開かれるらしい。

護衛たちのかかげる松明の向こうに、ひしめき合う馬車が見える。

雨音は、「ご覧」と指をさす。

それほどの数の貴族が集まっているということだ。

「近隣国の商人、外交官なんかも来ているんじゃないかな」

リドが呟くのを、コウヒは耳に留める。

不意に、部屋を外国の物で取り揃えたナルミヤの顔が浮かんだ。

「帝は、外国（トックニ）に開かれた心をお持ちなのですね」

「まあ、国をひらくことを推し進められた方であらせられるからね、」

エンジュも雨音もまだ生まれる前の話だが、この国は長く鎖国政策をとって閉塞状態にあり、それを政変によって打開したのが、当時即位8年であった今の帝であった。

「リドお兄様、異国の方を見ることはできるの、」

「そうじろじろと見ないでおくれよ」

まあ、そんな行儀の悪いことはしないわ、と頬を膨らませるエンジュに、笑ってカラが言う。

「君に見つめられたら、勘違いしてしまう輩が出るかもしれないしね」

「そんなことにはならないわ。だって私、あと1月もすれば、西部へ嫁ぐのよ」
世間話をするかのようにあっけらかんとエンジュが答えれば、雨音が眉間にたて皺をつくり訂正する。
「エンジュ、嫁ぐのではない。お前は約定のため、西家へ居を移すだけだ」
「あら、どう違うの、」
どうせ、1年もすれば正式に婚姻を結ぶことになるんでしょ。
言い返したが、エンジュにも分かっている。
状況が変われば、彼女は白桜家の婚約者から人質となる。
あるいは、婚約は白紙となり青家に戻ることになるだろう。
最悪の場合、命で約定をあがなうことになるはずだ。
父君が交わした内容がどんなものなのか、知ることはできなかったけれど。
「ウオン様。約束をお守りくださいませ」
コウヒが釘をさすと、雨音は不機嫌そうに口を引き結んだ。
剣呑な視線をコウヒに投げたが、静かに視線が交わるに及んで、ふいと視線を外す。
リドはそんな友人を興味深そうに、じっと見つめていたが、不意に吹き出した。
「ああ、ほんとうに。なんて顔をしてるんだい、ウオン」
「ほら、行くぞ。もうそこだ」
雨音が仏頂面でエンジュの手をぐいぐいひいて歩を速めると、リドは苦笑しながらコウヒと続いた。

エンジュのすぐ後ろで、リドの笑う気配がする。

石の続き回廊からよく磨かれた漆ぬりの橋を渡ると、桟敷についた。

まるで、昼間のように光々と明かりがともされ、水面をきらきらと反射する。

先の広間からは、軽やかな音楽と談笑する幾たりもの声が華やかに耳に入ったが、リドによれば皇宮で催される祝宴としては、規模の小さなものであるという。

「招かれた面々も、それほど重みがあるとは言えない。若者が多いし、皆、軽装だ」

リドが囁いたのが耳に入ったが、初めて夜会なるものに参加するエンジュにとっては、比べようがない。

「父上がお前のためにこの席を選んでくれて、良かった」

雨音も言った。

４人は、鏡と蝋燭で照り映えるシャンデリアが吊られた広間へ足を踏み入れる。

入り口では侍従が朗々と口上を述べ、広間に入る客人たちの名を紹介した。

兄も修学中であり、このような場には慣れていないはずなのだが、そういうことを全く感じさせない、堂々とした身ぶりだ。

１の広間の奥、次の広間へ向かって、ゆったりと進みながら、知己の貴族に会えば軽くお辞儀をし、声をかけられれば和やかに挨拶を交わした。

エンジュも名を問われたら微笑んで答え、失礼にならないほどの

挨拶と世辞を受けることを繰り返した。
２つ目の広間の中ほどまできたとき、いつの間にか、コウヒとリドが消えていることを知る。
視線で２人を探すエンジュに、雨音は耳元で言った。

「２人になら、後で会える」お前の挨拶が終わったら。
その言葉に、エンジュは今日の目的を思い起こした。

それにしても、贅を尽くした夜会であることは、脇に並べられたテーブルのとりどりの花々や飲み物の豊富さ、珍しい食べ物にも見て取れる。
いよいよ冬も到来だと云うのに、溢れんばかりの花の数には、贅沢を知るエンジュでさえ、驚嘆してしまう。

高い天井からは、織りの美しい紗がいくつも流れており、テラスの明るさを調整している。
立食を楽しんだり、カウチでくつろいだりする着飾った人々の波を、２人は幾度も通り過ぎた。

15

「――ですか、姫君？」
「え？」

ぼんやりと意識を戻すと、赤いケープを身につけた明らかに外国の者と知れる壮年の男が、エンジュの返事を待つように目を覗き込んでいる。
「すまない、妹はこのような席が初めてなものでね」
少し緊張しているんだ。
雨音が苦笑いで、謝った。

エンジュは兄の言葉に赤面し、慌てて返事する。
「失礼しました、今なんと、おっしゃったのですか、」
「初めてでしたか、これはこれは…。今夜のお召し物は、彩白（サイハク）のものですか、とうかがったのです」
いや、わたしは織物の商売を手掛けておりましてね。
染めが余りにも美しかったものですから、と言う。

大陸南部に特徴的な舌を巻いた発音が珍しい。
遠くイスァンという国から来たというその商人は、しげしげとエンジュを、いや彼女のドレスを見つめた。

エンジュは首を傾げた。
自分が今まとう衣は、白無地で、ドレスとして仕立てるときに刺繍はしただろうが染めていない。
彼女がそう告げると、男と一緒に兄までもが笑った。

「エンジュ、その衣は薄く鈍色の光沢を持っているだろう？

蚕から糸を紡ぎ、特別な木から得られる液で染めた白だ。この国の…いいや、西でも一部の者しか身につけられない」

蝶丈白（チョウジョウハク）、というのだと、教えてくれる。

確かに、羽化した蝶が初めて翅を広げた時のような、濡れたような薄い鼠色に近い、えも言われぬ美しい光沢を放っている。

製法は口伝で、代々の職人たちしか知らないという。

「そうですか、これがかの…。わたしも、初めて見ました」

「妹は近々、十二西家へ嫁ぐことが決まっているのですよ」

ああ、道理で。と雨音と男との間で、笑みと頷きが交わされる。

「おめでとうございます、姫君」

「ありがとう」

エンジュが作法通り、軽く膝を折ったところで、雨音に腕をとられる。

「では、これで」

雨音は口元に笑みをつくったまま、エンジュを連れて歩き始める。

兄の笑顔が嘘ものだと知っているので、「どうなさったの、」と尋ねた。

「どうもしないさ」

「怒っていらっしゃる？」

「いいや、エンジュ。彼は確かめただけだ」

何を？と問う妹に、彼は唇を皮肉げに歪めた。

「噂を、だよ。青家の公女が婚約したと聞いて、本当かどうか確かめに来たのさ」

いかにも商人らしい方法でね、と付け加える。

「でも、わたしの婚約はおおやけにされたはずでは？」

「帝が認めなければ、貴族のどんな関係も許されることはない」

２人は、２つめの広間を出るとゆるいアーチの橋を渡った。
一層絢爛な３つ目の広間へ足を踏み入れる。
雨音は表情を消し、さきほどよりも強くエンジュの手を握った。

２人が歩みを進めるたびに、扇の奥で貴婦人たちがひそやかな会話が交わしているのが分かる。
どうやら、注目を集めているらしい。
居心地の悪さを感じながら、エンジュは自分たちが夜会の新参者で、しかも兄が青家の青をまとっているせいだろうと推測した。

16

ひときわ人だかりが出来ている輪の、その少し離れたところで、雨音は足を止めた。
「ここで待とう」

何を、と聞くまでもない。
広間の奥、一段高くなった場所には、玉座が据えられている。
椅子の背には、皇家を守護するという麒麟（キリン）が向かい合って四頭、黄金で彫られていた。
周囲の談笑の様子から察するに、まだしばらく帝の登場はなさそうである。

「ああ、ウオンじゃないか」
人だかりの中から、兄と同世代の青年たちがこちらに気付いて、親しげに声をかけた。

「なんだ、休暇は領地に戻るんじゃなかったのか」
「こんなところで会うなんて、驚きだな」
「どこの令嬢を連れてきたんだ、水臭いじゃないか」
「俺たちにも紹介しろよ、なあ」

あっという間に、背の高い十数人の青年たちに周りを囲まれ、エンジュは兄の背後に隠れるように息をつめた。

「なんだ、お前たちか」
「なんだとはなんだ、お前こそなんだよ、その服」
「その言葉、そっくりお前に返してやる」
野次にも似た笑い声がどっと上がる。

くだけた調子で語られる言葉とは裏腹に、彼らの発音は生粋の都周辺の上流貴族のものであり、衣装は贅を尽くしたものだ。
「おい、やめろ。妹が脅えてるだろ」
後ろをのぞき込もうとする青年たちを、片手で払うようにあしらい、雨音もずっと気楽な調子で答えている。

「妹ぉ！？」
おお、とどよめきのような声があがる。
「おう。俺たちは帝へ挨拶に来たんだ、親父の命令でな。絶対、邪魔するなよ」

家にいるときでさえ聞かない、ぞんざいな口ぶりで釘をさす。
初めて兄が、『俺』『親父』というのを耳にした。
ただ呆気にとられていると、雨音がくるりと振りかえって彼女に言う。

「学院で一緒のやつらだ。面倒だから、お前は挨拶しなくてもいい」
「ウオン～」
「おいおい！」
「薄情な奴だな、」
すぐさま、抗議の声が同時に上がる。

エンジュはついと笑ってしまった。
兄の学院生活の一端が垣間見えたようで、嬉しかった。もう怖くない。
雨音の横に並んで、彼女は作法の教師が完璧だと太鼓判を押したお辞儀をする。

「初めまして、皆さま。エンジュと申します。兄がいつもお世話になっています」

「世話してやってるの間違いだな、」

雨音が口をはさんだが、それには答える者はなく、その場には静かな沈黙が落ちた。

数秒後に、ため息にも似た感嘆のどよめきが彼らからもれる。

我に返って最初に口を開いたのは、雨音に気付いた特に大柄な青年だ。

「私は、都の北に領地を拝領しております、瑛周（エイシュウ）の子伯ヒロセです。お見知りおきを」

「あ、抜け駆けだぞ！」

私は、私は、とエンジュは一瞬で輪の中心にひきいれられ、身をのりだすように次々に名乗られる。

彼らの笑顔が少し怖い、とエンジュは思った。

「おい、ウオン。俺たち、お前から妹の話なんか聞いたこともないぞ」

「そうだ！なんで今まで隠してた、」

兄は「やれやれ」と肩をすくめると、仲間たちに宣言する。

「そりゃそうだ。お前たちになんか、言えるか。手を出すなよ」

すでに嫁ぎ先は決まってる。

その言葉に、青年たちから一斉にブーイングが起きた。

同年代の青年たちに囲まれていると、まるで学校にいるようで、エンジュは胸が沸き立つのを感じる。　知らず、笑みがこぼれた。

なんだなんだと軽口を言い合っていると、輪の外側にいる方から

「おい、そろそろだろう」と声がかかる。そうするうちに、衣ずれとともにさわさわと人がひいていく気配が伝わってきた。

「お出ましか」

雨音が息をつくのと同時に、儀礼官がひときわ高い声で帝の来臨を3度、伝えた。

では後で、また、と口々に挨拶が交わされ、波がひくように、声が消えてゆく。

広間の中央は道をつくるようにあけられ、それぞれがまるで計ったように両際に寄った。

雨音もエンジュを連れて、段に近い窓際へさがる。

17

いつか、人々が深々と礼をとり、緊張が場を支配する。
衣がすれる気配と、人々が4度の太鼓の音で、頭を起こすのが見えた。

エンジュも兄にならい、目をあげる。
玉座にはひとりの男が座っていた。
「皆、今宵はよく来てくれた」
感情のない、無機質な声。
玉座の男は、確か50もすぎた年齢に達しているはずだが、全くその年にはみえなかった。

玉の落ちる冠をのせた髪は、多少白いものが交じってはいるものの豊かで黒々としていたし、女性のように整った顔には染みや皺が見られない。
そして、人形のように感情を宿していない瞳が下座を睥睨している。

一瞬こちらを見た、とエンジュは緊張した。
だが、それは杞憂であったようだ。

帝は、肘おきに置いた手を軽く挙げ、右に立つ若い男をさした。
「我が息子、四宮（シミヤ）を紹介しよう」

年の頃は、20の半ばあたりであろうか。
玉座の隣に立つ青年は、柔和な笑顔で一堂を眺めた。
髪は銀糸のような白で、目はほのおのように紅い。
『神の愛でる者』と呼ばれる容貌だ。

白髪に紅目。
これは、真正帝国で最も重んじられる容色である。
この容姿で生まれた者はいかなる家柄であろうとも、3歳になったら神殿へ預けられることが決められている。
神殿で特殊な教育を受け、将来は神官・神女となり神に仕える。
俗世へ戻る者もいるが、大半は聖職者として神殿の奥で一生を過ごす。

おお、というどよめきが人々からもれた。
「神の御子だ」
「あの噂は本当だったのか」
帝の言葉に囁き返すのが、耳に入る。
これが父君と兄が話していたことなのだろうか。

帝は、後継者に関して存念を明らかにしていない。
この時期に、成人した息子を神殿より呼び戻すということが、どのような憶測を呼ぶのか、30年も帝位に座った人物ならば、分らぬではあるまい。
エンジュが兄を見上げると、彼は食い入るように若い皇子を見つめていた。

いかなる人物なのか、表情から読み取ろうというのか。
繋いだ手に力を込めると、雨音はエンジュに視線を戻す。

「大丈夫か、」
「兄君は?」

大丈夫だ、と微笑が落ちる。
雨音は、エンジュの腰に手を回して、静かに時間を待った。

しばらくすると儀礼官の合図とともに、人々は列をつくり、帝に挨拶をはじめた。
順番はあらかじめ決められており、どんなに高位の貴族であろうと、例外はない。
また、この場にあっても奏上が叶わない人々も多くいるという。
貴族たちの格式ばった挨拶に帝は軽く頷き返すのが一般的なようで、ひと言でも賜った者には周囲から羨望の視線が投げられた。

「次は、僕たちの番だ」
「ええ」
2人は、おおやけには位を与えられていないにも関わらず、9番目の順が与えられていた。
エンジュは雨音と中央に進み出て、額の前で手を重ね、膝を曲げて礼をとった。
寿ぎの唱を、静かに歌う。

「おもてをあげるが良い」
許しを得て顔をあげると、微妙な表情の変化だったが、帝の視線が揺れた。

玉座から立ち上がり、ゆったりとした足取りで2人に近づくと、彼は何かを口のなかで呟いた。
その呟きを拾ったものはいなかっただろうが、向けられたエンジュは「まさか、」と彼が確かに言ったのが分かった。
雨音にもそれに気付いたようだった。

だが、何事もなかったように、兄はエンジュをそっと押しだした。
前へ進むともう1度、エンジュは深く膝を折った。

「初めて御意を得ます」
「青龍（セイリュウ）から聞いている」

その返事に、帝が自分の婚約のことを話しているのだと悟る。
これは始めからの取り決めなのだろう。

「名は」
「エンジュと申します」
「良い名だ。父はそなたを手放すのがさぞ惜しかろう、」
「もったいないお言葉にございます」

答え、目をふせたエンジュは、周囲からさざめきが広がり、しばらくして緊張感をともなった沈黙が落ちたのに気付いた。
エンジュのそばに影が落ちている。

18

しばらくしてエンジュの左に背の高い人物が長靴をならして立った。

婦人たちの「彼よ、」「あれが」と高くさえずる声が聞こえる。

マントを払って片膝をついた気配が落ち、その人物が耳目を集める若い男なのだと分かった。

衣にたきしめた香がかおり、床にうつる影が濃く落ちた。

御影石の床に、白い裾が広がっている。

蝶丈白だ。

エンジュは目をふせたまま狼狽して、横を見ることができなかった。

「ちょうど良いところに来た、白桜の息子よ。今、そなたの婚約者と話したところだ」

帝のその言葉で、はっきりと彼が自分の未来の夫なのだと知る。

不意打ちだった。

こんな状態で初めて顔を会わせるなど、いつ予想しただろう。

内心動揺しているエンジュを挟むように、雨音が穏やかな笑みを浮かべて向き合った。

「白桜家の御子息か。私は青家長子・雨音。今宵は妹を連れ、致参しました」

「丁寧な挨拶、痛み入ります」

彼が立ちあがって、答える。

2人のすべらかな挨拶に、この場で出会うことは両家の合意であ

ったのだと理解し、エンジュは唇を噛みしめた。
「エンジュ、挨拶なさい」
兄のひと言で、エンジュは彼に向きなおった。
こんなのは聞いていない。
卑怯だ、と兄に叫びたかったが、衆人の前でそんなみっともない真似はできない。

ぐっと言葉をのみこむ。
礼をとり、混乱を断ち切るように、頭をあげた。

「青龍の娘エンジュにございます」
「初めまして、白桜のソウセツです」

顔をあげた先に、白い青年の顔が目にとびこんでくる。
綾の組みひもでポニーテールに結ばれた美しい黒髪。
男には珍しいほどの色白の面。
口唇と眉は細く、それが彼の繊細で生真面目な表情をひきたてている。
そして、西家の白の衣。

彼の切れ長の一重の瞳は、凪いで静かな意志を示しており、老成している。
眉間には薄く皺が刻まれていた。
年は、２９だという。こうして直接対すると、年相応に見えた。

じろじろ見つめていたのが、相手に伝わったらしい。
怪訝な表情で、小声で問われた。
「わたしの顔が、なにか？」
「――――い、いえ」
赤面して言葉につまる。

2人のもとへ、帝が段を下りて近づくのが分かった。
唐突に、ソウセツの甲に彼女の手が重ねられる。
その行為によって、婚約が承諾されたと周囲に伝わったようだ。
それぞれの扇の奥や耳元で、ため息のようなささやきが交わされている。

「楽しんでいくといい」
それが終了の合図だったらしい。

ソウセツに手をとられたまま退出し、気付いたら二の広間にいた。
音楽が軽やかに演奏されている。兄の姿がなかった。
あわてて周囲を見回す。

「あの――――、兄君は？」
「あそこです。話があると」
エンジュはソウセツの差した方を見た。
兄はテラスの入り口付近で、恰幅のよい貴族を相手に何やら話しこんでいる。
どうやら、簡単には戻ってこなさそうな様子である。

「大丈夫ですか」
「はい」
顔をこわばらせたままのエンジュを前に、ソウセツは戸惑ったような表情を浮かべた。

「夜会は初めてですか？」
「ええ。このような華やかな場には、気おくれがします」
「帝都の方は、絢爛豪華を好むのだと思っていました」

「そのようなことは…。帝都へは、よくおいでなのですか？」
「いえ、数年に1度ほど。でも、故郷の空気がよいのか…わたしには、なじめません」

率直な話し方をする人だ、とエンジュは感じた。
西方では、貴族の子弟は古き慣習に従って、騎士たるべく教育を受けるという。
ソウセツの受け答えは、実直を良しとする騎士の姿勢が垣間見えるようだった。

エンジュは会話の糸口をつかみかねたまま、口を閉じた。
もう話すことがない。
当然だ、さっき会ったばかりの相手なのだから。

ソウセツはそれに気付いたのか、苦笑いする。
「この婚約が、気に入りませんか？」
エンジュが答える前に、彼は首を横に振った。
「すでに、拒否できる状況ではありませんね。あなたには西家に来ていただかねばならない…われわれのために」

ソウセツの声は断固としていたが、表情はそれを裏切っている。
生まれも育ちも違う、年さえ離れたエンジュを、扱いあぐねているようにも思えた。
エンジュは頷いた。
この婚約に、私情の入る余地はない。
ソウセツが彼女自身ではなく、あまねく帝国に影響を及ぼすことのできる青家の血を欲していることは明確に描くことができた。

「ええ、分かっています」

ソウセツはほっとしたように、エンジュに手を重ねた。
そうすると、彼の手が大きく、かたいことがわかる。剣をふるう者の手だ。
「あなたの安全は約束します。条件は１つ」
私の仕事に干渉しないこと――――ソウセツはそう、言った。

19

「お礼を申し上げるのを忘れていましたわ」
「お礼？」
ええ、とコウヒは目線をあげてリドに微笑んだ。
「私を誘ってくださったことです」
初めてのエンジュが心強いだろう、と彼女を呼んでくれたのはリドだった。
礼などいらないと彼が横に首を振ると、コウヒは視線を落とす。

2人は、1の広間の上部に設けられた開放的なバルコニーにいた。バルコニーとはいっても、屋外にあるわけではなく、広間と広間をつなぐ宙づりの桟敷のような場所で、ここからは、1の広間と2番目の広間のどちらもが望める。
辺りはほの暗く灯篭がゆれ、光の輪を床に落としている。ひと気はまばらで、休息を求めてやってきた男性や、少し年配のカップルがそれぞれの時間を楽しんでおり、コウヒとリドに目を遣る者もほとんどいない。

コウヒが眩しそうに階下に目を向けると、2番目の広間では、ちょうど管弦の音に合わせて円舞がはじまったところだった。
「あれが、エンジュの相手だね」
「どんな話をされているのでしょう、」
「心配性だね、きみは」
「もちろんですわ」

女性たちのとりどりの華やかなドレスが広がるのを、見下ろしな

がら、
コウヒは「妹みたいなものですから」と言った。
その視線の先には、線の細い青年に手をとられてほほ笑むエンジュの姿がある。
多少の緊張の色を浮かべているのを認め、コウヒはため息のような息をはいた。

リドはコウヒに顔を近づける。
「エンジュばかり見てても仕方ない、踊ろうか？」
「ここで？」
コウヒは、向き直って問うた。
リドは少年のように瞳を輝かせている。
「むろん。――――1曲、お相手を」
「よろしいわ」
コウヒが頷くと、リドはにっこり笑って、バルコニーの中央へ手をひいて移動した。
風にのって、弦楽器の音が聞こえる。
リドに合わせてステップを踏みながら、コウヒは雨音の言葉がありながち間違いではないと思った。
穏やかな身のこなしや気遣い、ダンスのリードの良さは、彼の魅力をよりひき立てる。

「お上手ですのね」
「ありがとう、きみも」変わってないね。
「そうでしょうか？あれから一度も踊っていませんのよ」
「春節の舞踏会、だったかな」
聞かれて、コウヒは「はい」と応えた。
忘れようがない。

女学院で催された卒業記念の舞踏会だった。

在校生と家族を含めた関係者を招いて行われる、大規模な夜会。
その日、卒業を迎えたコウヒにとっては、これが学院で参加する最後の華やかな舞台だった。
たくさんの男性と入れ替わり立ち替わり、踊った。最優等生として祝辞を述べた彼女は、常に学院では注目の存在であり、人に囲まれることに慣れてもいた。
ひっきりなしに続く申し込み。誘い。

そこへ、リドがやってきたのだった。
「きみは、私の申しこみを笑った」
恨みがましい口調でリドが言えば、コウヒは当時のことを思い出して、吹き出してしまう。
「だって、あなたは・・・」
冗談だと思ったんですもの。
そうだ。
緊張しながらダンスを申し込みに来た少年のことを、今でもコウヒはまざまざ思い浮かべることができる。

頬を染めた真剣な顔。
差しだした手が、少し震えていた。
『僕と一曲踊っていただけますか?』

「いいわ、って言いましたわよ」
１０年も昔のことです、そろそろ時効ですわね。コウヒは、目を伏せる。
そうは言ったものの、コウヒの胸にあの日の思いがよみがえる。
リドはまだ本当に、小さな少年だった。
あの時、コウヒの肩にも背が届かなかったのだから。

いつか背が伸び、声も低くなり、そして「私」と言うようになっ

た。
「それで、私の申し出を考えてくれた？」
リドは曖昧に、唇をひきあげた。
変わらず笑みを浮かべているが、その口元が緊張しているのを、コウヒは感じた。

コウヒは重ねて挙げた手の下くぐって、ターンをし、一礼を返した。
曲が終りを告げている。顔をあげたコウヒはリドの目をじっと見つめた。
息を整えながら、コウヒは繋いだ手を離した。
リドが焦れたように、言葉を継ぐ。

「コウヒ、このままきみは変わらないのかい？」
「おっしゃる意味がわかりませんわ」
「――エンジュについて、西家へ行くのか、と聞いている」
きみの返事をもらいたい、今ここで。

20

「――エンジュについて、西家へ行くのか、と聞いている」
きみの返事をもらいたい、今ここで。
リドはせき込むように、ひと息に言った。

瞳は怖いほど、真剣な色を浮かべている。
それで、彼が本気で求婚しようとしているのだと、コウヒには分かった。
一時の気まぐれだと思っていたのに。
コウヒは宥めるようにリドの腕に触れて、口元を引き下げた。

「…あなたには、こたえられません」
その返事に、リドは顔を凍らせた。
「ウオンのことは待っても無駄だよ」
「ウオン様？」

急にエンジュから雨音（ウオン）へ話題が移る。
リドは、コウヒの白い頬に手を伸ばした。
コウヒは半歩さがりながら、リドの目を覗き込む。真意を問いたい。
頬のあたりが強張るのが、分かった。
「ウオン様が、どういう…？」
「きみがウオンを好きなのは知っている」
「何を…。そんなことはありませんわ。なんとも思っておりません」

「なんとも？嘘だろう、コウヒ」
「いいえ」
「ムキになってる」

リドが苦く笑う。
コウヒは顔を赤らめながら、違います、とかたくなに首を振った。
「私の家は、あなたに益をもたらすことができません」
コウヒは努めて冷静な声を保とうとした。
「世事にうとい、貴族とは名ばかりの家ですもの」ただ、それだけですわ。
「そうかな?世事に疎いという点では、私の家も相当のものだと思うけど。
だから、気にすることはないよ」
あっけらかんと言い、首を傾げる様子に、コウヒはため息をついた。
彼は分かっていないのだ。
四大公家の一翼を担う黒家(コク)のリドとは、同じ貴族といっても格が違いすぎる。
この国では、貴族の序列は厳格に定められ、その古さと血筋の確かさを尊ぶ慣習によって、殆ど変動はしない。もう百数十年も。
新しく叙爵される貴族の位は、およそ一代限りのもので、彼らの多くは勢力を持たない。
国首時代の法によってそれは決められている。
「それに私は、家族の鼻つまみ者ですのよ」
「じゃあ、帰る必要はないね」
私と来ればいい。
リドがにっこりと笑うので、コウヒはめまいがしてきた。
彼は何を言っているのだろう。
「私の話を聞いていらっしゃいます?」

「うん、勿論」
「私は家から縁を切られています。だから、」
「私の家族になればいい。青龍（セイリュウ）がきみの後見をしてくれるだろう」
青龍は否とは言わないはずだ。
リドは続ける。
確かにその通りではあるだろう。青龍は、実家からコウヒを常に守ってくれる。
彼女が望みさえすれば。コウヒは少しの間、言葉が継げなかった。

「私のことが嫌い？」
「いいえ」
それは違う。
コウヒは即答した。
「良かった」
何が良かったというのだろう。
婉曲に断っているというのに。しかし、コウヒの目から視線を離さずに、リドは言う。

「すぐに、とは言わない。私は気長な方なんだ」
返事は保留でかまわない。
「リド様…」
「でも、否定の言葉は聞かない」
リドは突如、強い調子で言った。コウヒの肩を掴んで「コウヒ、」と呼ぶ。
「私の気持ちを否定しないで欲しい。ずっと、好きだったんだ」
「――私は、」
「今、きみが誰を好きでもかまわない」たとえウオンでも。

リドは抑えた静かな声に戻して、言った。
彼の琥珀色の瞳に映った彼女の表情は、今にも泣きそうに揺れて

いる。
「エンジュと一緒に行くというなら、止めない。研究もつづけるといい」
私は待とう。
リドはふいに視線を外すと、広間に繰り広げられている煌びやかな人々に目をやった。

重い感情がす、と断ち切れ、コウヒは足りていない酸素を求めるように息をすった。
そして、彼の視線を追うように階下を臨む。
ひときわ華やかな集団のなかに、偶然、知った顔を見つけた。

「あれは…」タルヒ。
呟きは、リドに届いたらしい。彼はひとり言のように言った。
「珍しいこともあるもんだね、彼女。妹が心配で来たのかな」
「隣にいるのは、誰でしょう?」
「彼が四宮(シミヤ)だよ」
四宮…、コウヒは口のなかで呟く。
遠目にも、その白髪の青年が、若い貴族たちの中心にいることは分かった。

四宮は、近頃貴族の間でよく耳にするようになった名前だ。
長く空白になっている皇太子の座に彼がつくのは時間の問題だろうと、見られている。

彼のそばで、ひときわ目をひく少女。
髪を燃えるように赤く染め、巻貝のように結いあげた上に朱珊瑚の宝飾品で飾りたてている。
黒緋のドレスには歪み真珠が鱗のように縫い込まれており、そんな豪奢な格好に負けないくらい艶然と自信にあふれた微笑みを浮か

べていた。
エンジュの異母姉だ。

「奇抜だ」
リドの素直な感想に、コウヒはちょっと笑った。
昔からタルヒは、人目をひく少女だった。
美しい容姿と意思の強い瞳に自負心をにじませて、はっきりとしたもの言いをした。

こうして彼女の姿を見るのは、じつに数年ぶりだ。
手紙はしょっちゅう交換していたが。
「いつものことですわ。タルヒらしい、というか」

リドの推測は間違っていない、とコウヒは思う。
タルヒは彼女なりの感覚であるが、離れて暮らす妹を気にかけている。
ここにこれほど目立つ格好で来たのは、妹に気付いてもらうために違いない。

「ちょっとやりすぎですけれど…」
「うーん…いつ見ても何というか。しかし、彼女はちょっと…、苦手だな」
そうリドが呟くのに、コウヒは吹き出した。

苦手どころではあるまい。
女学院時代、タルヒはコウヒの『蕾』だった。
監督生と初級生。
『お姉さま』であるコウヒの卒業の祝いとなったあの舞踏会で、ダンスを申し込んだリドに言い放ったひと言は、忘れられるものではない。

タルヒは、目をつりあげて2人の横から割って入ったのだった。

「『わたくしのお姉さまから手を離しなさい、坊や』だったっけ？」

「ごめんさい」

「きみが謝ることじゃないよ、コウヒ」

彼女のあれ、嫉妬だったんだね。

コウヒは強張った笑顔をはりつけた。

世間知らずのタルヒが起こす騒動に、いつの間にか巻き込まれ、その後始末に奔走した日々を思い出す。強気でけして自分を曲げず、癇癪を起こすこともあった。

入学したころのタルヒはその言動がもとで、同級生とだけでなく多くの上級生とも衝突を繰り返していた。見かねたコウヒが、彼女を『ひきとった』のだ。

「タルヒももう、大人ですわ」

「…そう。だと、いいね」

リドが奥歯に物のはさまったような言い方をする。

コウヒは眉をあげ、目で理由を問うが彼はふわりと笑っただけで、答えは返らなかった。

卒業後も『紅梅院（こうばいいん）』で教鞭をとっているタルヒと、隣接する『緋の学院』に在籍しているリドとは、今でも行き来があると聞いている。

「この前に会ったときも、きみの話になったよ」

と、リドはそれだけを言った。

コウヒは返事に窮し、速度が変わった音楽に耳を傾けるふりをして、タルヒがゆったりと窓際に近づいていくのを見つめていた。

21

「飲み物をとってきましょう」
とソウセツがここを離れてから、数分たつ。
エンジュはかたわらのソファに腰を下ろした。
新しい靴が足を締め付けているようで、つま先がしびれるように、痛い。
エンジュは顔をしかめると、スカートの内側でそっと靴を脱いだ。
衣の裾は床をひきずる長さがあるから、人から見える心配はしなくていい。

「靴は、はいたほうがいいわよ」
突然、斜め後ろから低い声が落ちて、エンジュはびくり、と体を震わせた。
上体をひねるようにして、相手を確認する。
「…姉さま！」

「あら、驚かせたかしら」
久しぶりね、と笑って、姉のタルヒがエンジュの顔をのぞき込んできた。
彼女の手には、葡萄酒が入ったとおぼしきグラスが握られており、それをエンジュに渡す。
「エンジュの騎士はどこへお出かけ？」

この問いかけに、姉がエンジュの行動をずっと見ていたことを知る。
「彼は私の騎士ではありませんわ、姉さま」
「ふうん、そう」

じゃあ、しばらくわたくしと話をしましょう。

彼女はそう一人勝手に決め、エンジュに飲み物を勧めた。
エンジュは「いただきます」と口へ運ぶ。思ったとおり、南部特産の黒葡萄酒だった。

ひと口喉を潤すと、自分がいかに渇いていたかを実感する。
ひといきに傾けようとする妹の手に自分の手を添えるようにしてタルヒは、グラスを脇に取り上げた。

「全部はだめ」
口にする物には気をつかいなさい。人から勧められたものは、特に。
「親しい人からのものでも?」
「親しい人は、余計によ」

隣に腰をおろし、頬づえをついてエンジュの顔をしげしげと見つめながら言う。
「ずい分、会ってなかったわね、エンジュ」
「お会いしたかったわ」
「わたくしもよ。でも『あの方』がいるから、おまえのところへは行けない」
エンジュは返答に困った。
タルヒは昔から、父君のことを嫌っていた。

姉の母上と父君が不仲だったから、それを引きずっているのではないか、とオノセが言ったことがある。
タルヒは、けっして父を父とは呼ばない。
「あの方は相変わらず?冷たくて、無関心、神経質で…
ああ、こうやって思い出すだけでも虫唾が走る」

あけすけな言い方に、そう姉はこういう人だった、とエンジュは思い出した。

現在タルヒは、青家とは直接の関係を持たない。

赤家（セキ）の分家の1つ、朱綬（シジュウ）家の養女となり、『紅梅院』で教鞭をとっているためだ。

この女学院は、貴族や名望家の子女を集める神殿の外部団体で、男子校『緋の学院』と対になっている。

両学院は実際のところ、その名が示す通り、南部諸侯である赤家が管理、運営の全権を握っていた。

「セキラ様は、お元気ですか？」

エンジュは話題を変えようと、急いで姉の母の息災を尋ねた。

「昨日、文をいただいたわ」お元気なのでしょうね。

エンジュは、義母であるタルヒの実母には全く面識がない。

セキラは父君の最初の正妻で、朱綬家から嫁いできた。

夫とは水と油のような関係で、タルヒの誕生後すぐに別居したという。

父がついに別の女性に雨音を産ませると、彼女は1人実家へ戻ってしまった。

タルヒが妹に、母親について詳しく語ったことはない。

エンジュの持つ情報の多くは、タルヒの『花』であったコウヒによる。

「今日は、お姉さまも来ているのでしょう？」

今度は、姉がエンジュに熱心に尋ねた。

タルヒにとってコウヒは今でも、唯一無二の『お姉さま』なのだ。

エンジュは、入り口まで一緒だったことを告げる。
「その見立て、お姉さまでしょう？エンジュ」
エンジュのドレスをしげしげと見つめて、羨ましそうにタルヒは言った。

「ええ、正解。採寸のまえに、いっしょに考えてもらったの。花はリドお兄様だけど」
「彼、来ているの？」
「ええ、今はコウヒと一緒にいると思うわ」
「そう、そうよね。…いいわ」

何がいいのか、よくわからなかったが、エンジュは姉の言葉に頷いた。
コウヒのことを聞きたがるのも、相変わらずだ。
タルヒは口をひきむすんで、「だいじょうぶ」と自分を納得させるように呟き、グラスに残った葡萄酒を傾ける。

「ところで姉さま、」
エンジュは、空になっていくグラスをじっと見つめて口を開いた。
「あら、なあに？」
「姉さまのお知り合いなの？」

怪訝な表情でエンジュの視線を追ったタルヒは、相手に気付いてにっこりと笑った。
「…四宮様」
親しげに相手の名前を呼び、ゆっくり立ち上がる。
それは玉座の隣に居た、あの青年だった。

見間違えようのない、銀髪に紅目の異形。

帝の皇子だ。
彼はタルヒに並ぶように1つ歩を進めると、手を広げて鷹揚に言った。

「貴女の姿が見えなかったから、探してしまった。邪魔をしただろうか？」
タルヒは「いいえ、殿下」と否定して、エンジュに目配せした。
靴を履けということらしい。
エンジュはつま先で、脱ぎ捨てた靴をそっと手繰り寄せると、腰をあげる。
「妹を紹介しますわ、殿下。青家のエンジュです」

タルヒの言葉に、エンジュは大げさにならない程度に深く礼をとった。
宮廷では、目上の者の許しがなくては話しかけることができないという暗黙のルールがある。

四宮は頷く。
「先ほど帝の御前で、会いましたね」
その言葉で口を開くのを許されたのが分かった。
「はい、今日は婚約の許しをいただきに参りました」
「そう…そうだったね。あれは実に、計算された演出だった」
「殿下」

タルヒのとがめるような口調に、四宮は肩をすくめ「悪かった」と手を伸ばした。
タルヒは半身をずらして、その手をするりとかわす。
「心にもない謝済は受けません」
「これは手厳しい」
四宮は大らかに笑う。

こうして彼に向き合うと、その身から立ち昇る力の大きさが鋭敏に伝わり、鳥肌がたつほどだ。
エンジュよりも彼の近くに立っている姉にそれが分からぬはずはない。
「妹のせいではありませんわ」
「分かっている」
なだめるような声で四宮がアルハナエの腕に触れる。
今度は、彼女も拒まなかった。
「エンジュ。殿下はね、わたくしの親しいお友達なの」

親しいお友達。
エンジュは、その言葉を口の中で反芻する。
権門の次代としてだけでなく名門校の教員としての顔も持つタルヒは、宮廷にも顔が広い。
美しく社交的な彼女の周りには、蜜に群がる蝶のように、常に異性が囲んでいるのだと、侍女たちが教えてくれたことがある。

華やかな噂には事欠かない姉だったが、その心が真実誰のものなのかは、エンジュには分からない。
「親密なお友達、だよ」
と四宮はうそぶいた。
タルヒは彼を軽くにらんだが、エンジュにはその表情までもが親密さと映った。

四宮の紅い目が、悪戯っぽく輝いている。
彼は片手を伸ばすと、アルハナエの手にもつグラスに指をかけ、自らの口元へ運ぶ。
底に残った葡萄酒が彼の喉に消えた。
「殿下、」

「喉が渇いていたんだ、タルヒ」
嘘おっしゃいな、と腕をつねるふりをしたタルヒに、四宮は微笑んだ。

「さあ、遊びはここまでだ。そろそろ、用意をしよう」

はい、とタルヒが頷いた。
エンジュが気づいて、周りを見渡すと、紗がかかったように遮断されていて、誰の顔もはっきりとは見えない。

眼の前で姉と四宮だけが平然として、こちらを見ている。
まるで、分厚い緞帳に閉じ込められているようだ。
ぞっとした。
罠だ。

22

空気の薄い山頂にいるように、いや、閉じ込められているように、息苦しい。

「な、何をなさったの？」

「話をしやすくするために、少し厚いカーテンをひいておいた」

術を使って遮断したと言いたいらしい。

四宮の隣で、タルヒは恐ろしいくらい静かな目で、妹を見つめている。

「正直に話してくれたら、何もしないわ。隠しごとはなしよ、エンジュ」

「何を？」

「おまえの婚約のことを聞きたいの。…なぜ白桜なの？知ってることを話してくれるかしら」

「知りません」

どうして、そんなことをお聞きになるの？

エンジュは、タルヒに訊き返した。

結界をはってまで、妹に尋ねる話とは思えない。

「父君はいつだって、説明なんかなさらないでしょ。…もしかしたら、兄君がご存じかもしれないけど」

タルヒは鼻をならして一蹴した。

「それは無いわね」

「コウヒにも、お母上のところまで行ってもらったけど、成果はなかったわ」

肩をすくめたエンジュの前で、タルヒと四宮が顔を見合わせている。

2人は長いこと見つめあっていた。

まるで、心の中で話ができるみたいに。先にエンジュに視線を戻したのは、四宮だった。

「正直に言って、きみの返事次第では実力行使に及ばざるを得ない」

隠そうとするなら相応の手段をとる、と言いたいらしい。

その声の不穏さと気の高まりを感じて、エンジュは彼が何をしようとしているのか知り、青ざめて首を横に振った。

タルヒは顔色をかえた。

「止めて！わたくしの妹です」

「タルヒ」

「おやめください！」

「貴女は一度、同意したはずだ」

タルヒ。

遮られ、怒りに満ちた声で四宮が名を呼べば、タルヒが顔をそむけたまま背にエンジュをかばう。

姉の背が強張っているのが、エンジュにも分かった。

「家族をとるというのか。…貴女を捨てた家だ」

「エンジュに罪はありません」

「タルヒ、」

荒々しい感情のなかにも親情を込めて彼が呼ぶと、タルヒは肩の力を抜いて、エンジュに向き直った。

姉の目には、揺れ動く心を映しだすように痛みが浮かんでいる。

「姉さま、いったい・・・」
「選んだのよ、エンジュ」
疲れたような声で姉は言う。
四宮が伸ばした手に、彼女はすがるように身を任せた。
美しい紅い目が、姉を見つめている。

四宮の額には、第3の目といわれる、花びらにも似た紋が彫られていた。
神の御子であるという、しるしだ。
皇宮の女性たちも似たような化粧をしているが、こちらはもっと形が複雑でしかも消えることがない。

「タルヒ。貴女の大事なものに危害を加えるつもりはない」
「信じています」
タルヒはしばし彼と向き合っていたが、表情を消しさるとエンジュに重く口を開いた。
「エンジュ、わたくしたちは四宮様を玉座に据えるつもりでいる。そのために、青家の情報が必要なの」

わたくしたち、というのが南部勢力であることは、政治にうといエンジュにも理解できた。
豊かで、中小貴族が多い南部は、昔から青家とは対立を繰り返してきた。
南部諸侯であるタルヒも、いやおうなく勢力争いに巻き込まれているということか。

エンジュは震える口を叱咤するように、言葉を紡いだ。
「父君と争うのですか。…この平和をくつがえすと？」
「そのようなつもりはない」

四宮は即答したが、エンジュは信じられなかった。
だいたい、父君は彼が有力候補だと語っていた。
玉座が欲しいならば、青家を探る必要はない。
玉座に一番近いところに、彼はもうすでに在るのだから。

「平和…おまえは、これが平和だというの？」
タルヒがひっかかったのは、エンジュの別の言葉だったらしい。
何かに耐えるように視線を落とす。
「西との結びつきは、いっそう均衡を危うくするというのに。おまえは、」

「――はいはい。それ以上、妹を苛めないでくださいよ。姉上」

突然、薄暗いカーテンに光が差し込むように術が解かれ、雨音があらわれた。
タルヒははっと顔をあげる。

「雨音（ウオン）、いつ――」
「今ですよ」
皮肉げに応じる雨音の周りを、謁見の間で会った青年たちがずらりと固めている。
ソウセツもいた。
皆一様に、息をつめるようにして四宮とタルヒに対峙している。

エンジュは唐突に、兄君に手首をつかまれてひきよせられた。
背に庇われる。
「このような場所で、密談ですか？」
「違う、雨音。わたくしたちは、ただ…」
「ただ、何です？姉上」

雨音は吐き捨てるように言った。
エンジュは、兄の左の袖口をぎゅっと握る。
「どういうおつもりか、お聞かせ願いたい」

わたくしたち、という言葉に兄が反応していることは、エンジュにも分かった。
雨音は怒気をこらえている。
対するタルヒは静かな声に戻っていた。
「特別なことは何も。久方ぶりに妹と話がしたかっただけ」
その答えに雨音は唇を歪めた。

ソウセツが、雨音の右袖を軽く叩いて前に歩み出た。
強い目で、四宮を射抜く。

「殿下。このようなやり方は不快です」
「それは残念だ。一応、配慮はしたつもりなのだが」
「帝御前の夜会のかたすみで、ですか」
「ほかに、方法も機会もなかったものでね」
私は気が短いほうなんだ。
しれっと四宮は言う。
互いに歩み寄る余地がないことを理解すると、ソウセツは口調をかえた。

「殿下、あなたは欲しいものを望まれるといい」
「それは、君たちの協力が得られるということかな？」
「家同士を騒乱にひき込むことをやめて下さるならば、静観しましょう」

四宮は口元に笑みをたたえた。

まるで、とても面白いことを聞いた、とでもいうように。
「今は、ということか？」
「ええ」
「では、私も今は退こう」

四宮はそう言うとタルヒの腕にふれ、身を翻した。
姉は、雨音とエンジュを見つめたが何も言わずに彼の後を追うように、広間の人波へ消えていった。

23

雨どいを伝う水音がする。

エンジュは視線を硝子窓の向こうへ向けた。

雨が降る中庭をのぞむテラスで、リドが皇后と話をしている。

なかばささやくような、そして真剣な顔つきからは、2人が政治に関することを話し合っているのだろう。

1昨日の夜会の終りは、散々だった。

姉とはあれきりで姿も見ることができなかったし、兄君は馬車に戻っても怒りが解けないようでひと言もエンジュと口を聞いてくれなかった。

コウヒはコウヒで、父君に話があると出かけて行ったきり、姿を見ない。

硝子の向こう側は、テラスで囲まれた広大な温室になっている。

皇宮の表奥、皇后のサロンだ。

エンジュは内輪の茶会に招かれていた。

朱鷺色で設えられたテラスは、全面が硝子張りになっており、贅を尽くしたものである。

ここで、皇后は親しい客を招き、手づから茶を振る舞う。

皇后は、青家から嫁いだ人物で、父君の従兄妹にあたる。

子どもがいないということもあって、普段は政務には一切かかわらず、新種の花の栽培に精を出している変わり者の后だ。

花が咲き乱れ蔓の延びるに任せた温室を眺めて、エンジュもつい納得してしまう。

エンジュの左ななめには、ひとりの少女が座っている。
口をへの字に曲げて、けっして視線をあわせようとはしない相手をちらりと見ながら、エンジュは心の中でため息をついた。

どうして、ここにいるのよ。
彼女は、王族。それも帝のそばで補佐をつとめる黄葉（オウバ）の宮家のひとり娘だ。
名を、イトという。

それにしても、と思う。
はじめて会ったときから、いけすかない相手だった。
『あら、あなたが青家の末の娘さん？お姉さまとはちがって、なんていうか…おかわいらしい方ね』
馬鹿にされたような響きを感じとって、つい言い返してしまったのがいけなかった。
『どうもありがとう。姉さまにも、あなたからだと、そうお伝えするわ』
むっと、イトが口をひきむすんだ。
多分、初対面から、気があわない相手だったにちがいない。
だが、皇后を訪ねるたびに、遊びに来ているという彼女にはち合わせることになった。

『イトの父親はいそがしくてのう…。学校が休みのときは、妾のもとへ呼ぶようにしているのだ』
仲良くしてやっておくれ。
そう、皇后に頼まれても相手にその気がないのなら、仲良くなんてできない。
それなのに。
さっきだって。
『2人とも、仲良くな』

と言い置いて、皇后とリドは席を離れたのだ。

やっかいだ。

そんな気持ちを表情にだしたまま、エンジュは目の前におかれた茶をすすった。

沈黙が落ちて、どのくらいたっただろう。

「ねえ、――――あなた聞いてるの？」

エンジュはその問いかけに、顔をあげた。

イトは続ける。

「先日の夜会で、皇宮の花を髪に挿してきたそうじゃない。どうやって手に入れたのか知らないけど、分不相応って言葉をご存じ？」

エンジュはうんざりした。

なぜ、髪に花を飾ったことを知っているのだろう。

あの場に、イトはいなかったはずなのに。

「そんなこと知らないわ。贈られた花を使っただけよ」

弁解を試みたが、一蹴される。

「信じられない！あれは、特別な花よ」

皇宮と隣接する神殿のおくつきだけに、咲く花。

それを、臣下の身分で挿して来るなんて。

「だいたい、姉妹そろって思い上がりも甚だしいわ」

あなたのお姉さまが、お兄様のことを狙っているのは知っているのよ。

不愉快なの。

イトは視線を合わせようともせず、苛立ちをにじませた横顔で、エンジュに吐き捨てるように言った。

「『お兄様』って誰のことよ」

姉さまには心に決めた人なんかいないわ。

どういうことか、と尋ねるエンジュに、イトは怒りで赤く染まった顔を向ける。

「四宮（シミヤ）お兄様のことよ！先日の夜会では、べったりくっついていたくせに！！」

「違うわ、姉さまはただのお友達だとおっしゃっていたもの」

「しらじらしい。何も知らないような顔をして！」

わたくしは知っているのよ！――あなたの母君は、青龍様とは正式な婚姻関係になかったのですってね。

イトが汚らわしい、と眉をひそめる。

「あなたのお姉さまだとて、嫡子かどうか知れたものじゃないわ。そんな方に、四宮お兄様の妻になる資格はないわ」

青家じゃ、あなたのお姉さまの出入りは禁止されているというじゃないの。

だまれ、と小さくエンジュはつぶやいた。

いつも物事をはっきりと口にする彼女が、急にしずかになったのを見て、イトは「当然よね」といっそう語気を強めて笑う。

「本当に、あの方がお兄様の正妻になれるというのなら、わたくしも考えてあげてもよくてよ」

「だまれ、と言ったわ！」

24

「だまれ」

イトは馬鹿にしたように肩をすくめる。

「あなたは、ここではもう何の力ももたないわよ。辺境の西家の、しかも12もある分家の1つへ嫁ぐんですもの」

「私のことはいい。でも、家族のことは訂正して」

「――いやよ。あなたなんか、しょせん国賊の娘じゃないの！婚約者だって、騎士なんて言うけどただの殺戮者よ！」

コクゾクノ、ムスメ。

タダノ、サツリクシャ。

イトが高らかにそう宣言したときだった。

エンジュは目の前の花瓶をつかむと、彼女向かってふりあげた。

突然の暴挙に、扉の前で控えていた侍女たちが茫然としている。

イトは投げつけられた青磁器を、とっさによけた。

どん、とにぶい音がして、絨毯のうえに瓶と花が散乱する。

侍女たちは口ぐちに悲鳴をあげた。

何事か、とテラスから、こちらを向いた皇后とリドの前でエンジュは風を呼びこむと、術をとなえた。

テーブルの上に残った水差しをイトに投げつける。

「やめるんだ！！」

リドの声が耳に入ってはいたが、エンジュには止める気などなかった。

目の前が怒りで真っ暗になる。
水を術で泥水にかえると、しっかりイトの美しいドレスを狙った。

べちゃ、と音がして、立て続けに悲鳴が続く。
イトのスカートは泥にまみれていた。
完全に蒼白な顔になった彼女に、エンジュは舌打ちをする。

「よけるから悪い」
ただの水で許してやろうと思ったのに。
唇がふるえる。父と姉を侮辱したイトには、これぐらいでもまだ足りない。
こぶしを握りしめ、強い感情と戦う。
視界が涙で、にじんだ。

真っ先に我にかえったリドは、黙ってエンジュを引っ張ると、唖然としている皇后に軽くお辞儀をして、扉のそとへ連れ出した。
控室で2人になるのを待ち、けわしい顔でのぞき込む。
「エンジュ、何があった？」
「何も」
エンジュは、爪のあとが残るくらい、手をにぎりしめた。
「何も、なわけはないだろう」
「言いたくありません」

何があったのかと再度問うリドに、エンジュは口を閉ざした。
泣きそうな目でにらみつける彼女に、リドは言う。
「謝ってきなさい」
「嫌」
「手をだした君が悪い。女王殿下に謝るんだ」
「絶対に、死んでも嫌です」

リドは、ため息をついた。
辛抱強く、同じことを繰り返す。
「今なら、間に合う。暴力に訴えるなんて、許されることじゃない。早く」
エンジュは首を振った。
リドは、長いため息をつくと、こめかみに手をやった。
「分かった。君はここで待ってて。私はオノセを呼びに行ってくる」

25

回廊を幾つも曲がり、水庭園の間にかかる通廊を足早にすぎる。
ここでは、雨の気配はなかった。
等間隔で並んだ円柱に黄色い辛夷が巻きつき、こぼれるように花を咲かせる。
皇宮に季節は廻らない。常春の世界に包まれていた。
あまねく帝の恩寵によってここは、外界とは完全に隔絶されている。

「姫様、お待ちくださいませ！」
後ろから、オノセが追いかけてきた。
エンジュは足をとめ、向き直った。

「とめないで！」
「何があったのですか」
「リドお兄様に聞いたでしょ、」
「それでは何も分かりませんわ」
宮家の女王殿下と何があったのです？
「私は悪くない」
激しい勢いで言葉を返す。
２人は一歩も引かず、言い合いをつづけた。
礼儀と身分、謝罪というやり取りが何度も交わされる。
頬は怒りで紅潮し、目には苦々しさがともっている。

「オノセなんて、知らない！私は謝らない、絶対に！」
ついてこないで！
ついに、エンジュは叫ぶと、庭への石段をかけ下りた。
「姫様！」

オノセは声で止めたが、エンジュは振り返りもせず、あっという間に庭の向こうに姿を消した。

長い通路のような緑の生け垣をいくつも抜けると、緑の絨毯にも似た丘が広がる。

エンジュは、走る途中で邪魔になった靴をぬぎ、髪からかんざしを抜いた。

髪を解き、ただ夢中で駆けると、怒りがす、と抜けていくようだった。

なだらかな丘の上には、人の手をほとんどいれていない庭園があった。

小さな花々と湧水のような噴水、それから大木が立っている。

木は大きな木陰をつくる古木で、根元を見ると2本の枝がからまるようして育ったものだと分かる。

枝ぶりは堂々としており、隠れるのには最適な場所である。

ここは皇宮の数ある庭園のなかでも、エンジュがとりわけ気に入っている場所だ。

エンジュは頬を木に寄せた。

風が流れる。

エンジュにも大変なことをしでかしたということは分かっていた。

イトは四宮のことが好きなのだろう。

ただ、許せなかった。

でも、このままにはできない。

あふれる感情で頬をつたう涙を隠そうと、エンジュはぎゅっと木にしがみつく。

そうしていると、なぜだが気持ちが落ち着いた。

唐突に、生け垣から風が抜けた。人の気配がする。
エンジュは顔をあげて、振り返った。
「誰、」
短く誰何する。

建物のほうから姿を現した青年を見て、エンジュは表情をかえた。
「ソウセツ様…どうしてここに」
迎えにきました、と彼は言った。

「いつから、」
「あなたが泣いていたあたりかな」
平然とそう言う彼に、とっさに6種類の言葉が思いついたが、どれも不適当で却下する。
エンジュの態度に業をにやしたリドかオノセあたりが、彼に頼みに行ったのだろうと想定できた。

「話したいと思って」
「話なら、今、しています」
エンジュは唇をかみしめ、うなるように返したが、彼は首を傾げただけだった。
「戻りませんか、」
皆あなたを心配していました。
目をあげればソウセツは驚くほど、近い位置にいた。
その静かな目で、彼が諍いのあらかたを把握していることを、エンジュは悟る。

「わたしが行き、おさめましょう」

相手は世襲王族の姫だ。このまま放っておけば、宮家は黙ってい

ないだろう。
のちのちややこしいことになるのは、目に見えていた。

「あなたには無理強いしません」
エンジュに背を向け宮へ戻ろうとしたソウセツは、袖口をひかれて足をとめた。
ソウセツの衣を、エンジュが握っている。
「だめ――ぜったいに、謝ることなんてない！悪いのは向こうだもの。騎士を貶め――」
しまった、とばかりに口をおさえたエンジュに、ソウセツは目を細めて膝をついた。

エンジュは首を横に幾度もふる。
その仕草に、何を言われたのか、ソウセツは察したらしい。
「この婚約のせいですね。あなたには申し訳なく思っています」

ちがう。なぜ、謝るのだ。
ソウセツのせいではない。
「違う。ソウセツ様は悪くありません」
必死に言葉を紡ぐエンジュに、ソウセツは微苦笑を浮かべた。
帝都における西の地位は、低い。
十二西家（じゅうにせい）が、帝都には居住しないことも大きな理由の1つだ。
本家・白家が西方支配を許されたときに、一族もろとも移住したのだ。
幼くして騎士たり、質実剛健を旨として育つため、万事が綺羅しい都風には馴染めない。

帝都に住まう貴族とは、生活習慣の根本から違う。
戦を身上とし、国境線を守るために、血で血をあらう。
帝国の祖、かつての騎馬の民、そのままに。

それゆえ帝都周辺の貴族連中からは、野蛮だの、不吉だのとさげすまれる。
王家に連なる姫のイトであれば、当然の反応であったのだ。

エンジュは、青家の姫君として多くから、かしずかれ、敬われて育った。
しかし、これからは彼とともにある限り、この中傷や悪意に耐えねばならない。

「彼女は、父を国賊と呼びました。私はそれが許せなかっただけです」
エンジュは言い募った。
ソウセツを巻き込むことは本意ではなかった。
保守派の貴族たちには、長年青家と対立してきた歴史がある。
そのわだかまりは、国首の地位を返還して２０年経た今でも、消えないのだ。
それが悔しかった。ただ、それだけだ。

西家への愚弄に我を忘れたわけではない、違う。
「分かっています」
ソウセツは静かに立ち上がると、エンジュから離れた。
「それでも、このままにはできない」
エンジュはうなだれた。
そうだ。分かっている。

26

結局エンジュはソウセツと、皇后の部屋まで戻った。
自分は絶対に謝ることなどできないと思う。
けれども、こちらが頭を下げないとすまないことは分かっていた。
エンジュは、ぎゅっと口を引き結んで、扉の前に立った。
「あなたは、ここに」
と彼は言ったが、エンジュは首をふった。

扉をたたくと、皇后は2人の姿に少し驚いたようだが、何も言わずに中に招き入れられた。
惨状の面影は、もはやなかった。テーブルの上の茶器や絨毯の染みは全て、片付けられている。
ソウセツが謝罪の意を伝えると、侍女が心得たように奥の部屋へイトを呼びにいった。
下がった侍女が女王を連れてくる間、皇后は小声でソウセツに話しかけた。
「妾が少し席を離していたのだ。すまないな、目を離すのではなかった」
「いえ、陛下…」
むしろ謝るべきは、こちらだ。
いたたまれない思いで謝りながら、ソウセツは背後に立ったエンジュが小さくなっているのを感じた。

やがて、現れたイトは、汚れた衣装を着替えていたが疲労の色をにじませ、悄然としていた。
2人を認めると、ぎょっとしたように目を見開き、居心地が悪そうに身じろぎした。
「イト、おいでなさい」

皇后が手招きする。
イトは白い頬を強張らせて、おずおずと近付いてきた。
「はじめてかと思うが…、白桜家の子息。これが黄葉の宮の娘で、イトという」
はじめまして、と挨拶すると、イトは目に見えて焦ったようだ。
陰口を叩いていた当の本人と顔を合わせては、確かに気まずいだろう。
こんな騒動になったせいで、全部知られているのだから。

「お初にお目にかかります、イト女王殿下」
このたびは、…我が婚約者がご迷惑をおかけしたようで――――
謝罪したい、とソウセツは口にした。

ソウセツは衆人の見守る中、膝をつき、深々と礼をとった。騎士の礼だ。
イトは慌てた。
彼女だけではない、室内にいた人々はみな、息をのんだ。
「どうか、お許しを」
ソウセツは、少女の前に膝をついて許しを請う。
完全なる騎士の礼は、しかし、この場にふさわしいものとは言えない。
相手に跪くのは、最上の敬意の証。ささげられる相手は本来、この国に1人だけである。
「あ、あの、――そのようなことをしていただくわけには、まいりませんわ」
「どうか…謝罪を受けていただきたいのです」

「――――え、ええ。わかりました、お受けします」
ですから、おやめになってください。
イトは真っ青になったまま、早口で言う。

雪のような白い衣、髪を結ばず背に流したソウセツの装いは、華美ではないのに洗練されており、人目を惹いた。皇后や侍女たちもいる前で、騎士に謝罪されるなど、いくら王族であっても少女のイトには酷なことなのだろう。

「わたくしも不用意な発言をいたしましたわ」

お気になさることはございません。

狼狽したまま、イトは言った。

彼女の口にした言葉の大半は、彼女の意思というよりも、誰もが口にする常識であった。

皆が誉めることを誉め、皆が謗ることを謗る。ただそれだけであった。

「あなたを悪しく思っての言葉ではありません」

フヨウイナ、ハツゲン…。

「ありがとうございます。…お話できてよかった」

その言葉にソウセツは顔をあげ、立ち上がる。

イトの目をのぞきこむようにして、穏やかに続けた。

「今後も、彼女とは懇意にしていただければと思います。なにせ、西へ――ここは比べられぬほどの辺地で、血に飢えた、野蛮な者たちと生活することになりますので」

最後に強烈な皮肉を口にして、にっこりと笑った。

それでは失礼を、とソウセツは、あっけにとられている女性たちを残し、身をひるがえした。

エンジュは慌てて彼の後を追う。

回廊を曲がったところで足が止まった。

人通りもたえたところで、ソウセツは静かにエンジュを見下ろす。

「――あの、ありがとうございました」
エンジュは、どうにか息を整えると、ソウセツに切り出した。
「いえ、礼はいりません」
とそっけなく返される。

「でも、あれは」
「必要なことだった。それだけです。違いますか？」
騎士の礼も、謝罪の言葉もただ、手段にすぎない。
語られる言葉は淡々としていたが、ソウセツから伝わる気配は明らかに負の感情だ。
それに、部屋を出る最後に口にされた、あの言葉は。
「怒っているのですか」
「いいえ」
ソウセツの白い表情は、どんな感情もあらわしてはいない。
エンジュは、なんとなくぞっとして謝罪を口にした。
「ごめんなさい」

ソウセツは静かなあおい目でエンジュを見つめた。
「なぜ、わたしと来たのですか」
そのまま隠れていればよかったのに――。
その言葉に、エンジュは弾かれたように顔をあげる。

翠がかった黒い目にやどる強い光は、おそらく怒りだ。
エンジュは彼を睨みつけると、嘘つき、と叫んだ。
「あなたは嘘つきよ！私に本当のことを言わない、」
「何言って…」
「ならば、言ってください。必要なことだった、と言ってやり場のない怒りを見せている、その理由を」
ソウセツは答えにつまった。
言葉を失った彼を、エンジュはじっと見つめた。

鋭い視線が全てを見透かすようにきらめく。

「戦で散った騎士を侮辱されたと思ったのですか、或いは皇家を憎んで、」

ソウセツは顔をあげた。それは確かに、彼が今まで口にせずにいたことだ。

エンジュは大きな瞳を瞬いて、叩きつけるように言った。

「ならば、ここへ来なければ良かったのよ！」

ソウセツは思い出した。かつて親友と、馬を並べて競い合った日を。共に在ることを約束した日々を。

彼は――サイカは、彼を置いて戦場へ行き、そこで命を落とした。彼のもとを、永遠に去ってしまった。

ただ、約束だけを残して。

エンジュはそれを知らなかった。

しかし、このときそれは仇にしかならなかった。エンジュに悪意がないのは分かっている。

けれども、彼女が投げた言葉は、ソウセツの心に波をたてずにはおかない。

「…仕方がないでしょう、」

さざ波が歯車を狂わせる。気付けば、ソウセツはそんな言葉を口に出していた。

「わたしだとて、帝都に来たくはなかった。でも、それは仕方のないことだ」

「ソウセツ様！」

「本当のことを言えと言ったのは、あなただ。そう、あなたの言うとおり」

エンジュの非難の声も、驚きの表情も、今はソウセツの言葉を止めることはできない。

青家の娘など娶りたくはない、とソウセツは言った。
青家だからといって誰しもが膝をおり、仕えてくれると思ったら大間違いだ。
「西では誰も、あなたを歓迎しない。羽鳥（ハトリ）の代わりになどならない！」

歯車が狂う。
目の前で、エンジュは再び口を閉ざした。その表情に、ソウセツははっと息をのむ。
先ほどまでの不安は、ない。怒りでも苛立ちでもないその顔は、けれども彼を立ち返らせるには十分だった。
彼は、自分がおかした過ちに気付く。
「エンジュ、」
慌てて手を伸ばすのと、彼女が後ずさるのは殆ど同時だった。
エンジュは一瞬だけ、彼を見つめた。
しかし、ソウセツがその瞳にうるんだ輝きに気付いた瞬間、身をひるがえしてかけ去ってしまう。

呼び止める暇もなく、回廊の奥へ消える。叩きつけられるような激しい音で遠くの扉が閉められ、足音が遠のくと、辺りはそれきり、しんと静まり返った。

27

青家の娘など娶りたくない――。

部屋はうす暗かった。エンジュは寝返りをうって、天井を見上げる。

あの後、ソウセツは日を改めて会いにきた。

案内の侍女たちが困惑しているのは知っていたが、エンジュはどうしても扉を開けて会うことはできなかった。

『許してください』

と彼は、扉の向こうで言った。

エンジュは返事ができなかった。扉をとざしたまま、息をつめて彼の声を聞いた。

『開けたくないなら、そのままでいい。わたしの話を聞いてください』

ソウセツは躊躇ったようだった。

『…この前、あなたが言ったことは、本当です』

わたしは、怒っていました。

西家に対する不当な扱いや言葉。グルジムカとの約定に対する苛立ち。

そんなものが、ない交ぜになっていた。

『でも、あなたには言うべきでなかったと思います』

謝罪する、とくぐもった声が漏れる。

『わたしは、明日にも西へ戻ることになりました。向こうであなたを待ちます』

さようならと、彼は続けた。

エンジュは暗い部屋の中で座り込み、遠ざかる足音を聞いていた。

あなたには、言うべきではなかった、だと…。
体がひどく冷たかった。
天井には、青い彩色で花の模様がくりかえし描かれていたが、今はそれが、雨漏りのあとのように見える。窓の外は暗く、夕闇が濃い。

「エンジュ、起きているかい？」
いつか扉をたたく音で、再び目が覚めた。
エンジュは、のそのそと寝台から身を起こした。
薄暗い明りの下でも、衣にしわが寄っているのが分かる。
そのまま眠っていたので、髪も乱れたままだ。

しばらくして、扉が開いた。
「出ておいで、話がある」
戸口にもたれるようにして、雨音が呼びかける。
廊下の明りがまぶしく、兄の表情は読めない。押し殺したような声だ。
エンジュは黙ったまま、雨音に従った。

2人は、夜のしじまを歩いた。
いくつもの灯篭に照らされた庭は、池に人工的に配された石が浮かび上がって、美しい。
計算された美しさだ。
足もとで、玉砂利が鳴る以外は、辺りはしん、と静まっている。

「皇宮で、何があった？」
兄君は促した。優しく穏やかな声音。
エンジュは一度口を開いたが、結局何も言葉にできず、下を向いた。
そうか、と雨音はうなづく。

「僕がいなくてすまなかった」
「…なぜ、兄君が謝るの、」
「お前を守ることができなかったから」

雨音はエンジュに向き直った。
ほの暗い闇のなかで、雨音の瞳が痛みを宿している。
ソウセツが来たと聞いた、と彼は言葉を継いだ。
「この婚約も」
父上にただすことさえできない。

「――兄君」
エンジュはすがるように呼びかけた。
今だ。
今なら、まだ間に合うかもしれない。
西家には行きたくないのだ、ととっさに声に出してしまいそうになって、唇をかむ。

ここにいていい、と言ってほしかった。
悪い夢でも見たのだと、いつものように冗談で、明るい笑顔で。
それなのに――。

「お前を西へやりたくなかった」
僕に力がありさえすれば。

過去形で語られる言葉に、エンジュはぎゅっと心臓をしめつけられた。
ああ、そうだ。
もう、決まったことだった。

西へ嫁ぐことも、ここを離れることも。
兄君にはどうしようもない。
両手を胸の前で握りしめ、エンジュは震える口を叱咤した。
言うのだ。言わなければならない。

「…父君の決定です」
ふりしぼったエンジュの言葉に雨音は、力なく首を振った。
「その通りだ」

沈黙が2人の間に落ちる。
雨音が、ようやく口を開いたとき、すでに声は感情を失っていた。
「ソウセツは策士だ」
敗戦の交渉に、僕たちを巻き込んでいる。
くらい目で、エンジュを見つめる。

兄君の背は拳4つ分高く、近い位置に立っているために視線を合わせようとすると、見上げるようになった。
その目の中にあるのは、ソウセツに対する憤りというよりも、まならぬ現状に対する…父の決定を覆すことができぬ怒りのように思える。
転嫁された、自分自身への憤懣。

「お前が選ばれたのは、彼の婚約者が、他の男へ嫁ぐことになったからだ」

ソウセツの婚約者だった少女は、彼とひきはなされ和睦の名のもと隣国へ嫁すのだという。
彼にとっては、さぞ納得のいかないことだろう。
エンジュは、その報復の駒なのだ、と兄は断言した。
中央に対する西家のくさびなのだ、と。

「3年だ――3年我慢してくれ」

雨音は苦しい胸中を独白するように、エンジュを胸にかき抱いた。

なされるままになりながら、彼女は兄の顔を、言葉を反芻する。

「必ず、迎えに行く。必ずこの約定をくつがえしてみせる、約束する」

強い言葉。

兄君、と呼びかける声は震えて音にならない。

雨音の目に映る自分の姿は揺れている。

3年だ。

3年我慢すれば、戻ってこられる。エンジュはまなざしを上げた。

「父上の、兄君のために西へ行きます」

雨音は深く肯く。

わが青家に、いやさかの権勢を取り戻そう――と。

28

戸口を叩いて入室したものの、コウヒは全く気付いていないようだった。
文机と床には隙間なく、紙面や書物が広げられている。
いや、広げられているというより、散乱しているという方が近い。

コウヒの部屋は、いつもこの状態である。
紙の山が多少場所を移しはするが、足の踏み場がないことには違いない。
以前オノセが見かねて、侍女を掃除に来させたのだが、数日で戻されてしまった。
今もコウヒは、ぼんやりと思案にふける様子で、机の前で筆を回しながら宙を見つめている。

「コウヒ、」
返事どころか、振り向きもしない。
エンジュはため息をついた。
コウヒの周りを、書きかけと思しき表や図のメモが囲んでいる。
貿易品の項目やら官吏の相関やら、そんなものが彼女の頭のなかでぐるぐる回っているのだろう。

近付いて見ると、コウヒの横顔には目の下にはくまがくっきりと浮かび、頬が白いのが分かった。
ちょっと乱暴だとは思ったが、机に広げられていたノートを取り上げる。
「――――あら、エンジュ様」
ゆるゆると視線を上げて、コウヒがぼんやりと言った。
「あら、じゃないわ。何回も呼んだのよ」

「申し訳ありませんわ。食事なら、後で食べますので」

食事？

エンジュは渋面を作る。

「…コウヒ、いつから食べてないの？」

「いつから、とは…」

コウヒは窓の外に目をやった。

一体今がいつなのかもよく分かっていないのだろう。

失敗した、と思ったのか、コウヒは目元を片手で押えながら、大丈夫ですと言った。

「ちょっと集中していたので」

「食事を忘れる事を、ちょっととは言わないわ。寝てもいないんでしょう？」

エンジュの指摘に、コウヒは肩をすくめた。

「期限が迫っているので、仕方ありません」

「期限…」

エンジュはその言葉を繰り返した。

「お話しておかなければなりませんでしたね」

コウヒは言葉を選びながら、ゆっくり言った。

「青龍様とお会いしました」

父君に、と答えるエンジュの口は、語られる先に不安をにじませている。

「国学院へ戻ります」

あなたと一緒に、ここを出ます。

コウヒは迷いを振り払うように、きっぱりと言う。

「でも、コウヒ…兄君とリドお兄様は、」

「――決めたのです」

エンジュの言葉を、コウヒは遮った。

「ウオン様には、もう申し上げましたわ。他の選択肢には、怖気がします」

タルヒの巻き起こす騒動や、家族の要求の多さ、そのどれにも我慢が出来るとは思いません。

コウヒの答えに、エンジュは口を尖らせた。

はぐらかされている。

「コウヒは兄君が好きで、リドお兄様はコウヒが好きなのだと思っていたわ」

「そんなこと…どなたからお聞きになったのです？」

「姉さまよ」

コウヒは目をふせて、口元をゆがめる。

自嘲するように、また馬鹿馬鹿しいとばかりに。

「しょせん身分違いの恋ですわ、気にすることはありません」

「近いうちに、コウヒが本当のお姉さまになってくれるのだと思っていたのに」

コウヒはふふ、と笑って、ふくれるエンジュに抱きついた。

彼女がタルヒに招かれて、初めて青家に来たのは、９年前だった。

最初エンジュを見たときの印象は、なんと亡霊のような子だろう、だった。

顔かたちというよりも、その表情のなさが目についた。ちょうど、母がわりの女性が亡くなり、本邸の父のもとへ引き取られたばかりであったという。

周りに同年代の子どもはいなかった。

雨音もタルヒも、早々に寄宿舎へ入れられていた。父たる青龍は、およそ家庭むきの人間ではない。まだ学校に入れるわけにもいかな

い幼い娘を扱いあぐね、侍女たちに任せきりにしていた。
エンジュは邸の奥の奥で、古くから仕える老女たちに、まるで生きた人形のように育てられていた。誉められたり抱きしめたりされることもなければ、叱られたり折檻をうけることもない…。
はじめは同情だったかもしれない。
だが共に過ごすうちに、情がうつった。今は、エンジュを本当の妹のように思っている。

「私に、ついてきてくれないのね？」
「ごめんなさい」
その断りは、穏やかながら、きっぱりとしたものだった。
エンジュは肩を落とす。
「姉さまのところへ行くの、」
「タルヒと同じ邸で暮らすことは、私、きっぱりお断りいたします」
コウヒは、現在タルヒを世話している人々に、内心ひどく同情している。
女学院時代のことを考えれば、彼女に一番近い友人や先輩が特に被害が大きかった。タルヒの『花』であるという理由で、幾度学長室へ呼び出されたことだろう。彼女を、教師というかたちで未だに学院から出さないでいる学長は、英邁だとコウヒは思っている。
エンジュはともかく、上の姉兄は共に問題児として扱われているのだから、幼少期の育て方に間違いがあったのではないかと疑わざるを得ない。

「兄君は、なんておっしゃったの？」
「ウオン様ですか、」
コウヒは雨音の気難しい顔を思い出す。
胸を針で刺されるような痛みを覚えた。

青家を離れる、と伝えたコウヒに雨音は躊躇いながら言った。

『リドは何か言った？』
あいつの気持ちには応えてやってほしい。
雨音は一体何を言っているのだろう。
コウヒは、顔から血の気がひくのを感じた。
ぞっとした。
『あなたにお話しすることではありませんわ』
『僕は知ってる。あいつがずっと貴方のことを好きだったのを』
だから、その気持ちを踏みにじるようなことはしないで欲しい、
と彼は言った。
コウヒの気持ちにも気付かずに。

「何も。エンジュ様の大ゲンカについては教えてくださいましたけど」
今度はエンジュが顔をひきつらせた。
「オノセもリドお兄様も、おしゃべりね」
「青龍様はお笑いでしたわ」
父君が？
エンジュの声があがる。
同じ邸とはいえ離れて暮らし、会っても優しい言葉をかけるでもない父親を、エンジュは慕っていた。
生まれついての『国首の君』。
揺るがない視線と、美しい横顔。
遠目から見つめることも多かったが、機嫌の良い時には近くに呼んだり、歳を尋ねたりしてくれた。
「父君は今？」
「昨日からまた皇宮につめていらっしゃるようですわ」
そう、とエンジュは頷いた。
国首から宰相という肩書に変わったとは云え、父君が国政の大半をあずかっていることには変化がなかった。
自邸でより多くの時間を、皇宮の執務室で膨大な仕事に囲まれ過

ごす父に、尊敬の念を抱いている。

そう、と思い出したようにエンジュは話をかえた。

「皇宮といえば。…あの花、皇宮にしか咲いてないんですって」

花籠は、まだ寝室に飾っていた。

夜会の日に、リドが届けてくれた白い花の話である。

ああ、とコウヒは首肯する。

「贈り主が分かったのですか？」

いいえ、とエンジュは答えた。

「夜会では会えなかったわ」

結局、誰だか分らず仕舞いだった。

あの時花びらには、まだ朝露が残っていた。

となると贈り主は、皇宮に住んでいるか、神殿に関係する人物と考えた方がよい。

王族であるイトが声高に主張するくらいなのだから、帝から特別な許しを得て摘んだものだろう。

エンジュには、心当たりなどない。

「花の名前も知らないままだったわ。姉さまに聞いてみようかしら」

「タルヒが興味を持つ話題とは思えませんけれど」

コウヒは、タルヒの顔を思い浮かべながら言った。

西家と青家の繋がりに敏感になっている彼女のこと、下手に刺激しない方がいい。

「まあ、花は消えてしまったし、今は無理ね」

そうだ。

大ゲンカから戻ったときにはもう、白い花はすべて陽ざしに消えていたのだ。

籠だけを残して。

花籠自体は、黒い竹細工でできており、たいして特別なものでも

ない。

「あちらでは、短気を起こさないようにね」
コウヒは穏やかにほほ笑んだ。
「そんなことはしないわ。イトもいないもの」
唐突に、ソウセツの顔を思い出して、顔をしかめる。
コウヒは知らない。
この婚約の裏にある取引を、兄の約束を。
雨音の言葉が耳にこだました。
『3年だ、3年我慢してくれ――』

「オノセの言うことをよく聞いて」
「ええ、分かっている」
さようなら。
心の痛みにふたをするように、隠した気持ちを悟られぬように、
エンジュはコウヒに抱きつき、別れを告げた。

29

じじじ、と音がして、炎がゆれた。
壁に映る2つの影も揺れる。

「遅かったな」
「ご挨拶ですね、クオン」
「客観的な事実だよ」
赤々と燃える暖炉の熱を頬に感じながら、霜刹(ソウセツ)はひざまずいたまま顔を上げた。
白貂の毛皮が、木床に広がる。
外は雪が舞っていた。
今年初めのぼたん雪だ。

「雪が降るまでには戻るという約束でした。心外です」

暖炉を背に車椅子に座る男は吐息をつくと、指で向かいの椅子をさした。
座れ、ということらしい。
霜刹は、椅子に腰を下ろした。

ここは彩白(サイハク)。
西家の中心、湾をのぞむ高台にある都市だ。
霜刹は、先ほど帝都から帰還したばかりだった。
そのまま報告を、と言われ、当主・白虎(びゃっこ)の私室に通された。
目の前に座った男が、当代白虎を務めるクオンである。

「羽鳥(ハトリ)は発った。お前によろしく伝えてくれ、と言い置いてな」
気丈にも、泣き言ひとつ残さなかったよ。

クオンの言葉に、霜刹は眉間にしわを寄せた。
「そうですか…」
羽鳥。
姪であり、婚約者でもあった少女の顔が浮かぶ。
最後に会った時は、気がふれるのではないか、と思うくらい泣き、憔悴していた。
目を真っ赤にはらして、霜刹をなじる彼女の声がいまだ、耳をはなれない。

最愛の兄の死を受け入れられなかったのだろう。
霜刹にとっても、それは同じだった。
守れなかった。
誰よりも近くにあり、誰よりも大切にしたいと思っていたのに…。

こぶしを握って無理やり感情を封じ、霜刹は暖炉の火を見つめた。
彼女が隣国へ向かったというなら、約束は守られたはずだ。
「捕虜は？」
「帰ってきた」
これをお前に。
クオンはそう言って、細長い革袋を投げて寄こした。
刀の鞘だ。

霜刹は顔色を変える。
実用的だが、模様には見覚えがあった。
古い言葉で風の加護を願う言葉が、刻まれている。『風は常に我らと共にあり』
堅信礼のときに与えられた一振りだ。
サイカの物だ。
「これを！…どうやって、」
クオンは苦渋に満ちた声で語った。

「タカサキがお前に渡してくれ、と伝言してきた。短剣は彼がもっていった」
彼がもっていった。
それがどういうことか、霜刹はすぐに理解した。
自刃したのだ。
「そうですか」
「惜しい男だった」
クオンは霜刹から目をそむけ、瞼を伏せた。
その仕草に、彼もまた深く傷ついていることが察せられる。
サイカは彼の弟で、タカサキは彼の側近だったのだから。

「お前が持っていてくれ。その方があれも喜ぶだろう」
「クオン…」
「もう、わたしにはお前だけになってしまったな」
採風（サイカ）も羽鳥もいってしまった。
「2人が真っ先に飛び出していって、私たちがいつも慌てて追いかける役でしたね」
きっと、あちらで私たちを置いていったことを後悔していますよ。
霜刹は言った。

ほの暗くてはっきり表情は読めなかったが、クオンの口元は穏やかに結ばれている。
それを確認して、霜刹は口を開いた。
「体調はどうです？」
「いつもと変わらん」
クオンはそっけなく応じた。
季節の変わり目に必ずひく風邪をこじらせて寝込んだのが、霜刹が帝都へ出発する日だった。
「おかげで、じじいどもどころか、ミオまで大騒ぎだ」

と妻の愚痴をいう。
ひざかけを払い、歩行が困難な足をいまいましげに見せた。
「しかも、冬は足が痛む」
幼い日クオンは、落馬によって、左足の自由を失った。
先頭に立ち戦うのが身上の、西家嫡子にとっては致命的な事故だった。
いまだ、クオンに当主の座はふさわしくないと、声高に主張する輩がいるのも事実だ。

「それより、帝都はどうだった？」
「あそこの喧噪は相変わらずです。…もちろん、我らの要求は通してきましたよ」

「お前の結婚相手は…」
クオンは首をふり、言葉を変えた。
「いや。お前の意思は尊重している」

霜刹は、半ば目をふせるようにして、話に耳を傾けていた。
しばらく黙って考えにふけったあと、彼はクオンに焦点を合わせた。

「さて、青公女1人で幾つの生命が贖えるでしょうね」
霜刹はあわく笑った。
クオンは、顔を上げた。霜刹の瞳の奥に燃える炎と、目が合う。
しばらくそうして向かい合ったあと、ふっと破顔した。
「お前らしくもない、古典的な手法だな」

「餌にくいついた大物は、素早く網でとるにかぎります。
こういったことは、めんどくさくないうちに済ませたいので」
「砦の鐘でも、派手にならしてやろうか？」

クオンは茶化した。
「…祝いには、邸をいただきたく思います」
霜刹は、瞳をあかく瞬かせると、口だけに笑みを置いた。感情のこもらない声で続ける。
「波白（ハク）にあるサイカの邸を、ゆずっていただけませんか」
「…ああ、お前の好きなようにするがいい。公女がここへ着くころには、改装もすむだろう」
クオンは答え、目を閉じて椅子のクッションに身をうずめた。

「私のいない間の、評議院の動きは？」
「それも変わらん。互いの牽制に終始している」

西部の実権を握っているのは、当主の白虎ではない。
かつて白家（ハク）が断絶したときに、その威光も多くを失ったのである。
以降、１２の分家と騎士たちで構成される評議院が、最大の意志決定機関であり、白虎の地位はただ名目に過ぎない。
白虎の館と騎士団がある州都・彩白に対し、評議院のある波白は、西の政治の中心だ。

クオンは、幼馴染である青年をしげしげと眺めた。
彼のさすような視線に気づいて、霜刹は顔をあげる。
「そろそろ知らしめねばなりませんね、中央にも」
再び視線が交わった。
薪のはぜる音とともに、じじ、と影が大きく揺れた。
クオンは軽く頷く。
「帝は宮から出てこまい。年中、神殿にこもり、香をたいているようだからな」

現帝が、神殿を重用しているのは広く知られた事実だ。
聖都の機嫌をうかがい、皇宮においてはその代理人たる『御言持（みこと）

ち』や神官たちに絶大な権力を許しているという。
帝の青白く神経質そうな額と尖ったあご、そして能面のような表情と落ちくぼんだ光のない黒い瞳を思い出して、霜刹は少し笑った。

クオンはかた頬をゆるめて、弟の親友だった男を見る。
瞳は黒曜石のような黒。
記憶にあるものとは同じはずなのに、何かが違う。
すらりとした長身に純白の上着、そのうえに錦糸の刺繍がほどこされた黒いマント。
左肩でとめられたブローチは、黒金の十二芒星。西家の騎士のしるしである。
華やかな美貌に、凄絶な笑みをたたえてソウセツは言った。

「神殿から皇子が戻りました」

それ以上、彼は口にしなかったが、クオンはその意味が正しく理解できた。
「はじまるか」
2人はお互いの息がふれるくらいの位置で見つめ合う。
幼い日から、幾度も繰り返してきたように。

ただ、何かを失った。
「約束を果たしましょう、クオン」
「お前となら心強い」
霜刹は、クオンの言葉にふわりと微笑んだ。

「まずは青家から、ですか」

30

どうしてこんなことになったのだろう、とエンジュは口の中でつぶやいた。

視線の先には、広大な温室が広がっていて、それもまた彼女の苛立ちの一因だ。

「お先にどうぞ」

「わかっています」

向き直った相手に、ぶっきらぼうに答える。

この相手こそが、エンジュを苛立たせる最大の原因だった。

くせのない長い髪を日よけのレース飾りで覆った、黄葉の宮家の姫イトはいつも通り完璧な装いで、エンジュを促す。

もっとも、女王の方も穏やかとはいかないようだった。

手にした扇を落ちつかなげに、持て遊んでいる。

暑くもないのに、どうして扇など持っているのだとエンジュは思う。

馬の合わないイトに、彼女の腹立ちは高まるばかりだ。

2人はそろって黙ったまま扉をくぐって、奥に広がる薔薇園へ向かった。

ガラスで造られた温室の中は、塔のように高く、きらきらと外光を反射させる。

直接振りかかれば暑いと感じられるであろうその光は、しかし天窓にかけられた薄い紗によって和らげられている。

しかし、庭園の小道をゆく2人の周辺に漂う空気は穏やかさから程遠かった。

気の合わない2人が連れだって、しかも傍には誰もいないとあっ

ては当然である。

この温室の主である皇后は、今はいない。
帝に呼ばれていると先ほど、出かけて行ったのだ。
まさかまた、2人きりにされるなんて知っていれば、皇后のもとを訪ねなかったのに。
エンジュは思うのだが、その思いはおそらくイトも同じだろう。
「よう来ておくれだった。妾が戻るまで、お願いがあるのだが…」
そう言われれば、断れなかった。

2人はもう数十分もただ歩き続けている。
険悪な雰囲気で、言葉も交わさず足を動かしている様子は、喧嘩の前触れのようではあったが、しかしエンジュは決して挑発にはのるまいと心に誓っていた。
少し前、同じような状況で、自分がとった行動を反省していたからである。

勿論、イトの言に抗議する気持ちには変わりはない。
けれどもその方法については、改善の余地があるだろう。
皇后の花や花瓶を、使ったのはさすがに、まずかったと思う。
イトを引っぱたいてやりたいと言って、他のものを犠牲にするのは間違っている。
婚約者であるとはいえ、見ず知らずに近いソウセツに一件を収められたことはともかく、そう思う。

同じことになれば、とエンジュは考えた。
イトを叩くか、口でやりかえし、とりあえず道具や術はなしにしよう、と決めたのだ。
しかし。
驚いたことにそういった事態は訪れなさそうだった。

隣を歩く女王は相変わらず、好感のもてる態度とは言えないが、気にさわるようなことも言わなかった。
彼女は彼女なりに、例の一件について思うところがあったのかもしれない。

しばらく行くと、眼前に黄薔薇が咲き乱れる場所に出た。
エンジュは無言で胸元から、鋏をとりだす。
ぱちん、ぱち、と蕾の多くつけた花を2束切って揃える。
棘はない。
ここの薔薇は、皇后が自ら品種改良をしたもので、棘を持たないように、つくりかえられているのだ。
エンジュの横では、イトが地面に膝をついた姿勢で、枯れた葉を取り除いているところだった。

思えば、こうして彼女と花を切りに来ることになろうとは想像もしなかった。
互いに抱く嫌悪は別にして、エンジュがそう思うのは、深窓の姫君であるイトが土いじりをするとは思わなかったからである。
花には一家言あるという変わり者の皇后は特別にしても、身分の高い貴婦人たちは、自ら手を汚すことを極端に嫌がる。このお高くとまった姫君には、あまり似つかわしい趣味とは思えない。

そんなことを考えて、じっと見つめていたせいか、イトは唐突に顔をあげた。
不機嫌と嫌味の浮かんだ表情でエンジュを睨みつける。
「…何？」
「何でもないわ」
「そう。じゃ、ぐずぐずしないでさっさと終わらせて、こちらにちょうだい」
花輪を作るのだから。

エンジュは思わず、言いかえしそうになるのをこらえた。
その高慢な横顔を見ているだけで憎らしかったが、前回を思い出して鋏をぎゅっと握る。
決めたのだった。
エンジュは横を向いて言った。
「気が短いのね。一番良いのを選んでいるのよ、邪魔をしないで」
「なんですって、」
イトは目を吊り上げたが、それ以上は答えなかった。
忌々しげに舌打ちはしたが、それだけだ。
エンジュは目を瞬いた。
おかしい。
どういう心境の変化だろう、到底信じられない。

再び黙りこんで作業を再開させた2人の背後に、しばらくして衣ずれが聞こえてきた。
皇后だ。
従えて来た侍女たちに花を受け取らせると、どこかほっとしたように2人を見やる。
温室のどこにも変わったことがないのを確認してのことらしい。
「遅くなってすまなんだのう。上のお話が長引いて」
「おば上、」
「どうじゃ、2人とも。仲良く摘めたか」
穏やかに聞かれてエンジュは答えに窮した。

「…彼女は1輪ずつ選んでいましたわ、丁寧に」
イトがぶっきらぼうに、皇后に答える。
どうやら、お世辞や上手のために言っているのはないらしい。
その証拠に、侍女に渡ったエンジュの花束に真剣なまなざしを注いでいる。

エンジュは意外な気がして、イトを見返す。
イトの頬がかすかに染まったような気がしたのだ。
「だってそうでしょう？」
とイトは弁解するように言った。

「その花環は神殿におさめるもの。帝国の騎士をたたえて…もっとも、あなたには関係ないかもしれないけれど。婚約者だっていうのに挨拶もなさらず、西へお戻りになったのでしょう？ソウセツ様」
「あなたに言われたくない、」

両手を握って反論しかけたエンジュだったが、しかし次の瞬間、まじまじとイトを見つめる。
イトの言い方はいつもどおりに嫌味で、感じが悪かったが、表情が少し違う気がしたのだ。
「じろじろ見ないでいただけるかしら？」
目があったイトは途端に、不機嫌そうに顔をしかめる。
やがて、エンジュは違和感の正体に思い至る。

帝国の騎士をたたえて――。
イトはそう言わなかっただろうか。
何気ない言葉ではあったが、彼女が口にすると事情が違う。
世襲王家の姫君たる彼女は、帝国のためとはいえ辺地で血にまみれる西の騎士たちを密かに嘲っていたはずである。
もっともそれは、彼女だけではなく、帝都に住まう権門の人々の間では暗黙の了解のようなところがあった。
だが、イトがソウセツに良い感情を抱いていなかったことは確かである。
以前のひと悶着も、彼女の言葉に端を発していたのだから。

「…あなた、騎士が気に入らなかったのじゃなかった？」
思わずエンジュが訊くと、イトはぎくりとしたように気まずい視線を返した。
それはすぐに渋面にとってかわったが、その表情が本心でないことに、エンジュは何となく気付く。
「別に。わたくしは、ただ…騎士が帝国のために命を落としているのは、事実だと言いたかったのよ」
だいたい、とイトは言い訳をするように続けた。
「思っていることを言わないあなたなんて、らしくないわ」
気味が悪い。

31

「気味が悪いですって、」
反射的に言いかえしたエンジュは、しかし次の言葉をのみこむ。
まさか、あり得ないことだ。
あり得ないことだが、もしかして。
心配してくれているのだろうか…。

まじまじと見つめたエンジュに、イトは咳払いした。
「前回の件はなしにしてあげていいって言ったわ」
礼は尽くされたし。
イトは言う。
「あなたが静かだと、何だか落ち着かないの。それにわたくし、鬱陶しいのは嫌い」
イト、と皇后が横から咎めた。
イトは本当の伯母のように思っている皇后の制止に、逡巡したが結局続けた。
言わずは、いられないたちなのだろう。

「あなたのお姉さまに対して怒っているのは、本当。
それから、皇宮の花の件も」
ぶっきらぼうに言う。
またぶりかえすのか、と胸の前でこぶしをつくったエンジュにイトは視線を向けた。

2人の視線が交わる。
イトはずいぶん躊躇ったあとで、口を開いた。
「でも、ここを離れなければならないのは、あなたのせいじゃないと思い直したの」

たとえ公女でも。

「――私は…」

父君が決めた婚約だから、とイトの言葉をはねつけることは容易かった。

強がって、この場をのりきることは…。

だが、エンジュは瞳を伏せた。

そうだ。

イトの言葉は弱い自分の一面をうつしている。

エンジュは深いため息をついた。

和らぐどころか、時を置くほどに強く感じられるその痛みは、後悔という名の棘のせいだ。

あの日、ソウセツが旅立つ前の晩に、彼女は彼に会わなかった。

顔を合わせることはできなかった。言葉を交わしてしまえば、言いたくないことを言ってしまいそうになる。それが嫌で扉を閉ざしたままでいたエンジュは、しかし後になって気付いたのだ。

言いたくないことを言わないでいられた代わりに、言うべき言葉を伝え損なったことを。

――言うべきだったのに。

最後に聞いた彼の声を思い出す。

さようなら、と言った声は穏やかで、きっとソウセツは怒ってはいない。

彼女が会わなかったことを責めていたりはしないだろう。

しかし、エンジュは気になって仕方ない。

彼は怒ってはいないだろう、でも、後悔しているかもしれない、と思う。

彼女がそうであるのと同じように。

「もうすぐ、ここを発ちます」
だから早くソウセツに会えるといいのに、とは口にはしなかった。
一旦帝都を離れれば、いつ戻れるか、どころか本当に兄の言う3年で戻ってこられるのかさえ、分からない。
どうしたって、西へ向かうのは気が重い。

「そう」
と向き合う女王は、例の高慢な口調で言った。
「でも、暗い顔をするのは、やめてちょうだい。ほかに誰も心あてがないというなら、わたくしが文通の相手になってあげても良いわ」
「私は暗い顔など…」
していない、と言いかけたエンジュは、しかしそれを途中で止める。
イトの言葉は、彼女にとって意外な驚きをもたらすものだったのだ。

「――ぶんつう？」
文通が何か知らないわけではない。
しかし、今の今までそんなことを思いつきもしなかったのは、エンジュが手紙を書いたことも受け取ったこともなかったからだ。学校へも行かず邸と皇宮が、世界のすべてである彼女には、手紙を送るような知り合いもいなかった。
「まあ、それは良い考え」
考えもつかなかった、と感心したのは、皇后だ。

皇后は2人にほほ笑んだ。
「手紙が行き来するあいだに、そなたたちもきっと、良い友人になれるだろう」
互いに淋しくもあるまい。
「私は別に淋しくなんかありません」

そこはきっぱりと主張したエンジュだが、既に心は決まっていた。
窓からふりそそぐ陽の光が、あたりを明るくつつみこんでいた。

32

信じられない、と早足で歩きながら、エンジュは首をふった。
文通をしよう、と言ったイトの顔を思い出す。
冗談のような話だ。
ただ、心象は悪くはない。もちろん、2度と暴言を吐かれなければ、の話だったが。

あれから、イトと一緒に神殿に参拝するという皇后のもとを、早々に退出した。
長い廊下を通って、外回廊へ出る。
白い柱に支えられた回廊からは、手入れの行きとどいた庭園が見えた。
それぞれの柱のうえからは、えんえんと淡い黄色と紅色の花が垂れ下がっている。
うららかな春の宴。
もう、すぐ西へ出発する。そうなれば、ここともお別れだ。
エンジュは感傷にひたりながら、咲き乱れる花を見上げる。

そのとき、回廊の先、人工池にかかった石橋に見知った姿を見つけた。
異母姉のタルヒだった。
青家とは縁を切ったと公言している彼女とは、なかなか会えない。
タルヒは分厚い書物を幾つも抱え、足早に橋を渡るところだった。
「――姉、」
さま、という声は口の中に消えた。

タルヒが誰かに応じるようにして、振り返った。
手を差し出して書物を受け取ったのは、四宮（シミヤ）だった。

帝の2番目の息子。
すぐれた異能を持つ、神の御子。
夜会での出来事と2人の会話が回り、エンジュは表情がこわばるのを感じた。

『家族をとるというのか、あなたを捨てた家だ』
『選んだのよ、エンジュ――』

橋の上で、2人が親しげに、言葉を交わすのを凍りついたように見つめる。
その距離は近く、イトでなくとも、2人が恋人であるのは明らかに思えた。
耳元で交わしあう言葉。頬を染めて笑う姉。
エンジュはなぜか胸が痛かった。
声をかける機をのがしたまま、エンジュはただ立ちつくす。

風が流れる。
四宮はタルヒのほつれた髪に、かんざしを挿しなおした。
そのまま彼女の腰を引き寄せ、口づけを落とす。
エンジュはその様子を眺めていたが、やがて、我に返った。

「しばらく、ひとりにして」
後ろをついてきた侍女に声をかけて別れ、廊下を曲がる。
そうだ。
タルヒは既に、青家を出ている。
確かにエンジュの姉ではあったが、係わりをもたないのだ。
恋愛もしがらみからも、青家から自由だ。

途中に石段があり、そこを下りるとすぐに直接庭園へ小道がつづく。

刈り込まれた樹木を通り過ぎると、彫像があらわれる。
人工の池と、髪をなびかせた精霊の像。

エンジュは噴水の前で立ち止まり、大きく息を吸い、垣根をくぐった。
最後に、あの木に会っていこうと思う。
いつでも、す、と勢いよく伸びた大木を見れば、嫌なことや悲しみも忘れられる気がした。

垣根をかき分けるようにして進み、ようやく開けた先の大木に駆け寄ろうとして、エンジュは唐突に足を止める。
そこには、先客がいた。
慌てて引き返そうと踵を返すエンジュに、相手は声をかけてきた。
「こちらへいらっしゃいな」
温和な笑みの女性が、静かに手招きしている。
どうやらエンジュに気づいていたらしい。
招かれるまま、大木にもたれている女性の方へエンジュはおずおずと足を進めた。

「ずいぶん古くて立派な木。ね、そう思わない？」
でも、この皇宮にはそぐわないわね。
女性は黒目がちな目をほそめて、エンジュに気さくに、そう話しかける。
エンジュは穏やかにかけられた言葉とは裏腹に、何だか背筋を寒いものが走ったような気がして身を震わせた。

女性は、エンジュの反応を確認するようにこちらに眼差しを向けたまま、長い袖口をあげて木にひたりと、手をそえた。
紫の濃淡を品よく纏った衣装に、銀の帯。
黒髪に黒瞳。

この国の者では一般的な色を伴った容姿だが、ひと目見たら忘れられないほど、その容色は印象的だった。
美しい。
けれども、しげしげ見つめるのは恐ろしい。
そんな感情を抱かせる美貌だ。
額には薄紅の紋様が刻まれ、腰に届きそうな髪はただ背に流れていた。
若くはないのだろうが、はっきりとした歳はつかめない。
皇宮の化粧を施しているのは分かるが、会ったこともなければ、見たこともない。

戸惑いが顔に出たのだろうか、女性は問いを制するように口元を引き上げた。
「わたくし、実はあなたを待っていたのよ」
「私はあなたを存じません」
警戒を解かず、かたい声で切り返したエンジュに、彼女は悪びれずに、そうね、と応じた。
「会ったこともないのだから、当然だわ」
灰色のこう彩の奥で、緑にも見える黒がきらめく。

「…失礼ですが、」
「ああ。お名前は教えて差し上げられないの。それがあの子との約束だから」
ごめんなさいね。
でも、わたくしはあなたの名前を知っているの。美しい名前ね、エンジュ。
そう言って、にっこりとほほ笑まれる。
エンジュは、黙って彼女を睨みつけた。

「あら、そんな怖い顔をしては駄目よ」

彼女は何がそんなにおかしいのか、のどを鳴らして笑い声をあげた。
首にかけた、大粒のアメジストが上下する。
「わたくし、あなたに微力ながら力をお貸ししようと思っているのよ」
「あの…どういう、」
「そう、戻るには長旅が必要だわ」
エンジュの声を遮って、女性は言った。
「ひとりでは迷子になってしまうかもしれない。遠いのですもの、目的地は」
2秒ほど沈黙した。
戻る、と彼女は言ったのだろうか。
それは、兄との約束のことを言っているのだろうか。あの子、とは誰のことだろう。
エンジュは必死に考え、言葉をさがした。
この婦人は何をしようと言うのだろう。
情報が足りず、訳のわからない恐怖も手伝ってエンジュはしどろもどろに答えた。
「確かに、ええ。しかし、…」
「おびえているの?手が震えているわね、」
女性はエンジュの右手にさらりと触れた。
震える右手を左手でにぎりしめて、エンジュは一度目をつむった。
駄目だ。とても隠せない。
「大丈夫よ。そんなに警戒しないでちょうだい」
歌うように彼女は言った。
「古き貴族は大なり小なり、恩寵の力を持っているもの。

そうでしょう?」
恩寵の力で、エンジュの内面をのぞき見た、と言いたいのだろうか。
彼女は、黒い瞳をしばたたかせてエンジュを見る。
彼女が持つ色は、ちょうど曇天のなか、さしこんだ光によって照らされる波のしぶきを思わせた。

「でも、あなたの兄君には、協力できない」
申し訳ないわね。
女性は、エンジュの考えを読んだように続けた。
ふわりと風に、彼女の髪がゆれる。
精霊が強い恩寵に集っていることが、エンジュにも分かった。
背筋を冷たいものが滑り落ちる。

女性は、衣を腕にかけてなおしてからエンジュの前まできて、かがみこんだ。
絹のレース襞が地面にひろがり、エンジュはそれが気になる。
内緒話をするように、彼女は声をひそめた。

「甥がね、あなたのことを気に入ってるようなの。それがここに来た理由。
わたくしは、彼のためにあなたを助けてあげようと思って。花は届いたでしょう?」

エンジュは目を見開いた。
花?
夜会に飾ったあの花のことだろうか。
女性の口元は笑みの形を保ってはいるが、目は笑っていない。
鼓動が速くなる。

「ありがとうございます」
エンジュは平静を取り戻すために、とりあえず頷き、息をついだ。

「あなたのお返事は？」
あごを少しあげて、彼女は促す。
口調は疑問形だったが、拒否できそうもない強引な口ぶりだった。
「その前に、聞かせていただかないと」
エンジュは頭を必死に回転させて、言った。
「あなたの条件をのんだ場合、私は何を支払うのでしょうか」

「あら、存外しっかりしているのね」
「私も青家の娘ですから」
彼女はエンジュの背後にまで目を配るようにして、ゆるく首をかしげた。
「あなたのそばにいるご友人に、少し協力していただきたいわ」

それがこの地へ戻る通行証だと彼女は言った。

33

エンジュは振動する窓の外へ目をやった。

あの女性の正体は分からずじまいだった。

真の目的も知れなければ、再び会うこともなかった。

「きっと夢でもご覧になったのですわ」

というのがオノセの結論である。

エンジュはそんなことはない、と今日幾度目かの否定の言葉を返す。

「夢と現実ぐらい、区別はついているわ」

恐ろしい位、強い異能の持ち主だった――、とエンジュは振り返る。

そうだ、背筋が凍るほどの恩寵の力を感じた。

精霊が泣き、木々がざわめくほどの。

「せめて、住まいを聞いておくんだった」風に捜させたのに。

「厄介なことに首を突っ込むのはおやめくださいませ。

コウヒ様もお帰りになり、ようやく落ち着いたところですのに」

やれやれとばかりに、オノセが首をふる。

エンジュは頬をふくらませた。

コウヒは、青家の邸前でエンジュ達を見送ったあと、国学院へ出発した。

見送りに出た父は、娘との別れを惜しむよりも、コウヒに懇ろな挨拶をおくっていた。

それも仕方ない、とエンジュは思う。

「コウヒの先生は、ジケイだものね」

ジケイは、高名な歴史学者であると同時に、南部第一の諸侯である赤家（セキ）の前当主であった。
青家とはいわば、同格。
その愛弟子に、敬意を表するのは、父とすれば当然のことだろう。
「まあ、それだけではございませんでしょうけど」
オノセは苦々しく応じる。

常々コウヒを煙たく思っていたオノセは、青家を出たあとは安堵の表情を浮かべている。
今は、エンジュの向かいで、荷物の目録に目を通していた。
ここから見えるのは、遥かな山々とその間を縫うように走る街道ばかりだ。
馬車は帝都を出発し、北部街道を進んだ。天山山脈の手前で、方角を西へとかえて。
これが帝国西部へ向かう一般的な陸路である。
既に、道を西へきっているのは知っていたが、エンジュに確認できたのは、北部独特の地形だ。
峻厳な山に囲まれ、やせた土地。
オノセからは幾度も聞かされていたが、見るのと聞くのでは大違いだ。

帝都を出発して既に、1週間が過ぎた。
はじめは揺れに酔い、宿舎に着くたびに、倒れるようにして眠る日々を過ごしたものだったが、ここ数日は体が自然と慣れてきたのか、食事もとれるようになってきた。
外へ目をやる余裕もある。
その窓からさす光がまぶしくて、エンジュは目をすがめた。
馬車の中は空気が遮断されているせいか、温かい。
だが、道行くさきの西の空には雪雲が重く居座っている。

馬で行く護衛の者たちの息が白く染まっているのを、エンジュは眺めた。
常春の皇宮は別にしても、帝都周辺には雪は積もらない。
地図で見れば、まだ帝都に近いはずなのに、結構気候が違うものだと当たり前のような感想を抱いたエンジュに答える者は、隣にいない。
なぜ引き離されなければならないのだろう、とエンジュは憂鬱に考えた。

そもそも出立のときから、納得がいかなかった。
「いい加減、機嫌を直してくれないか、」
先ほどの休憩で馬車を降りた時に、兄はそう言って宥めてきた。
「嫌です」
「エンジュ、お願いだから」
馬車に別々に乗ることになった件である。
出立の際、父の侍従が、雨音に別に乗るように、と伝えてきたことが発端だった。
慣例でございますれば、と有無を言わせず、エンジュはオノセと2人馬車に押し込まれたのだ。

「何でも良いですが」
冷静な、というよりもむしろあきれ果てた声音で2人のやり取りを遮ったのは、リドだ。
苦虫をかみつぶしたような顔は、この旅の間にすっかり板についてしまった。
「もうひといきで、城壁が見えるはずです。目的地ですよ」
どうします、と唸るように問われて、雨音とエンジュは肩をすくめた。
何もそんなに不機嫌に問わずとも良さそうなものだ。

公家の輿入れとあって、行列は馬車を幾つも連ねた大がかりなものだった。
おいそれと都を動くわけにはいかない父の名代として立った世子・雨音をはじめ、エンジュに仕えるオノセや侍女たちに至るまで、総勢５０名は下らないだろう。
一行に同行しているリドは、北部にある自領へ戻るついでなのだという。
いつものように、悪友を自称する雨音がひき入れたに違いない。
だと言うのに、帝都を出てからリドは腹を立ててばかりだ。

全く、コウヒが行ってしまったからって、とエンジュは思う。
「そう怒るなよ、リド。別邸には到着の先ぶれを出す。忘れてない」
「それを聞いて安心しました」
リドは嫌味を口にしたが、雨音はあまり堪えた様子もない。
兄は、コウヒとの別れも落ち着いたものだった。未練がましいリドとは大違いである。
嫌味は、余裕のある人間には通じないものらしい。

では知らせに行かせましょう、リドに促された雨音は、肯こうとして途中で止める。
「いや、出さなくていい」
「なぜです、」
「あちらからの、迎えだ」
うすけぶる街の方から、騎乗した男たちがこちらに向かって駆けてくるのを指した。
騎士だ。

翻る方旗は、白。
西家の色だ。
薄く差し伸べる陽を背に、騎士たちはあっという間に近付いてきた。
立ちあがったエンジュたちをぐるりと囲む。
馬のいななきと、息遣いだけが落ちる。
鈍色に光る甲冑と兜によって、騎士たちの表情は全く分からない。

「青家の一行とお見受けする」
騎士のなかでも特に重厚な鎧をまとった人物が、深く目礼して口上を述べた。
「我らが主の命により、迎えに参りました。聖堂まで案内させていただく」

すでに、用意は整っていると言い、エンジュは追われるように馬車に乗せられた。
雨音とリドは先頭の馬車だ。
ソウセツは到着しているのだろうか。
外を走る騎士に、窓を開いて訊いてみたいような気もしたが、結局エンジュは黙ったままだった。
兄に知られれば、叱責を受けるだけではすまないだろう。
代わりに小さくため息をついて、エンジュは呟く。
「…息がつまりそう」

そろそろ街を横切るかと思われる頃、並走していた騎士が馬車の窓をこつこつ叩いた。
エンジュは、硝子戸を下ろして窓をあける。
「見えましたよ、姫君。あれがアサノの神殿です」
大通りの正面、曲がりくねった路地と家々が連ねるその奥。

街を一望し、小高い丘に建てられたその建物こそ、ついにたどり着いた目的地なのだった。

34

手を取られ、ステップをふむと石畳の広場に降り立った。
闇の時間が迫っている。
けぶるように雨が降っており、隣に立つ兄の髪をぬらした。
冷たい雨だった。

エンジュが顔をあげると、騎士たちは白い息を吐くのが分かった。
右には、総勢２０は下らぬだろう騎士たちが松明を空に向けて立っている。
一分の隙もない挙作。
左には、旅を共にしてきた青家の面々。

広場を覆っているのは、重い緊張だ。
暗がりに、灰の壁がそびえたつ。
目の前には、石肌のままの古い造りの聖堂。
アサノの神殿だ。
「ようこそ、いらせられました」
内側から神官が扉を開き、両脇に並んだ者たちが次々と膝を折るなか彼女たちは中へ進んだ。

列柱を１つ通過するたびに、神官によって鈴が鳴らされる。
どの柱にも１人ずつ神官が鈴のついた、つり紐の隣に立っていた。
最後に、ゆるい階段をのぼる。
行き止まりの壁には、巨大なタペストリーが掛かっていた。
５人の騎士の姿が織り込まれている。

白衣を身に付けた若い騎士の肩には、１２つの突起を持つ黒星の

記章。
建国記だ、とエンジュは呟いた。
１人の英雄と、４人の騎士たちによる戦いと建国の歴史。
英雄は王となり、４人の騎士たちは大公家の祖となった。
青家の祖は、王のすぐ隣で杖を持つ、青衣の老人である。

雨音は、そのタペストリーの前で一度足を止めた。
その横顔は、厳しくかたい。
「中へ、もうあっちは来てるはずだ」
兄はエンジュに囁くと、神官に合図をした。
タペストリーがゆるゆると巻き上がる。
「こちらへ」
香の煙がゆるく、立ちのぼった。

煙の向こうは、大天井があった。
エンジュは、タペストリーの先へ促され、入るなり、その空間に圧倒される。
とても広い部屋。いや、部屋ではない。
見上げた天井は暗くかすみ、高い柱の途中に光る明りがアーチ型の細い梁の柔らかい影を壁に重ねている。
深く沈んだ窓は、外部のわずかな光によって、鈍くいろどられた絵画を思わせた。
ステンドグラスだった。
心持ち、上を向いたまま広い場所に移動すると、さらに高いドームが真上に広がる。天空を貫くほど高い。
ここがアサノの教会の中心、大聖堂だ。
木製の質素な椅子が幾列もならび、正面の壇上には、数人の男が見える。
柱がせまい間隔で立ちならび、両側の回廊はとても暗い。

振り向くと、大きな木製ドアが両開きで開け放たれている状態で、無骨な石造りの通廊は、その木製のドアの奥にあった。
彼女たちは、そこからでてきたのだ。

雨音とエンジュを先頭に、しずしずと紫の絨毯を進んだ一行は、段下に集った。
先に馬車を降りた、リドの姿もあった。宣誓が行われる準備は既に済んでいる。
ここで、エンジュの身は互いの約定のもと、西へと引き渡されるのだ。
鼓動が速くなる。
「ここへ」
壇上からふる声に、エンジュは顔をあげた。
上から、壮年の男がまっすぐに彼女たちを見つめている。
神官、それも最高位に近い聖職者だ。
襟を立てた白い上着に、紫のマントを左片側に掛けていた。留め具は、幾つも連ねられた黄水晶。
青みがかった銀髪は短く、額の広い顔は白い。中央にはお決まりのように、花のような紋が咲いている。
瞳は熟れた葡萄のような、赤。
とがった鼻が、彼のひく血の高貴さを示していた。
『神の御子』である。
とっさに、エンジュは皇宮で出会った四宮への不快感がよみがえったが、神殿では『白髪赤目』は特別ではなかったと思い直す。

「お待ちしていた」
道中無事で何より、としゃがれた声で、男は言った。
神居（カムイ）のシキ様だ、とエンジュの耳元で兄が告げる。
神居とは、第3位聖職者の称号である。

その印である、白い杖。
杖をにぎる左手首に、複雑な紋の入った金の環がはめられているのを、エンジュは見た。
金環は、額と同じ模様をくりかえし描いている。

雨音はエンジュの手をひいて、段を上った。
シキの隣には、もうひとり男が立っており、その白い騎士の衣装から、西家の者であるだろうと思われた。
シキは滑らかに、2人に話しかける。
「夜は昼よりも大きい。何もかも、大きく見せてくれる。ここは小さな聖堂だが、こうして夜になると、どういうわけか、天井も高く見える。
どうして、われわれは、こんな大空間をねつ造しようとするのか」

「ほかの建物にも、大規模なものはあります。皇宮もしかり、ですわ」
エンジュは答えた。
「支配者の威、ですね」
雨音の言葉に、シキは肯く。
「そう、われわれの文化、思想、哲学には、しかし建物の天井を高くする意味など、もともとない。なぜなら、われわれの天井は、空だった」
「空はどこにでもありますわ」

「われわれには、外と内の明確な区別が存在する。その区別を望んでいる。外は悪、内は善。だからこそ、しっかりと都市の周囲を城壁で囲い、厚い壁がしっかりと外気を遮断する。そのかわり、自分たちの領地を少しでも広げるために、天井を高くしてきたのでない

かな、」

「師父。このような場で問答は、お止めください」
階段になった1段低い場所には、２０名ほどだろうか、年若い神官たちが列をなしていた。
身を乗り出すようにして、ひとりの青年神官が、渋面を作っている。
彼もまた、銀髪に、血の色の瞳をしていた。
ここに整列しているのは、列柱に控えた神官たちよりも明らかに高位なのだろう。
紫の衣は金糸で縫いとられ、白い被りものをしている。
皆、比較的若い。

「分かっておる、進行させればよいのであろう」
諫める声に、シキは曖昧に微笑む。
年若い神官たちを宥めるかのように。
シキが手を振ると、杖の先に付けられている玉が重なり、しゃりしゃり鳴った。

「では、皆揃ったところで、婚約の儀を執り行うとしよう。…タイハク殿、」
そう促され、黙ったままだった騎士は進み出て、口を開いた。
西の訛りだ。
「西よりご挨拶申し上げる、タイハク・エル・ハクです」
エルは、『真の』という古い言葉。
ハクは、西方を統治する西家白家のこと。
彼の名は、十二西家の生まれであることを示している。

「お目にかかれて光栄です」
雨音が軽くお辞儀をした。

エンジュは目で、ソウセツの姿を捜す。
だが、壇上には他に誰もいない。

「白桜のソウセツの代理として参りました」
タイハクはエンジュの戸惑いを制するように、言った。
ソウセツの伯父にあたるという彼は、齢６０に届こうかという外見で、立派な口髭をたくわえている。左肩には、タペストリーと同じ黒金の１２の突起がついた星が輝いていた。
こちらに向けられた眼差しは凍てつくようで、吹雪の夜を思わせる。
「彼は？」
「領地にて、雪に留められておりますれば」
ご寛恕願いたい。
よどみなく兄に謝意が述べられる。ただし、瞳は揺るぎもしない。
前もって準備されていたやりとりのように思えた。
雨音は肯き、気にしないという態度を示したが、エンジュは釈然としない。
北西部では、深雪は通年だ。
ならば、早めに領地を出ることもできたはずだ。
会いたくない、ってことなのだろうか…。
エンジュは口の中で小さく呟く。

「では双方、書類へのサインを」
シキは、エンジュの思考を遮るように片手をさしのべる。
背後から書記官があらわれる。
帝の勅使であることを示す黄の記章を身に付けたその男が運んできたのは、盆に載せられた紙。
長々とした文章が紅い文字で綴られている。
使われているのは、どうやら帝古語らしい。

帝国ではすでに使う者もいない、滅びた言語だ。
青家の娘として、教養の範囲で読み方を習ったが、複雑な上に長文になると、読み下すのに時間がかかる。
「署名を、ここへ」
ゆっくり眺める時間さえ、与えられないらしい。
エンジュは書記官に筆を握らされ、うながされるまま名前を記した。
すでに、父である青龍の署名は済んでいた。

書類は、そのままタイハクの元へ渡る。
そして、代理としての署名を済むと、シキの前に紙面が広げ直される。
彼は、盆の上に置かれた誓文を静かに見つめ、1度目を閉じて、文字にふ、と生気(いき)を送る。
ちろちろと、字に紅くほのおが走り光をあげ、やがて消えた。
名によって、紙面での誓いに効力をもたせる術だ。
神聖な誓い。
異力が薄れゆく現在では、ごく一部の神官にしか使うことができないという幻の術でもある。
エンジュにとっては、初めて見るものだった。
凝視していたのが分かったらしい。
シキは少し濁った目を上げ、面白そうに瞬かせた。

書類を確認した書記官が、段の前へ進み出た。
眼下へ誓文を掲げる。
「皆の前で誓いはなされた。西と東に幸いなれ！」
居並ぶ人々が同様に、唱和する声が響いた。
「東と西に！」
「西と東に！」

エンジュはタイハクに向き直り、膝を一度曲げた。
「エンジュ・エル・ソウです。お招きに感謝します」

35

小さな雪のつぶてが、風になぶられて窓をたたく。
厚く垂れこめた雲は、光の一筋も通さず、白と灰色の景色が広がっている。
道行く人はなく、ここアサノの街は死んだように息をひそめている。

「吹雪が？」
辺境の冬には珍しくない光景、けれど帝都育ちの者にとっては、この鬱々とした景観は初めて接するものに違いない。先ほどから窓の外ばかりを眺めている彼女に、シキは珍しいのか、と訊いた。
暖炉では薪がはぜ、部屋を芯からあたためている。
長椅子に座ったまま客人は、窓辺に立つ少女を見た。

「館に庭をつくらないはずです」
エンジュは、ぽつりとそう返した。
こう吹雪いては、庭に手を入れるどころではないでしょう、と。
シキが彼女の滞在するこの館を訪ねたのは、先刻だ。
街路に面した庭のない邸宅は、頑健で、街の中心にありながら人々の猥雑な暮らしとは無縁である。
この街で知らぬ者はない。剣を携えた兵士が昼も夜もなく、門をかためる、この物々しくも壮麗な館に、一体誰が逗留しているのかを。

「兄上はどうされた？」
「すでに発ちました」
「名残りを惜しんでおられるか」
「いいえ」

別れはすませました、とエンジュは答え、振り返る。
雨音とリドは、雪の止んだ明け方、帰路についた。
見送ったのも、この窓辺だ。
『次の教会の鐘が鳴ったら、北を向いておくれ。僕もお前に手を振るから』
そう言って、見送りに出ようとしたエンジュを邸に留めた。
ここは帝都とは別世界だ。
冬といえば、雪がちらつく程度である都に対し、北部の入口とはいえ山間に位置するアサノには膝あたりまで積雪することも珍しくないという。

エンジュは窓の外から目を転じた。
「それに、兄君は側近を残してくれています」
「その青年か、」
理深（リシン）です、とエンジュは頷いた。
シキの目が、戸口の脇に立つ猫背の青年をちらりと見た。
理深は、瞳を伏せたまま一礼する。
自らの代わりに、と兄が置いていった理深は、言うなれば『貸し与えられた側近』である。
西における青公女代行をおこなう権利を認められている。
「大陸東部、ガラシヤだな」
確認するようにシキが言った。
まとう風が違う。
エンジュが同意した。
「彼の祖母が、ガラシヤ公国の貴族です」
目新しいことの好きな兄は、選ぶ友人や従者も、その傾向にあった。理深は、鎖国政策をとり続けてきた帝国が、唯一独占貿易を許してきた異国ガラシヤで、生まれ育った外交官の息子である。クォータである彼は、兄の好みに適ったのだろう。その外見、亜麻色に近い髪によって。

シキは、そうかと頷き、話題を変えた。
「今日そなたを訪ねたのは、挨拶をするためでな」
近日中にはここを発つ予定だ、という。
シキは、ここからずっと北部に入った聖都に居住している。
建国の聖地であり、神殿の長である『聞こえの大君』がいます聖山と神殿がある。
シキ自身は北西の管轄を任されているものの、中央神殿を離れることは殆どないと語った。
ソウセツとのこの婚約が、神殿でもどれほどの意味を持つのか、エンジュはまざまざと理解する。

「しかし、領地の采配には吾も力を貸そう」
そなたの兄との約束だったゆえ。

領地というのは、エンジュの名によって治められることになったこの地のことである。
中心はこのアサノ、その近隣に3つの村を擁する拝領地だ。
アサノ自体は小さい街だったが、西への重要な交通の拠点となりえる。
帝都を発つ際に、父の名の下、切り与えられた青家の飛び地だ。
今までエンジュには、長く住むわけではないこの土地が自分のものになると聞いても、たいして感慨もわかなかった。最後までエンジュ個人の領地にこだわったのは、兄である。

父君は当初「政治にままごとを持ち込むとは、」と兄を叱責したらしいが、エンジュの支度金や侍女を領内で賄うことを条件に、アサノを青家から切り離すことに同意した。

勿論エンジュはこのまま西へ向かい、今まで通り、領主は不在となる。
実際の行政は、現地役人と議会が運営するだろう。
ただ、高位神官の助力を得るということがどれほど重いことなのか、強い異能を尊ぶこの帝国に育った者としてエンジュに分からぬではなかった。
戸惑う彼女に、シキは紅い目を瞬かせ、穏やかに言葉を継いだ。

「何も、そなたばかりの為ではない。アサノの神殿の守りは、もう老齢でな」
新しく神官を派遣せねばならぬのよ。
目線をエンジュから、扉の側に並んだ3人の神官たちに転じる。
シキの供である、弟子たちだ。
ひとりは白髪赤目の女性で、後の2人は黒髪黒瞳の男性である。
シキは、はてと首を傾げた。
「そういえば、オウリはどうした？」
「――師父が謹慎を申しつけられましたわ、ご記憶にございませんの？」
打てば響くように、3人の真ん中から凛とした声が返った。
女神官だ。
じっとシキを見つめるその赤目は、非難の色を宿しているようにも思えた。
「おお、そうだ。そうだった」
忘れておったわ、とシキは眉をあげた。
女は、ため息をつく。
「師父…、それは」
「ならば、ここにおらぬあやつで決定だな、コトハエ？」
いつもいつもオウリが吾をせっついて、うるさくてかなわん。
同意を求められた女神官は、苦笑いで応じ、残る2人の神官も控

えめに賛同した。
どうやらこのような会話は、いつものことであるらしい。

しばらくしてシキは、エンジュに視線を戻した。
「時に…皇宮の様子はいかがかな？」
「皇宮、ですか」
「皇子が戻ったようだ」
神殿から。
シキの目は穏やかながら、内心を決して悟らせない。
「四宮殿下のことでしょうか」
「北西の神殿は、吾の管轄なれば」
警戒しながら尋ねるエンジュに、シキは肯定した。
政教の分離はむろん心得ている、とつけ加えられる。
しかし、中央の動向を窺っていることは否定するものではない。

「南部がついておる。彼は有力な候補だ」
そなたの姉も。
まっすぐにエンジュに据えられているその瞳は、紅く輝いている。
シキが、どのような姿勢であるのかは、推し量ることはできなかった。

神居（カムイ）であれば、神殿の動きも熟知しているだろう。
エンジュは思わず尋ねたい衝動に駆られたが、しかし問う言葉は出てこなかった。
今ここで、直接四宮のことを質して、はたして正確な情報を教えてくれるだろうか。
だが、これが千載一遇の好機であることも否定できない。
青家や兄君のために。
どうにかして、有用な情報を聞き出すことができないかと真剣に頭を巡らせるエンジュだったが、しかしその思考は相手の呟きによ

って途切れた。
「…無論、…には劣るが」
「え、」
「その右手は、あの方か…」
シキの指が、エンジュの手の甲に触れている。
皇宮で出会った女性が、触れた場所だ。
唐突に、脳裏に声が響く。
『力になってさしあげようと思って…』
精霊が集うほどの異能。
額に描かれた赤い紋様。

エンジュはぞっとしながら、あの女が神殿関係者だとひらめいた。
「…皇宮の、私が出会った方はどなたなのですか？」
「まだ知らぬほうがよい」
シキの返答はそっけないものだった。
だが、次に問われた質問にエンジュは意味が分からず、沈黙する。

「そなたの望みは？西か、中央か」
エンジュは、望んでここへ来たわけではない。
家のために、父と兄のためにやってきたのだ。
意図を悟って、ゆっくりと口を開く。
「…中央を」
「その言葉、ゆめ忘るるな」
エンジュを見つめ、シキは紅い目で念を押した。
あの方は気まぐれで信用ならぬが、と彼は続ける。
「吾も助力は惜しまん」

36

彼女は裸のまま、シーツの波にうもれた。
うねる長い黒髪が、端正な彼女の顔を縁どっている。

「…タルヒ」
名を呼ばれて彼女はゆっくりと半身を起こす。
若い男はほっそりした裸身にすがりつき、熱心に言い募った。
「会いたかったよ。皇宮での噂を聞いて、ぼくがどんなに心を痛めてたか」
「ジウ、」
彼女は背を向けたまま、乱れた髪を横に流した。
男は彼女の首筋に幾度も口づけてゆく。
なされるがままになりながら、タルヒは冷えた頭で考えた。
この男、ジウとは長い付き合いではない。
特別な相手でもなかったが、今はそう思わせる必要がある。
彼は５つある世襲王家のひとつ、桐(きり)の宮の次男でまだ１５の少年だ。
青家の娘を母に持つ王族の少年。血縁上では、彼女の従姉弟にあたる。
父、青龍の身辺を探るのにうってつけの、駒。

「どんな噂をお聞きに、」
「君が四宮に利用されてる、って噂さ」
「利用されてる？」
「君が、あの皇子を愛してるはずないじゃないか。

おおかた、紅派の命令で四宮に近づいたんだろ。南部は君を、皇子を取り込むための道具に使ってる。利用されてるんだ」

タルヒはジウの顔をまじまじと見た。

彼の口から、そんなことを聞くとは思わなかった。

「分からないわ」

四宮を取り込むって、どういう意味なの。

「意味って…別に」

彼は強引に唇をかさねると、そのまま彼女の体を抱きよせて口づけを深めた。

熱い息。

熱い身体。

それなのに、タルヒの芯は冷えていくばかりだ。

はたして、それは少年には伝わってはいないようだった。

「ああ、タルヒ。

いつになったら、ぼくたちの関係はおおやけにできるだろう。ナルミヤが男児さえ産めば…帝位を正統な血統に」

ジウは熱くひといきに言った。

おそらく彼の父宮か兄王が、2人の関係を知ればただでは済むまい。

タルヒは、笑いをこらえる。

あの秘密主義の父、青龍も、こんなところで己の野心を潰されているとは思うまい。

青家へ出入りできず、情報に不足している以上、ジウにはまだ役に立ってもらわなくてはならない。

そのためにも、しばらくは彼を恋に惑わせておく必要がある。

タルヒはジウの頬に、ねだるように唇をよせた。
「ね、ジウ。正統な血統ってどういうこと？」
「四宮には権利はないってことさ。父上がおっしゃっていた」
「……そう」
その話は彼女も聞いたことがあった。
かつて帝は、即位と同時に青家本家から妃を迎えたことがある。
現在の皇后とは別の女性だ。
当時は国首たる青家が権力を握っており、融和のために意図された政略結婚であった。
沈みゆく帝国。
熟れた果実が内側から腐っていくように、中央政治は腐敗がすすんでいた。

実権をもたぬ帝と、政権を担う青家の出である蒼妃。
結婚当初の2人は仲睦まじく、その間に生まれた四宮が立太子し帝位につくことだろうと、誰もが信じた。
ところがその5年後、事態は急変する。
紅派と呼ばれる南部中小貴族たちが、変革のすすまぬ国政に不満を爆発させ、いっせいに反旗をひるがえしたのである。
事件はそのとき起こった。
過去どんな政局にも代々、沈黙を守ってきた帝が政権を掌握し、国首を幽閉したのである。
まもなく国首はその座を追われて反逆罪に問われ、一族は連座のうえ領地の大半を失った。

政権の奉還直後、混乱の最中、初宮（ハツミヤ）が太子に立てられた。
身分の劣る妾妃から生まれた、第一皇子である。
父帝の強力な後押しがあったと言われるが、今となっては真相は闇の中。
蒼妃はほどなくして離宮に移り、毒を飲んで亡くなったという。

「…それで？」
彼女は、続きを促した。
「なんでも、蒼妃には愛人がいたらしい。四宮は、その男の子だと。神殿が真実を知ってるだろ、過去をひもとき、未来を夢見るんだから」
「では、神殿に問いあわせれば殿下の素性もはっきりするということ？」
「あたりまえだよ！」

「四宮は、皇統を引いていないって証明できるさ」
「そう…でも」
「たとえ引いているとしても、ずいぶん薄い血だ。血の濃さでは、ナルミヤの産む子にかなわない。それに、ぼくたちや。
父上は皇位自体に興味がないようだけど、兄上はどうかな。神殿が四宮を裏切れば、すなわち正統な血のもとへ皇位はかえるんだ」
帝には現在、四宮の他に息子はいない。
２０年前太子の座にのぼった初宮も、長くはもたなかった。神殿の支持を失って都を落ち、いまだ行方知れずのままだ。既に死亡しているだろう。
四宮が帝位に就かないとなれば、その選択肢は降嫁した皇女の子たちか、世襲王族に広がる。
宰相である青龍が何をしようとしているのか、見極めねばならない。

タルヒはスカートをはき、宝石をとめて上着をはおった。

急がねばならない。
寝台から、滑り降りる。
「ごめんなさいね、ジウ」
時間だわ。
人に会う約束なの。
タルヒは、まだ名残惜しそうな少年に口づけると、部屋の扉を開いた。
歩きながら考える。
誰か…、神殿とのつなぎを得る算段をつけねばならない。
高位で、容易にこちらになびく人物。
ジウとの関係は、もうすぐ終わるだろう。
これに、かたがつけば…

タルヒは口元をゆがめて、ふと、足をとめる。
肩がぶつかり、耳飾りが揺れた。
「どちらへ、姉上…」
弟の雨音だ。
彼は、タルヒの上気した頬とほどけた髪を見てとり、露骨に顔をしかめた。
「次はどの男です？日も高いうちから邸に情人を招き入れるとは、あいかわらずだな」
彼女はちょっと笑い、それから雨音の顔を懐かしむように見た。
「雨音。帰ってきたのね、」
タルヒは嬉しそうに背伸びして、弟に抱きつく。
それを乱暴に押し返して、彼は一歩退いた。
「触らないでくれ」
「何を怒ってるの？ジウと寝たこと、」

雨音は眉を寄せ、荒れ狂う感情に耐える表情で言う。

「ジウと！――彼はあなたの従弟だろう、しかも、まだ子どもだ。姉上、一体何をお考えなのか。正気にお戻りください。そして――」

タルヒは何が可笑しいのか、ふふと笑い声をあげた。

「正気、ね。

もう戻れないやしないことぐらい、お前には分かっていると思っていたけれど？わたくしは、とっくに父も青家も捨てたのだから。だいたいお前は、あそこで何を手に入れようというの？」

父の眼にはお前など映っていない。

一瞬、雨音が顔をゆがめたのを、タルヒは見た。

昔からこの異母弟が父の無関心を引き合いに出すたび、容易に傷ついていたことを彼女は知っていた。肩に羽織った衣を、胸元に巻きなおす。

「わたくしのことに、いちいち口出しするのはやめてちょうだい」

タルヒは、一度目を閉じた。そうすれば、揺れる感情を一時、遮断できる気がする。

目の前にいるのは、血を分けたただひとりの弟だ。

無理やり口を開き、ひときわ冷たい声を心がけた。

「母のように家の言いなりになって、嫁がされるなんてまっぴら。わたくしは好きなところで、好きなようにふるまうわ」

シジュウの当主として。

雨音は、はたして憎しみのこもった目で彼女を凝視した。

「あなたは自由です、姉上。父や僕からも」

「ありがとう」

タルヒは微笑んだ。

微笑む姉を、いっそう怒りをこめて雨音が見つめる。

「エンジュは知らないでしょう、」
彼は、異母妹の名前を口にした。
「あなたのそのせいで、僕たちの妹まで貶められることになります。青家の公女としての責務を背負い、西へ向かった憐れなエンジュが、もし、――」
「そうね」
彼女はくすり、と笑う。

「良かったわ、早く青家を離れていて。きっと、あのままでいたら西へ嫁ぐのはわたくしだったでしょうから」
「あなたという人は――！」
「それからね、リドに言っておいてくれるかしら」
タルヒは怒声をものともせず、美しい口もとをひきあげた。
「コウヒお姉さまのことは、もうしばらく放っておいてあげてちょうだい、と。だってね、まだまだ役に立ってもらわなくちゃならないわ、紅派のために」

「汚らわしい。軽蔑しますよ、姉上」
雨音は吐き捨てる。
タルヒは、ただ笑っただけだった。
ほつれた髪をゆらして、彼の横を通り過ぎる。雨音がぎゅっと唇をかみしめているのが、気配で分かった。

37

闇の向こうに、神の庭がある。
子どもだった頃、よく寝物語に乳母から聞かされた。
聖歌がろうろうと響き、白い光に満ちあふれた庭園で花が咲き乱れ、そこでは精霊たちが手招きする。

夜半に、ふと目が覚めると廊下に煌々と灯りがともっていた。
彼は光にすいよせられるように、部屋を出た。
どこまでもつづく光の白い回廊。
いくつもいくつも角を曲がり、その部屋へとたどり着く。
遠く近い、白い光のなかに、女と見知らぬ若い男がいた。
ふたりは抱き合っている。たくさんの白い布のなかで、白い腕をのばして。
ここは神さまの庭？

ふたりには彼の呼びかけが聞こえていないようで、お互いの耳のそばでひそやかな、吐息まじりの笑い声をあげている。これが神の御元に集う精霊なのか、と少年はぼんやりと見とれていた。
しかし、どこかおかしい。
ああ、と目の前のふたりが裸身だと気づき、彼は悲鳴をあげた。
息のつづくかぎり、金切り声で助けをもとめた。
ふたりの男女は彼の存在を認めて、すばやく離れる。
男はカーテンの影で、あたふたとズボンをはいた。

『やめて！』と、女が押し殺した声で言った。
『やめなさい！おかあさまよ、おかあさまが分からないの、』
途端に、裸身の女が母の顔になった。
鬼のような形相。

ぱりん、と何かが壊れる音がした。
白磁の香炉だ。
ゆれる視界。
強い異能の波動が、恐怖を呼び起こす。
誰。
母の隣にいる男は、誰だ。

幾つもの硝子が割れる音が響く。
窓がきしんだ。
こちらへ伸ばされる幾つもの手。
違う、違う。
おかあさまじゃ、無い！
少年はまぶしい光に背をむけて、暗がりに身を翻す。
『つかまえて！』
と母の顔をした女が叫んだ。
知らぬ男が自分を追いかけてくる。
彼は必死に、逃げた。回廊を走り続けた。
嫌だ！
追いつかれる！！
すぐ先にひときわ暗い先が見えた。

と唐突に、ふわりと足が宙に浮く感覚が雨音をつつむ。

ああ、ここはやはり神さまの庭だったのだ。
僕の夢なのだ。
静かで何か満たされた気持ちになりながら、彼は黒いベールにつつまれて、神に身体をゆだねた。

しかし、その一瞬ののち、頭の真ん中にクイを打ち込まれたような激痛が走る。
その苦しみから逃れようと、身をよじってのたうち回った。
血管のなかを、硝子の破片が流れているような痛みが広がった。
ついで、背中にしびれるような感覚が走る。

いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい――
助けて！
助けて、父君！
痛みの嵐が去ったあと、彼は寝台の真ん中に、うちあげられた魚のようにぐったりしていた。
ああ、これは…夢？

は、と息をのむ。
突然、何の予告もなしに明けた闇に、雨音は軽いめまいを覚えた。
額と背筋がじっとりとぬれている。
汗だ。
袖口で顔をぬぐい、頭を振り起こすと長く立てていた膝がぎしぎしと痛んだ。
どうやら祈りながら、寝てしまっていたようだ。
「夢、か…」
おかしな夢だった。まるで誰かの記憶のような…。
いや、思い違いだろう。
雨音は首を振り、大窓をふり仰ぐ。
彼の眼前には、階段がのびていた。
その先には、祭壇がある。光の聖所。祈りの場である。
皇宮のおくつきに置かれた、日の神をまつる小神殿。
彼はゆっくりと視線を石床に戻す。わずかな動きにしびれた左足

に痛みが走り、顔が歪んだ。
脳裏に浮かぶのは、姉の顔だ。

どうすれば姉をとめられるのだろう。
昔はあんな風ではなかったと思う。
記憶にあるタルヒは、いつも目を伏せるようにして、小さな声で喋る少女だった。
いや、と雨音は思いかえす。
違う。
あの日だ。エンジュと初めて会った日。
あのときも、タルヒは今日と同じ目をしていた。壊れそうなほど強く、雨音の手を握りしめて。
『今日からこれが、お前たちの妹だ。挨拶なさい』
父はそう促した。
『さあ、タルヒ――――』
その後、一体姉はなんと答えたのだったか…。

かつか、と壇上から硬い音が響いた。
ふと雨音が顔をあげると、目の前に聖杖を持つ女が階段を下りてくるところだった。
相手が誰か理解し、居住まいをただす。
「アサヒナ様」
「ごきげんよう、青家の公子」
高いところから見下ろす格好で、雨音に言う。
雨音はかしこまって、深く頭を下げた。
床にさらりと、女の衣が広がる。
高位神官の衣だ。
水晶が幾重にも連ねられた額飾りをつけ、裾を長く引く肩方に流した紫衣。
たしか齢も５０を重ねたはずだが、彼女の髪は黒々と豊かで、年

齢を感じさせるものではない。
「奥からそなたが祈るのが、見えました」
と、アサヒナは言った。彼女は、皇宮における神殿の最高位『御言持ち』で、帝の実姉である。
先ほどから何度も声をかけたのだ、という。
気付かなかったのか、と問う彼女に「考え事をしていたので…、申し訳ありません」と答えながら、気付かなければよかった、と雨音は思った。或いは、さっさと逃げ出せば良かった、と。

雨音の内心には気付かないようで、アサヒナは近況を尋ねる。
「旅はいかがでしたか」
「姉にも同じことを聞かれました」
彼は、微妙に返事をそらせた。瞳をふせ、感情を沈める。
「対処が迅速だこと」
アサヒナはゆっくりとした口調で返す。抑揚のない、しかし歯切れの良い低い声だった。
そういえば、と彼女はふいに微笑んだ。
「タルヒはこちらに来ているのね」
派手な交際は相変わらずかしら。
雨音は、とっさに表情を隠そうとする。
「桐の宮の、ジウと関係があるとか…」
アサヒナはたんたんと続ける。

「そなたは、それで異母姉を許せない、」
「皇姉殿下は、僕の心の中が読めるようですね」
雨音は表情をこわばらせ、唸るように言葉をつないだ。瞬きもできない。
彼女に弱みを見せれば、喰われてしまう。それを雨音は知ってい

た。
彼は、昔からアサヒナが苦手だった。穏やかな語り口でありながら、力づくで隠したいことを暴き出してしまう。草むらから首元を狙う、獰猛な獣と同じに。

「心なんてものはありませんし、わたくしは皇女ではありません」
とうの昔に皇籍は返上したのだし、と付け加える。
「まだ、質問に答えてもらっていないわ。旅はいかがでした？そなたの妹に挨拶したけれど」
そなたとは違う意味で、可愛かったわ。

雨音はその言葉に、表情を変えた。面に激情を浮かべ、勢いのまま立ち上がる。
「何を言った、妹に」
「とりたてては何も」
不満そうね。
歌うように彼女は返す。

「なあに、お前の力でわたくしに対抗するというの？」
アサヒナは可笑しそうに『雨音』と真名を口にする。
ただ、それだけだった。
だが。
息が止まる。
呼吸が、できない。

背筋をはい上る悪寒。脇をすべる冷たい汗。雨音は震えを止めるのに、必死だった。
純粋な恐怖が、彼を襲う。

真名の呪だ。
「わたくしの名を教えてあげます。朝日那（あさひな）よ。さあ、おっしゃい、」
それとも。
呼べないかしら。

こぶしを握りしめ感情に耐える雨音を見て、彼女は急に興がさめたようだった。
「つまらない子。そんなところもあれに、そっくりだわ。昔を思い出させる」
だから、わたくしはそなたが嫌い。
アサヒナは唇を歪めた。
父のことだろう、と雨音は直観する。雨音を見るにつけ若い頃に戻ったようだと、父を知る人びとは口をそろえるからだ。
アサヒナの周りで彼女の感情を受けて、ちりちり光がはねるのが見える。長い髪を持ちあげ、風がゆれた。精霊が集まっているのが分かる。
「思い上がらないことね。そなたの生きるを許しているのは、ただ」
かつての報いのため。
そう告げる、吹雪のような冷たい声。

「それから、1つ朗報よ」
アサヒナは声をいっそう落とし、告げた。
ナルミヤが懐妊したわ――――と。

38

お待ちください、という老侍従の制止を振り切って扉に手をかけた。

「父君のご意向も確かめずに、勝手をなさることは」

「さがれ」

もとより、ここで留められることは想定内だ。

しかし、引き下がるわけにはいかない。

父に会って、質したいことがあった。

強引に命じると、侍従は渋々ながら廊下の隅へと後ずさる。その姿を目で追っていた雨音は、内側から扉がひらく音にあわてて前に向き直り、室内の明るさに驚かされた。

「戻ったか」

父の執務室は、いつ来ても慣れない。

部屋の片側は中庭に向いて、大きく開かれていた。

大窓だ。

透明度の高い色ガラスをくみあわせた硝子窓の黄金の光のなかで、父が立っていた。

ゆっくりこちらを振り向いた相貌は美しく、瞳は猛禽を思わせる鋭さ。

この光の角度。会う者への印象。

すべて計算づくだ。父らしいことだ、と雨音は部屋に入りながら、考えた。

「どうした、早かったではないか」

神殿で何か、耳にしたか。

かけられた言葉に、雨音はかっとなった。

父は彼がここへ戻ってくることを予期していたのだ。
「どうして黙っていたのですか」
ならばその理由も、おおよそ察しているだろう。雨音は、父の前まで寄ると傍の机に手のひらを叩きつけた。
「義母上が子を孕んでいるというのは本当ですか」
「ああ」

「なぜ…」
喉元から、うめくような声がもれた。
「聞かなかったのは、お前だ。生まれる子が女であれば、皇后にも立てる有力な血よ」
男の可能性を、青龍は示唆しなかった。エンジュは、と代わりに続ける。
「あれは庶子。次の子の邪魔にはなっても、役には立たん」
ゆえに、外へ出した。
青龍は目を細めた。笑っている。

「父上、」

雨音は唇をかみしめた。
父がエンジュの母親に執心するあまり、雨音の母は嫉妬に狂い、死んだ。結局その婚姻は、神殿に認められなかったが。
その娘を平然と、庶子などと口にする父が信じられなかった。
エンジュに流れるのは、あおき血。青家と黒家の正嫡なのだ。
「このまま西の分家と結婚させ、この最も純粋なる血が、汚れまみれるのを黙ってみていろと?」
「仕方あるまい」
雨音が声をあらげて迫っても、青龍に動揺する素振りはかけらも見られなかった。

「父上はエンジュを捨て駒になさるのか、」
「役に立つのだから、あれも本望だろう」
「役に立つ？エンジュは青家の、僕たちのために――」
目の前が、真っ赤に染まった気がした。
父が言うのは、エンジュがどうなろうと仕方ないということか。
まだ生まれてもいない赤子のために、娘を政略の道具とする、と。
「…エンジュは、死ぬかもしれないのに」
「そうなれば、あれの命運だったということだ。そなた…同情か？」

漆黒の瞳がす、と細められるのを見て、雨音は思わず息をのんだ。
国政を背負い、困難な政局をくぐりぬけてきた父。相手は、長くこの国を導いてきた伯だった。
背負う重さが、違う。
「雨音」
「はい」
だからこうして静かに名前を呼ばれれば、もう雨音に抗うすべはない。
口を閉ざした息子に、父は至極冷静に告げた。
「言ったはずだ。これは、決まったことだと」
本人の意思も、相手の素性も関係ない。
今に力は尽きると、父は言った。「帝国に希望をたくすだけの力は、もはやない。我らの継いだ名も位も、一時の幻想に過ぎない」

帝国は、大海に突き出した半島にある。
長い鎖国は、国をさびらせるに留まらず、後退させた。
帝への政権委譲がかなって、まだ２０年。疲弊した領土には、再び長い混乱を支える余裕もない。将来の安定のためにも当座をしのぐ物資を手に入れるためにも、足元を見られることなく強い隣国と、このあたりで手を打っておきたい。

「ナルミヤの産む子は、遠からず、我らの切り札になる」
うつくしい発音。「そのための、布石だ」
必要な犠牲なのだ、と青龍は穏やかに言い聞かせた。
雨音も父の正しさを理解していないわけではない。帝国をこえた西方には肥えた平野が広がり、巨大な都市もいくつかある。青家嫡子としてこの国の窮状を肌で感じている。多くの民が、餓え、患い、ぎりぎりの生活を送りながら、ほそぼそと生きつないでいる。
「だからと言って！」
「もはや、お前の嗜好の問題ではない。十二西家の条件だった。我らが皇位を握るときには、相応の援助をよこすと」
言いだしたのは、十二西家の方だという。
しかし雨音には、雪の中ひとりアサノに残った妹が哀れだった。
「僕は、こうも性急に事を運ぶ必要はないと思います。文書のみ交わし、西の出方を見定めて…」
雪はすぐ側までせまっている。まだ、今なら間に合う。呼び戻せる。
そんな息子の感情を察したのか、無表情だった青龍の整った顔にある感情が浮かんだ。漆黒の瞳に冷たく燃える光の鋭さに、雨音は胸を突かれる。
それは紛れもなく、侮蔑だった。
「父上」
「愚かしい。少しは成長したかと思っていたが」
青龍はゆったりと呟いた。これ以上顔も見たくないといった様子で、背を向ける。少し、息をつく間がある。それは嘲笑だと、雨音は分かった。
「お前は妹の心配か。そんな余裕は、ないはずだ」
下がれ、と追いやるように手を振られた。

最後通告。もうこれ以上、父は彼の言葉に耳を傾けるつもりがないのだ。

違う、そうじゃない、と雨音は訴えようとしたが、たっぷり1呼吸ほど立ちつくしたあと、手を握りしめて踵を返す。その行動が身に染みついている事だけが、今だけは酷く疎ましかった。

39

『元気でいますか――』

今日は晴れて風もなく、空はまさしく奇跡のような青一色。遠く海に浮かぶ島々は、白くかすみがかっている。

薄ぐらい通廊を抜けると、次の階層へつながる階段に出た。

彩白（サイハク）の城塞都市。

元からある斜面を利用して立てられた山城ならではの、高低差の大きい造りだ。

息を切らしながら階段を上る途中で、エンジュは外を眺めた。

きらきら輝く水面。湾といきかう船。本来は白いはずの城の屋根は、日差しをはじいて金色に見える。そして眼下に小さな市街が続く。

エンジュは足をとめ、新しい手紙を開いた。右上がりに跳ね上げた癖のある筆跡に、苦笑が滲む。

イトからだ。

『昨日宮に戻り、四宮お兄様にお会いしました。皇后さまもお変わりない様子』

夏の休みに入り、寄宿学校から帰省したことが綴られている。

皇宮では『夏入りの祝祭』が行われる準備に、せわしくしているのだという。

そう、とエンジュは顔を上げた。

皇宮で喧嘩をしたことも遠い昔のようだ。あれから半年にもなるのだ。

イトはいっそ律義なほどの筆まめさで、エンジュに手紙をくれた。

帝都で流行りの髪飾り、人気の舞台役者、それから人の口にのぼる噂。

父の妻であるナルミヤの懐妊を知ったのも、彼女からの手紙でだった。

兄の雨音はといえば、学院へ戻るとの連絡を寄こしたきりしばらく、音信は途絶えている。

エンジュが暮らしぶりなど、細々と書いて便りを出し、雨音は滅多に手紙をよこさない。たまに届く手紙の文面は、いつも何かを逡巡しているようでもどかしく、エンジュは兄の変心を疑わずにはいられなかった。

胸元へ手紙をたたんでしまいながら、階段の続きをのぼる。

上階へ続く、らせん階段。

最上部に、エンジュの目指す部屋はある。

数十分もかけて、ようやくたどり着くと、きしむ扉を開ける。

粗末な木の椅子と籠だけが置かれた部屋だ。石がむきだしの壁と床は、冷たい。

夏のはじめだというのに、1つしかない小窓はびょうびょう風を打ちつけ、うす寒い。

エンジュは椅子に腰かけ、いつものように籠から布と針を取り出した。

ここでは日々に大きな変化はない。

やらなければならないこともなければ、求められることもまた、なかった。

その代わりに、身の周りを整えてくれる者はいない。

到着後1週間で、ついてきた人びとは、帝都へ送り返されたからだ。

「それが、君がここで生き延びる手段だ」

と、ソウセツはエンジュに言った。

膝上に刺しかけの図案を広げて、針を運ぶ。
縫物はここに来てから始めたことの1つだ。戦へ向かう男たちの無事を祈るしるしとして、持たせるのだという。
ここの女たちは暇さえあれば、針を運んでいる。エンジュはいつの間にか、同じことをしている自分に苦笑が滲む。はじめは、ひとりで衣さえ着れなかったのに、もう慣れたものだ。簡単なものであれば髪も自分で結える。

ソウセツとは、殆ど顔をあわせることもない。評議院のメンバーである彼は、馬で半日かかる波白（ハハク）で会議に忙殺されている。
或いは、御殿にいる。当主・白虎のそばに。
それも彼の口から聞いたわけでない。
しつこく行方を問う彼女に、ソウセツの側仕えが半ばうんざりと言い放った言葉である。
「仕事の邪魔をなさらない、それがお約束だったとうかがっております」
朝、目が覚めると寝台をしきる御簾の向こうはもう、空っぽだ。
なぜか不覚にも涙が溢れそうになった。

不意に、ひときわ冷たい風が頬を掠めた。
ぱさり、と音がしてエンジュは顔をあげる。眼前の石床に白紙が落ちていた。
何気なしに、立ち上がって紙を拾う。
それは、古い紙で折られた蝶だった。
羽に、薄く茶色い模様が1つ、ついている。
いや、とエンジュは、息をのんだ。
模様ではない。
これは、――――血だ。

『――がい。…あの人に――――』

風に託された声が、脳裏に響く。言霊。

エンジュはとっさに手を振り払った。紙の蝶は、静かに床に横たわった。

ぞっとする。血をかけた呪。

誰が、と思いもう一度、紙に触れた。

耳をすませて集中したが、声は聞こえない。男だったのか、女だったのか、それさえも分からない。

呼ばれるように、エンジュは壁に1つだけあいた小窓に近付く。

遠くにけぶる水平線。あおい海原。波高く、うす晴れた空。

雲間の日光を受けて、海の上に佇む白塔が、光を反射した。

塔の影が、黒々とその手を伸ばしている。

ずいぶん古い塔だ。建築様式から、それが２８０年ほど前のものだと分かる。今は使われない見張りの塔だ。

風が顔に打ちつけ、エンジュは手中の紙の蝶を握りしめた。

今は理解できる。

ここでは、帝国の栄華の欠片も残っていないのだ。かつて国の中枢を担った多くの騎士たちも、真なる言葉も、信仰の証も。なにもない。

「エンジュ！」

呼ばれて振り返りながら、エンジュは一応、相手をたしなめた。

「そんな大きな声で呼ばなくとも聞こえています、理深（リシン）」

理深は恐縮した風に肩をすくめた。

40

「時間ですよ」
理深はエンジュを促した。
エンジュが袂から時計の鎖を引っ張りだすと、時刻は１０時を過ぎようかということろである。
忘れていた。
「ごめんなさい、もうこんな時間」
「ええ、ウキシロ様がお待ちです。歩きながら話します」
おいでくださいと彼は、先に階段を下りた。
エンジュはため息を押し殺す。
浮白（ウキシロ）は、白虎の正妻である。その名が示す通り、彼女自身も十二西家に名を連ねる家の出身。夫のクオンとは、はとこ同士だ。
エンジュは正直に言って、浮白が苦手だった。彼女はどこかぶしつけところがあって、まだ若いエンジュで遊んでいるようなところがあった。
「どうせ行っても、役にも立たないわ」
「エンジュ、」
とがめる表情と声を、エンジュは１つ頷いてかわした。
表で仕事をかかえる理深は、暇ではない。彼女を呼びに来るのが本来の仕事ではないのだ。
「分かっている――いいわ。話があるのでしょ、どうぞ」
嘆いても不満を口にしても、どうにもならない。それを悟るぐらいには、エンジュもこの生活に馴染んでいた。

理深は、黙って胸元から書状を出した。
エンジュは受取り、装飾過多の文章をうなりながら読み解く。
帝古語だ。
「新しい司式（ししき）の任命が行われた…？」

「ええ。えらく重要人物のようですよ――会ってほしいようですね」
書状の末尾には、神居たるシキのサインがある。
エンジュの領地アサノへ新しく赴任した神官を紹介する書状だ。

アサノはそれほど要地ではないし、聖地でも、まして巡礼路にもない。ただの地方都市だ。
神殿は小規模で、今まで高位の神官たちが赴任した例もない。
司式とは、領主裁判権さえ有する神殿の位階の1つだ。世俗における子伯とは同等の地位と、みなされる。
「司式って…ずいぶん高位ね。なんで、そんな、」
「さあ…力添えをするというシキ様のお気持ちの表れじゃないですか」
兄と交わしたという約束を聞かせたシキの顔を思い出す。
敵なのか味方なのか、どこまでが真実を言っているのか、判断がつかなかった。
赤くこちらを射抜くような目が、唐突によみがえる。

「ま、うがった見方をすれば、青龍様への挑戦ともとれましょう。あなたの領地ならば、青家ではありませんしね」
理深は、かつて父が自領から神官たちを追いだした件を持ちだした。
青龍が紅派と激しく対立した際に、加担した赤神殿の派閥を青家の領地から追い払ったことは、エンジュも良く知っている。18年も昔の話だ。
赤神殿は、裁判官たる司式たちの牙城。
今になって、青家に追撃の手を伸ばしてきたということだろうか。
それとも…。

エンジュは青公女という身分ながら、その身は西家の庇護下にあ

る。
「返事はどうしたらいい？」
「書くしかないでしょう」
理深はそうきっぱり言い切って、眉根をあげた。「なんて顔してるんです、エンジュ」
「だって…」
途方に暮れて、エンジュは言葉を濁した。
見ず知らずの高位聖職者になど、どのように手紙を書けばいいのか分からない。
本当にただの挨拶なのか、何か意図があるのか、好意か挑戦か。
「書き方が分からない、理深」

帝古語を使えばいいのか、それともくずし文字でいいのか。
相手への敬称はどうすればよいのか。
会うのか、会わないのか。
エンジュは迷った末、理深にこう告げた。
「ソウセツ様にうかがうわ。書きかたを間違えれば、父君の御名に傷がつくでしょう」
別にそれはいいのではないか、と理深には言えなかった。
エンジュは父の意に反することを、極端に恐れ、嫌がる。そんなところは、兄の雨音とそっくりだ。

それにしてもソウセツとは。
それが理深を苛立たせた。エンジュの婚約者は、『仕事に干渉しないように』と初対面で約束させたような男である。
「――お好きなように」
それでも、理深はこう答えた。
エンジュは顔を上げて彼を見返したものの、２人の相性を思い出したのか、何も言わない。

理深はここでは、青家の代理である。
兄から『貸し与えられている側近』として、敬称を省く権利と共に西における青家代行の権利の行使を認められている。
口の悪いところのある白虎などは、理深を『公女の兄上殿』と呼んでいた。
ソウセツとは、利害だけでなく感情的にもぶつかることが多いようだ。
ようだ、というのは、エンジュが実際にその場を見たことがないからだ。

「何？」
「いいえ――ただ」
エンジュは理深の視線を返す。
彼は吸った息を吐息に変えて、エンジュから受け取った手紙をしまった。
「あなたがここで、無理をすることはないのです」
エンジュは眉を寄せたが、答えることは避けた。
オノセを思い出したのだ。
エンジュの教育係であった彼女は、ここで帝都風を押し通そうとして、ソウセツの側仕えたちとことごとく対立、居られなくなった。
ソウセツの沈黙だけが、雄弁だった。
ここは西家だ。
青家の領地ではないし、今は国首の時代でもない。
帝都風など笑わせる、と。
そのことに、オノセは気付かなかったのだろうか。だとしたら、致命的だ。
エンジュは婚約者というよりも、中央に対する西側の人質なのだから。

黙ったまま2人はきっかり30分後、御殿の門をくぐった。
彩白の中枢は、二山の南方の傾斜を利用してたてた半ば要塞のような建物群だ。
通称『蜂の巣』城と呼ばれる。
この城にはエンジュを含め、西家の人々がそれぞれの棟で生活している。
ゆるやかに繋がった家族のように。
御殿とは、白虎の棟を指し示す。

エンジュが奥の間へ通されると、そこでは背の高い女性が、侍女たちにとりどりの布を運ばせているところだった。エンジュと理深に気付くと彼女は立ちあがり、侍女たちには続けるように言い置いて、別室に招いた。
「わざわざ呼び立てて、すまなんだのう」
「遅れて申し訳ありません」
エンジュは、言い訳しなかった。
相手が、言葉を弄することを嫌うのを知っていたからである。白虎の正妻である浮白は口元を引き上げると、理深の役目をねぎらい、露台から広間へ誘った。
理深は膝を折り、早々に退出していく。

案内された部屋では女たちが座ったまま、針を手に、めいめいお喋りに興じていた。
エンジュの姿を認めると、それぞれ立ち上がる。
「皆さま、ご無沙汰しております」
エンジュは、膝を軽く折った。
浮白が自分の左隣に席を用意し、エンジュにすすめると、作業はなごやかに再開した。

41

その広い部屋には、たくさんの布と糸であふれていた。
浮白が念押ししていたように、内々の声かけであったので、集まった婦人たちは数こそ多くなかったものの、それぞれが大きな布地の四方に分かれ、下地の図案にそって針を器用に動かしている。
巨大なタペストリーだ。

近々、隣国の王の即位２０年を祝う式典がある。この織物は、グルジムカの王太子へ嫁いだ西家の公女に贈られるのだという。
生地の厚さのためか、ひと針ひと針が重く、エンジュは未だになれない針運びに苦戦しながら、刺繍を続けた。
「こちらには、もう慣れまして？」
正面に座る女がにこやかに、エンジュに尋ねる。
誰だっただろう。
白虎のところで会ったような気がするのだが、名前を思い出せなかった。
綿菓子のよう、というのが彼女に抱いた印象だった。珍しい黄金色の髪はふわふわと綿毛のようで、海のような青い瞳をしていた。
小柄で、ほっそりしている。明らかに異国の人間だ。

戸惑うエンジュを見かねたのか、浮白が横から口をはさむ。
「そうじゃ。そなたがこちらへ来たばかりのときは、帰りたいとよく癇癪を起して夫を困らせたものだった。のう、ヴェルナ」
「まあ、ひどいおっしゃりようですわ、ウキシロ様」
明るく彼女は応じる。
ああ、とエンジュは思いだした。
彼女は、遠く大海の向こうにある島国からきたというヴェルハナ・エルゲンヴァルトだ。

「だって、コウは私が望めばいつでも、国に帰してやるって言いましたもの」

コウというのは、彼女の夫でサギ家当主の名だ。白虎と並ぶ権威である評議院で要職をつとめている。

少年時代、白虎の弟であるサイカとソウセツと3人、たいそう仲が良かったのだと聞いたことがある。

「あやつらしい言葉じゃな」

口のうまいコウをさして、浮白がため息をつく。

「それより、ウキシロ様。先程、衣合わせをなさっていたのでしょう？良い品はありまして？」

ヴェルハナが熱心に尋ねると、浮白は首を振った。

「余り揃ってはおらぬ。そろそろ薄物の用意をせねばならぬが…。喪の用意を省けるだけありがたいと、思わねばならぬな」

苦々しく呟く彼女の言葉が、西家の現状を表している。

白虎の妹の羽鳥とエンジュ、その婚姻ゆえに西の国境線は守られている。戦は終わった。

一方で、数年来の激戦と多くの兵士たちの犠牲は、領土を著しく疲弊させている。

きらびやかな布をおる余裕は今の西家にはなく、公家の面目を立てるためにも、貴重な財源となる布地や刺繍の出荷は、供給を上回るスピードで進められている。

「美しい衣が、人殺しのための資金となって戻ってくるのですわ。私は耐えられません」

「ヴェルナ、それ以上は」

浮白は、平和な海洋国家で育った彼女の言葉を切った。

エンジュは周囲の反物を眺めた。

そうだ。

今この場に置かれている布、ほどこされた染物、全ては高値で取

引される。その利益で、人々は兵士を養い、人殺しの道具を購入するのだ。そのため、老いも若きも貴婦人から農民の娘に至るまで、女たちは皆機織りに精をだす。

婦人たちが刺繍を再開したのを見て、エンジュも緑の糸を手に取った。彼女の持ち分は、花からのびる蔓である。繰り返す曲線に針をそわせる。

浮白はその隣で、右隣の女性に低い声で話をはじめている。

「ミオ、今年もクオンの夏至の衣をお願いできるだろうか」

ミオ、と呼ばれた女性は静かに顔を上げる。

エンジュは知らぬうちに、聞き耳を立てていた。

この女性は良く覚えている。ソウセツからほとんど聞き取れないような小声で、白虎の奥方として紹介されたからだ。今に思えば、浮白に配慮したのだろう。

彩白では皆口にこそ出さないが、ミオを白虎の妻として扱っていた。

浮白は穏やかに言葉を紡ぐ。

西では、死者の弔いの祭りでもある夏至に、真新しい正装を妻が揃えるのが習わしとなっている。どうやらその権利を、側室のミオに譲ろうというらしい。

「そなたが用意した衣は、彼によく映える」

「浮白様さえ、よろしければ」

ミオは控えめに、ほほ笑む。

エンジュが息をつめて様子をうかがうなか、2人は和やかに会話を続けた。

42

エンジュは、中庭をのぞむ部屋で理深と向かい合った。
緑は濃く、ぬるい風が午後を告げている。表に近い、離れの二間が彼女に充てられた部屋だ。

窓と扉は、常に開け放している。換気のためではない。密談も策謀もないということを、周知するためである。ここで気を配らねばらないのは、暗殺ではなく、人の噂や評判だ。
階段の最上階にある小部屋は、見晴らしも良く人目が気にならないという利点があったが、机も明りもなく不便だ。人といる時は、エンジュは与えられたこの部屋を使うことにしている。

エンジュは理深と、日課になっている帝古語の変化動詞の復習を始めた。現在では神殿文書にしか使われないが、大陸では条約を締結する際の共通言語と見なされ、いくつかの王国や公国では、一般的に話されてもいる。帝国では、真成(シンセイ)王の御世に鎖国を完成、公文書から難解な帝古語を締め出したという歴史がある。今や、殆ど話せる者はいないというのが現状だ。

「訳はまあ及第点を差し上げましょう、ですが意思疎通という意味では全く駄目ですね」
一文を何度も発音させて、間違いを正しながら理深は言う。
当然だ。文法書はあれど、使う場のない死語の発音など誰が教えてくれるというのか。
しかしガラシヤ育ちの理深は、この古い言語によく通じている。というのも、当地の宮廷では今も古語を使っているからだ。
面倒くさがり屋で、どこかおおざっぱなところのある兄は、その複雑な発音と動詞や名詞の変化の多さに、早々に根を上げたが、エ

ンジュはそれが言語の美しさだと思う。今でも言葉の端々にこの古語は生きている。精霊の言葉、祈りがそうだ。

「書いたり、意味を訳す方が楽だわ」

「でしょうね。でも、それでは現実には役に立ちません」

つっかえながら読むエンジュに、理深は苦笑した。

それでも、この3月でずいぶん上達した。

鎖国を敢行した真成王と、その義弟である当時の青龍が何を思ったのかは、今となっては分からない。

ただ、代々外交をつとめてきた青家の、その直系さえ言葉を解さなくなって久しく、これでは異国との交渉の場に立ったところで、ろくな結果を招かぬはずだ。そう、エンジュは兄に言ったが、返事は彼女の気をくじくに等しかった。

「いつから、そんな難しいことを言うようになったんだい、エンジュ」

その場で、語学の勉強をやめるように諭された。

それでもやめないと知った雨音は、侍女たちに命じて、文法書や字引きの一切を焼き捨てさせた。

「お前のためだ」

と兄は優しい声で言ったものだ。「代わりに紅や、髪飾りを買ってやろう」父君もそれをお望みだ、と。

エンジュは逆らわなかった。

逆らえなかった。

今となっても、兄があれ程までに、古語を拒否した理由は分からない。

理深によれば、雨音自身もある程度までは、語学に励んでいたそうだが、ある日を境に、見むきもしなくなったそうだ。

「僕には、お前がいるからいい」

と、のんびり笑ってそう言ったという。

文法書が半ページもすすんだところで、理深は顔をあげた。
「今日は、ここまでにしましょう」
「気にしないで。いってらっしゃい」
今日は、理深は戻ってこないだろう。
エンジュは就寝するまで、ひとりである。はじめは寂しいと思うこともあったが、手持無沙汰に慣れれば不便は感じない。
たいていは、書庫へ行って本を手にとったり刺繍をしたりして時間を費やした。

西家には、紅派（こうは）の研究書が多数所蔵されていることも、足を運んで初めて知った。敵対してきた青家では、目にすることができなかったものだ。
南部に大きな勢力を持つ紅派は、国学院の創立を起点としている。いうなれば、学閥だ。エンジュにはいまだに信じられないことだが、異母姉のタルヒは、その首魁のひとりである。

そして、エンジュは今確信している。
姉のように、側にいてくれた家庭教師。
コウヒも、おそらくそうなのだろう、と。

43

手もとの明りが費え、エンジュは筆をおいて目がしらを押えた。
窓からの風が、蝋燭を消している。書きかけの手紙に白い影が落ちた。帝都にいるイトへの返事だ。
言葉は選ばなければならない。慎重に。
かつ、婉曲に。
書いたものが、全て開封されてから送られるのを、彼女は知っていた。届いた手紙が全て、一度開けられているのと同様に。
最初は怒りに燃えて、何度も抗議していた。
だが、幾ら言っても聞き入れてもらえないことを知ってからは、仕方のないことだと諦めるようにしている。兄が言ったように、彼女はここでは人質だ。叛意がないかを調べるのは当然のこと。

『お手紙ありがたく読ませていただきました。私は相変わらずです』

気をとりなおし、そう書きつづったところで、机のはしに置かれた小さな手に気付いた。
なんだろう。
エンジュは、机の下を覗き込んだ。机にぶら下がった小さな体が見えた。暗がりで、目が合う。
金色の瞳。
４つか５つくらいの、まだ幼い子供だ。
「おちびさん、」
机を揺らさないで。
エンジュが声をかけると、相手は機嫌を損ねたようだった。頬をふくらませたまま両手をぱっと放すと、曲げた足をのばして着地した。

「おちびじゃないよ。こんな暗いところで何してるの」

「ここは私の部屋よ。勝手に入らないで」

むっとしてエンジュは応じた。

「入っちゃいけないなんて書いてなかった。なに――お手紙書いてるの、」

少年は、エンジュの座った椅子に手をかけて、足掛けに乗った。

机の上の手紙をのぞきこんでいる。

「え、んじゅ」

「やめて！」

エンジュは片手で手紙を隠して、叫んだ。

文頭に書いた名前を読みあげ、彼はにっこりと笑う。

「僕はキキだよ」

キキ。

なんて変な名前だろう、とエンジュは苛立ちながら思った。

良家の子供だというのは分かる。

白絹を纏っているし、帯には短刀を差している。柄には、風を模した朱の紋様。

ソウセツが同じような一振りを寝室に飾っているのを、エンジュは記憶していた。となれば、騎士の息子だろうか。

「そう。じゃあ、キキ。早くここから出なさい。おうちの方に叱られるわよ」

不機嫌にそう言うと、エンジュは椅子に座り直した。こんな小さな子どもに腹を立てたところで、仕方がない。筆にインクをしみ込ませた。

しばらくして、机の脇から小さな顔がのぞいたのが見えた。両手で身体を支えるようにして、エンジュをのぞきこんでいる。

「帰らないの？」
エンジュは顔を上げずに聞いてやる。まだ怒りはおさまりそうにない。
「怒ってるの？どうして、」
「怒ってない」
「ごめんね」
いけないことをしたんだね、僕。
少年は、急いで謝った。
ため息をつきながら、いいわ、とキキに向き合う。
「いいわよ。どうせ届く前に開けられてしまう手紙なの」
エンジュが言う意味を、幼いキキは理解しなかったらしい。首をかしげている。
「ごめん、難しかったのね。もう、怒ってないわ」
「良かった。僕、ここにいていい？」
逃げてきたんだ、ウキシロおばさんがべたべた触るから気持ち悪くなっちゃった。
エンジュはふきだした。
あろうことか、浮白をおばさん扱いするとは。
大真面目に言う少年は、エンジュが何を笑っているのか分からないらしい。
ひとまず彼女が機嫌を直したことを知ると、「ね、椅子に座らせて」とねだった。

エンジュは良いとも悪いとも答えなかったが、彼のために座る場所をあけてやる。
彼はエンジュに並んで座ると、机上に並べられた本に手を伸ばした。机に膝を乗り上げて、大きな本を引っ張り出す。じっとはしていられないものらしい。
彼が手にしたのは、『竜と姫君』の装丁本だ。エンジュが青家の

禁書庫から持ち出した、例の本である。いつの間にか返しそびれて、ここまで持ってきてしまった。

「この話、知ってる！」

お母さまが話してくれたよ。

エンジュは頬杖をつきながら、横目でキキを見つめた。

髪は琥珀のような色で、こちらを見上げる目は、溶かしたバターのような金色だ。

どこかで見たことがある、とエンジュが思いだそうと記憶をさらっている隣で、彼は希少本をばたばたと開いていった。

読むというより、絵を眺めているのだろう。

笑いも歌いもしない、氷の姫巫女。国に災厄をもたらす竜。銀の騎士。

時の塔。竜が沈む海。海の底にあるという宮。

船。

ぱらぱらとページがめくられていく。唐突に、キキが手を止めた。

「変だよ」

「何が変なの、」

「騎士が死んでる」

「そうよ。そのお話では、そうなの。竜と姫君が、海底の宮で幸せに暮らすのよ」

知らなかった？とエンジュはキキに教えてやる。

騎士の死によって、姫巫女は自らの過ちと竜への愛に気付くというストーリーなのだ。

「じゃ、僕の知ってる話とは違うよ。だって騎士は死なないんだ。船で旅をして、エルゲンヴァルトに着くんだもん」

エルゲンヴァルト。

「ね、それって――」
エンジュが尋ねようとしたところへ、女の叫び声が重なった。
「キキ！」
少年は、文字通り飛び上がった。
エンジュが振り向く前に、キキは首根っこを押さえられたまま、椅子から引きずりおろされる。慌てて立ち上がると、女が暴れる少年の腕をぎゅっと握ったところだった。
はなせ、はなして、とキキは抵抗している。
まるで、つむじ風のようだ。
「ヴェルハナ様、」
「ごめんなさい、エンジュ様」
息子が、お邪魔して申し訳ありませんでしたわ。よく言って聞かせますので。

あっけにとられているエンジュの前で、彼女は膝を曲げた。
「ヴェルハナ様の息子さん…？」
「ええ、キョウヒと申します。ちょっと目を離したすきにいなくなって…」
と苦笑が返る。
キキという愛称は、キョウヒと発音できなかった頃の名残であるという。
確かに、色彩は違うものの面影がある。けれども、綿菓子のような印象のある彼女から、どうしてこんな大きな子どもが想像できただろう。
来年には准騎士として聖体拝領を受けるというから、7歳にはなっていまい。
サギの息子というわけか。
なるほど、ウキシロをおばさん扱いできるわけだ、とエンジュは納得した。

「悪い子ね、キョウヒ。大公閣下へご挨拶もしなかったわ」
「だって僕、騎士になるんだ。知ってるよ、白虎はカイライなんだって」
カイライは、評議院より下ってことなんでしょ。
エンジュはキキからとびだした言葉にぎょっとした。

傀儡。

得意げなキキに、ヴェルハナは蒼白になって目をつり上げた。
「なんてこと言うの！キキ。帰ったら、お父さまによく叱っていただくわ」
ヴェルハナはエンジュに頭を下げる。深々と。
「何も分からず申しました幼子の言うこと。どうか、」
母親の必死の形相に失敗を悟ったらしい。キキがわっとなき声を上げた。気まずい沈黙のなか、少年の泣き声だけが響く。
「…いいえ、私は何も聞きませんでした」
エンジュは頷き返す。
まるで気にしない風を装って、エンジュは母子を御殿まで送りに立った。

44

外回廊は、日差しを遮っており、比較的涼しい。緑影が白い壁に映えている。

エンジュは歩みをあわせながら、隣をゆく女性を見た。

ヴェルハナは、泣き疲れて眠ってしまったキキを重そうに抱き上げている。

白虎と評議院の亀裂は、今にはじまったことではない。

２代前の白虎であったフブキは、評議院と対立し、凶刃に倒れたという。浮白の前夫である。

部外者であるエンジュにはまだ、白虎と評議院の対立構図がよくのみ込めていない。

「良いことを教えてさしあげますわ」

とヴェルハナは、エンジュに言った。

「浮白様はオキシロのご出身。代々、騎士団の統率権を握っておられます」

オキシロ家は１２の名門のなかでも、特に直系に近い血筋を守っている。クオンは１０も年上の彼女を妻に迎えることで、白虎の地位におさまったのだという。

「とても仲のよいご夫婦ですのよ」

ヴェルハナの言葉に、エンジュは信じられないと首を振った。

「でも、ミオ様は――」

ならば、側室である彼女になぜ、夏至の衣を頼んだりするのだろう。

そう口に出そうとしたが、ぬすみ聞きを暴露しているようで、エ

ンジュは押し黙った。
ヴェルハナは薄く笑みを浮かべる。
「協力関係、という意味においてですわ」
おわかりかしら、と続けた。

あの身体では、戦場で功績をあげることはできませんわね。
それが、クオンのことを言っているのだとエンジュには分かった。
幼い日の落馬がもとで、彼は騎士としての戦いどころか歩行さえ困難である。常に車椅子と共にある生活。ゆえに、一度は後継の座から退けられた。

「大公閣下はソウセツ様を重用なさっているわ」
なぜだが、ご存じ？
「……」
「ソウセツ様のご親友のサイカ様を殺したのは、兄君の大公閣下だからよ」
負い目があるの。

いつか、2人の歩く前に大階段があらわれた。下への棟に続く階段だ。
エンジュは答えることができない。
ヴェルハナは一度立ち止まった。
そこからは海が一望できる。紺碧の海。波は、陽を受けて黄金に輝やいている。船が波間を行き交い、古塔が鈍く光った。

「ソウセツ様は」
彼女はエンジュに向き直った。
竜と姫君、と相手の口がそう動くのをエンジュはひきこまれるように見つめた。
ヴェルハナの瞳は静かで、なぜか哀しい。

「幸せな結末のあの物語のように、あなたを守ってくださるかしら」
「…エルゲンヴァルトでは、結末はどうなるのです？」
エンジュは震える声を叱咤しながら聞きかえす。
「そうね、」
彼女は口を開いた。

45

雪のつぶてが彼の顔を叩いた。
海辺だ。鈍色の荒れた波。
強く風が海辺に立てられた白い幟をちぎり取るかのように、はためく。祈りの歌が聞こえる。心が切れるような哀切の調べ。
砂浜には、幾艘もの小舟が並べられていた。
白い装束の人々が行列をつくり、沈痛な面持ちで舟の1つ1つに別れを告げる。
葬送の行列だった。

幾艘も並んだ、ひときわ白い舟。
サイカは、まるで眠っているように目を閉じている。戦場に倒れたとは思えぬほど、その安らかな寝顔。
今にきっと目を覚ますはずだ、とソウセツは麻痺した頭で繰り返した。
これは、夢だ。
悪い夢だ、と。
雪が空を覆い、横たわるサイカの身をうずめていく。蝶丈白を白く、染めていく。
胸元で、ゆるやかに剣に重ねられたサイカの手。青白く、冷たい。
これでは凍えてしまう、とソウセツは思った。
温かくしなければ。
剣をとって戦う手なのに。
「目を、目を開けてくれ、サイカ…」
幾万回呼びかけただろう。
しかし、どんなに呼びかけても彼は瞼をとじたままだ。
ああ、なぜだ…。
なぜか、身体が重くて仕方がない。膝まずいて、舟に寄りかかろ

うとするが、足の感覚もなかった。

「ソウセツ、時間だ。舟が出る」

誰かが、言った。

唐突に舟から引き離される。ソウセツは胸をかきむしり、慟哭した。

嫌だ！

嫌だ！嫌だ！

やめてくれ、サイカを連れていかないでくれ！

まだ、死んでいない！――まだ、まだ約束の１つも果たしていない。

やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ

雪が、視界を遮る。頬を伝う涙が、ソウセツと舟を遮った。

びょうびょうと風がうねりゆく。あれくるう曇天の海。

葬送の舟は次々と、海へ流された。騎士の白き棺。幾百、いや幾千と浮かぶ白舟が雪の海に、点々と浮かんでいる。今ではもう、使われていない白い塔が、波にしぶきをあげるのが見えた。

強き戦士たちは、この舟にのって海の向こうにあるという神の庭へと運ばれるのだ。

銀の騎士の言い伝え通りに。

風への祈りが聞こえる。

耳をかすめる聖句。

潮騒。

沖で舟々は、つぎつぎと炎につつまれた。

神の御元へ。

浜では人々が泣きながら、叫びながら見守っている。ああ、羽鳥。
羽鳥、許してくれ――。
凍えるように冷たい雪の中で、ソウセツは目を閉じた。

「羽鳥をグルジムカへ。ソウセツは死んだ」

断罪を告げたのはクオンだ。どんなに呼んでも、羽鳥は振り向いてくれない。なぜか硝子の壁が前にあって、決して声が届かない。
彼女のところへ行きたくて、ソウセツは硝子を叩いた。
青い空に、緑なす草原。
くるくる巻いた黒髪の少女が、誰かと遊んでいる。
相手の顔は見えないが、知らぬ男のような気がした。
彼女に気付いてもらいたくて、ソウセツは硝子を叩き続けた。
羽鳥、羽鳥！
けれども、どんなに叩いても彼女は気付かない。彼のことなど見えぬように、そばの男に微笑み、話しかけている。
何だか無性に腹が立って、ソウセツは力を込めて硝子を叩き続けた。
拳をふりあげ、いい加減手がうずき始める頃、硝子はぱりん、という音と共に砕け散った。

羽鳥、こちらを見て。
帰ってきたんだ、君のところに。
ソウセツは彼女の元へと足を踏み出す。すると、それまでその場に腰をおろしていた彼女が、ゆっくりと立ち上がった。彼を見つめて、口を開く。
ソウセツは、愕然とした。

近づいてその手をとろうとした、しかし。
しかし、それはただの人形だったのだ。黒髪に黒瞳、どこからどこまでも彼女そっくりの、…けれども触れれば冷たくて、血の通わないただの人形。
――――羽鳥！

暗闇があけた。
ぼんやりとうす暗いなか、天井の模様がちらちらと目を刺激する。明りとりの窓から、薄く陽がさしこんでいる。朝だ。
あれは夢だったのか。
襲いくる安堵感に、冷汗が滲む。
ソウセツは腕で顔を覆った。
――すぐに帰ってきてね。
そう約束した。思いだして、ソウセツは泣きたいような気持ちになる。彼は本当に、すぐ戻ったつもりだったのだ。けれどもやっぱり間に合わなかった。何度も何度も繰り返す、果てのない悪夢と同じように。

寝台に身体を起こした。
いや、悪夢のほうがましだったとソウセツは額に浮かんだ汗をぬぐう。悪夢の中では、彼は無力でこそあれ、卑怯ではなかった。結果的に何の役にも立たなかったとしても、少なくとも利己的ではなかった。
しかし現実の自分はどうだろう。ソウセツは思い、苦しい息で微かに笑った。
笑うしかない。
今の自分は何をしようとしているのか。
――――西の安定のために。

大事なものの犠牲の上に立つ平和などあるのか。ソウセツはあのときの自分に言いかえしてやりたかった。守るべきものを守り切れず、ただ生き延びて何になる。そんな彼を誰が必要とするものか。

御簾の向こうに、少女が眠っている。

エンジュ、と口の中で呟く。薄衣をゆっくり払って、手を伸ばした。

だが、その手は彼女に触れる寸前で、止まる。

泣いている。

頬には、明らかに涙のあとがあった。

腕の中に分厚い本を抱え込んでいる。よく知られた御伽話だ。どうやら、物語を読みながら寝てしまったらしい。

ソウセツは彼女が昨夜も、泣いていたのを知っていた。きっと、青家を思っているに違いない。

なぜか、ひどく胸が痛んだ。だが、もう引き返せない。

ずいぶんためらった後、ソウセツはエンジュの額にかかった髪を払った。

今だけは。夢のなかだけは。

そっと口づけを落とす。

「許せ」

自分の上掛けをかけ直してやると、ソウセツは立ちあがり、何かをふっきるように寝室を後にした。

46

起きた時、なぜか見知らぬ布が掛っていた。
不思議に思いながらも着替えをすませ、エンジュは隣室の扉をひらく。
いつもの食卓。
木のテーブル。パンと多少の肉料理。ひとり分の食事。
それが全てだ。

しかし、今朝はいつもとは違った。いつもはいないはずの人物がそこに座っている。
ソウセツだ。
彼は、扉の前で固まったエンジュに、おはようと呼びかけた。
いつの間に戻ってきたのだろう、とエンジュは思った。昨夜は、蝋燭が芯になるまで待っても帰ってこなかった。だというのに、ふちに白金の飾りのついた議員のマントを、いっそ嫌味なほどすんなりと着こなしている。皺1つない。
「座らないのか、」
「あの、お仕事は」
「これから行きます」
何だか変だ、と思いながら、エンジュは椅子に腰かけた。
窮屈な感じがする。そう思ったのもつかの間。目の前に、煮た鹿肉が置かれた。ナイフで小さく切り分けられている。食べろということらしい。
「昨日獲れたものです」
「そうですか」
それきり、会話は途絶えた。
肉を切り分ける短刀と皿がこすれる音だけが響く。

ここでは食前の祈りもなければ、温かな食事の習慣もない。朝食といえば、平たく固いパンと冷えた肉を黙々と噛むだけだ。どんな身分であろうと食事内容は殆どかわらず、総じて朝は早い。

なぜいるのだろう、とエンジュはちらちら見た。ソウセツは、視線すら合わせない。

評議院の会議は8時に始まる。エンジュははじめ耳を疑ったものだ。帝都では貴族たちが夜会に繰り出すために、昼前に始まる会議など皆無であったから。

「あの、」

ついに我慢が出来なくなって、エンジュは声をかけた。

暖炉の上に置かれた時計はすでに、9時を回っている。ソウセツは呼びかけに手をとめて、眉をあげた。

「何か？」

「もう、9時です」

「そう」

暗に遅刻だと告げたのだが、ソウセツは気にした様子もない。どころか、平然と食事を続けている。

今日が休みでないことは、彼の服装から明白だ。おまけに、ここと控えの間を仕切るタペストリーの向こうに、慌ただしく人の気配がする。側仕えたちは、彼がここから出てくるのを苛々しながら待っているに違いない。

再び、沈黙が落ちた。

エンジュは何となく対応に困って、グラスに注がれた水を何度も口へ運んだ。

そこへ、いきなりタペストリーが巻きあがった。背後で廊下の扉がバタン、と閉まる音がする。

「――エンジュ！」

突然の呼びかけに、彼女はむせた。慌てて水でパンのかたまりを

喉に流し込むと、涙目で入口を見やる。理深だった。

「おや、」

珍しい方がいらっしゃいますね。

と、彼は入室するなり皮肉げにソウセツに声をかけた。対するソウセツは顔色1つ変えず、返事もしない。

理深は唇を歪めた。

「外で従者たちが待っていましたよ」

もう、ずいぶん長い間待たせているんじゃないですか。

ソウセツは、何も答えない。それからたっぷり1分は経っただろうか、グラスを置いて彼はゆっくりと立ち上がった。

エンジュも慌てて椅子を立つ。

ソウセツは小さく目礼を返した。その目は暗く、どこか疲れているようにも思えた。

「――失礼する」

しかし迷いのない、大きな歩幅で彼は出ていった。残された皿には、切られた肉がかたまりのまま残っている。

なんだったのだろう…。

気を取り直してエンジュは、理深に椅子をすすめた。

「朝ごはんは？」

「すませました」

彼はソウセツが座っていた場所に腰を下ろした。いつもの会話だ。

エンジュはほっと息をつくのと同時に、理深が眉間に皺をきざんだ。

「そういえば、公子に例の件をお尋ねになりましたか？」

いいえ、とエンジュは気まずく答える。どうするつもりです、と目線で問われたが、彼女は答えにつまったままだ。アサノに新しく赴任した神官への挨拶の件である。

「なぜです？一緒に食事をしていたんでしょう、」

と理深は言ったが、緊張して、訊けなかったというのが本当のところだ。

黙りこんだエンジュに、まあいいです、と彼は首をふった。身を乗りだすようにして、紙を突き付ける。

手紙だ。

「ついに、本人からですよ」

「開封は？」

「まさか。封蝋が特殊でね、術がかけられていますよ。恐ろしい」

エンジュは手紙をひっくり返して確認した。彼が言うとおり、真正文字であて名が書かれ、術で強化されている。別の者が開けば、のたうちまわる位ではすまない苦しみを味わうだろう。

西家も神官の手紙を開くことは止めたらしい。賢明な判断だ。

理深は馬鹿にしたように、言った。

「そんなに、重要文書なんですかね」

エンジュは中紐をほどき、手紙を開く。

ぱさり、と何かが落ちた。

座ったまま床に手をのばした彼女は、それが何かを知って、とめた。顔から血の気がひく。これは、あの――そう、白い花だ。

「理深、これ…」

目の前がちかちかと瞬く。唇が震えた。皇宮の、謎の女性。

『力を貸してあげましょう――遠いのですもの、目的地は』

イトが教えてくれたのではなかったか。

皇宮の奥つきの聖神殿に咲く花だと。

思考が停止する。

理深が横から紙を奪うようにして、目を走らせた。読み上げられ

る。
「――”近いうちに、必ずお会いしよう。約束のあかしに、この花を”」
彼の声がいっそう低くなった。「敬称もなしか。司式（ししき）ふぜいが、馬鹿にしてやがる」
エンジュは手紙を受け取る。
手が震えた。
「残念だったわね、理深。見落としている」
「は？」
「署名よ」
エンジュが指差したところをのぞきこんだ理深は、驚愕に目を見開いた。
その送り主。
秀麗な筆跡で綴られた真正文字は――
オウリ・エル・フオウ。
神に仕える世襲王族、巫王（フオウ）家の名だった。

47

どこへ行ってしまったのだろう、とエンジュは馬上からあたりを見回した。

ソウセツを捜して、もう四半刻にもなるだろうか。振りかえると、木立の合間に、蜂の巣城が見え隠れした。

早駆けに行こう、とソウセツに強引に厩に連れて行かれたのが、そもそものはじまりだった。ずいぶん早く帰ってきたと思ったら、部屋の扉を開くなりそう言った。

「そんなことばかりしていたら、気が滅入るだろう」

というのが彼の主張だ。エンジュの前の、古語で書かれた読み物と字引を脇へ除ける。エンジュは、ああ、またいつもの気まぐれがはじまった、と廊下を引きずられるように歩きながら、ため息をついた。

ここ最近、ソウセツの様子がおかしい。

彼女を避けるような素振りで返事さえしないときもあれば、食事のたびに部屋に戻ってくることさえある。そんなとき彼女が出かけていると、誰とどこへ行っていたのか、後でしつこく尋ねられた。

だいたい、とエンジュは思う。

帝都では貴婦人は何もしないものだった。日常のことを自らおこなうのは、はしたないことですらあったのだ。茶を淹れるのは召使の仕事だ。移動に使うのは馬車か輿で、馬に乗るなど殆ど考えられない。

西では女性たちは、男と同じく馬に乗る。自ら食事を用意し、領地を守るために剣を持つこともためらわない。子どもは乳母ではなく、自ら育てるものなのだという。ここでは、夫によく仕えるのが

務めであり、美徳なのだ。

「ソウセツ様！」

エンジュは、声を張り上げた。しかし、応えはない。

声は強い風にかき消えた。

馬に乗るなり駆けだしたソウセツを追ったはいいが、不慣れな彼女はすぐにその姿を見失ってしまったのだ。これでは、迷子だ。

風が、木立をかけ抜けてゆく。エンジュは乱れる髪を押えた。

『――行くと…見えるわ、すぐに…そこ』

風の精霊たちが、耳元で囁くのが分かった。

彼女は馬を下り、手綱をひいて歩き始めた。見上げると雲が立ち込めている。

嵐が近い。

急がねば。

48

「っ、」

みぞおちを押えて、ソウセツは木にもたれかかった。
ぎり、と痛みが断続的に続き、やがて波のようにひいていく。誰もいなくてよかった、と意識のすみで思った。
目の前には海が見える。背後には木立があり、一面の草原が広がっていた。
暗い雲が近付きつつある。雨のにおいがする。
天気がよければ、はるか海の向こうにエルゲンヴァルト島国の影が望めるが、今日は見えない。ただし、彼の目は今は数里先の海上の塔さえ、目に入らない。
いやな汗がしたたる。

痛みが消えたのを確認して、ソウセツは息を吐きだした。
無意識のうちに胸に手をやるようになったのがいつ頃だったか、もはや記憶にない。はじめは、小さく疼くような痛みだった。少しずつ痛みの間隔が短くなっている。そして、痛みの程度はだんだんとひどくなりつつある。
「まだ、駄目だ…」
眠りの浅い日が続いていた。
食欲が落ちていたのが、最近では吐き気まで伴うようになっている。いつも側にいる者たちに気付かれぬよう気をつかっているものの、このままでは時間の問題だ。

「罰が下ったかな」
自嘲気味に笑って、彼は木の根元に身体を預けた。ずるずると座

り込んでしまう。
エンジュを置いてきてしまったことは分かっていたが、今はとても迎えに行けるような気がしない。早駆けをしようだなんて、言うんじゃなかった。今さらのように後悔する。
今頃、エンジュが困っているだろう。泣いているかもしれない。
帰った後の言いわけを考えないと、とソウセツはぼんやりと思った。
額に手を当てる。
少し離れた位置に、彼の葦毛がいる。木に繋がれているわけではないのに、馬は大人しく草を食んでいた。

彼は目を閉じた。
木々を渡る風は、どこから運んでくるのか、花の香りを伴っている。
広がる草の葉がざわめき、ただ静かだった。
今なら眠れそうだ。
誘われるように、木の根元に横になった。空高く、鳥が舞う。ピィ、と甲高い声が聞こえる。

あれは、そう。
戦場への出立の日、サイカと共に聞いたものと同じだ。

――霜刹（ソウセツ）、

目にまぶしい、鮮やかな笑顔を思い出す。強い眸、絶対の信頼と決意。
もう二度と彼に向けられることはない。
あと少し…。

あと少しで終わる。
「早く、すませないと」
思考が途切れる。
ソウセツは夢に、意識を手放した。

49

「ソウセツ様！」

声をかけられるのと同時に、身体を揺さぶられ、ソウセツは目を開いた。

視界はやけにぼんやりしていて、最初そばにいるのが誰か、分からなかった。

「目を覚ましてください、どうなさったのですか」

耳元でうるさく騒がれて、ようやく焦点が合う。

間近に、エンジュの顔があった。気のせいかずいぶん青ざめて、目があった瞬間に、泣きそうに顔が歪んだ。

「ああ、何ともありません」

彼女の髪は風になぶられ、横髪がほつけている。ソウセツは半ば無意識に、柔らかいその髪に手を伸ばした。指先に触れた、と思った瞬間、エンジュははっと身を引いた。

「何度も声をかけました。…捜したのに、」

エンジュは憮然としていて、早口で言った。後ろには彼女の馬が見え、ソウセツの葦毛もいた。

「すまない、つい気持ちがよくて」

うとうとしてしまいました。

目がしらを押さえて身体を起こし、立ちあがった。寝入ってどれくらいの時間が過ぎただろう。空はますます暗く、いつ雨が落ちても不思議ではない。

「ソウセツ様、何だか顔色がよくないわ」

「平気です」

「でも」
「平気だと言った。いや、君にはその方が好都合だったかもしれない。寝ている私の首を掻き切って、帝都へ戻る方法もあったに違いないから」
「ソウセツ様！」
彼は口をつぐむ。だが、その薄い唇に、柔らかな笑みが浮かぶ。
それに気付いて、エンジュは顔をしかめた。
「なぜ笑っているの」
「いえ。心配してくれているとは思いもよらなかったので」
エンジュは、目を見開く。
「エンジュ」
2人の間を風がかけ抜けた。ソウセツが語った言葉をさらって。
エンジュの頬に朱が走る。

「もう知りません！」
はやく帰りましょう、雨がきます。
栗毛にまたがり、彼女はつっけんどんに言った。
ソウセツも手綱をひき、同じように騎乗する。

目をあげると、エンジュがこちらを見ていた。
「何でしょう、」
「評議院で上手くいってないのですか。――大公閣下があなたをとりわけ重んじている、と」
「それはまた、誰からの情報です？買いかぶりもいいところだ。私はたくさんいる騎士のひとりにすぎない」
「ですが、」
並んで馬を歩かせながら、エンジュは言った。
「ヴェルハナ様は、…評議院の方たちはそうは思っていないようです」

「大公閣下が、弟君を殺したというのは本当ですか？彼はあなたの親友だと聞きました。だから、あなたは」
「君は」
エンジュの言葉を遮るように、ソウセツは声をかぶせる。
「君自身は、どう思う？」
「大公閣下のことですか、」
「いや、違う。君が、ここにいること――私の」
この婚約のことだ、と彼は言った。
「以前、お話しましたが」
「聞かせてほしい」
ソウセツは轡を止めた。
「あなたが以前、言ったとおりです。私に拒否はできなかった、西へ来ることは」
「そうではなく」
彼から一切の表情が消えた。
「私が聞きたいのは、君が今どう思っているかです。どうしたか、ではない」

「君は私をどう思っていますか、エンジュ」
「私は」
エンジュは言葉を探しあぐねて、口を閉ざした。彼の視線を避けるように、目を海へむけた。
霧のなかに白い塔が見えた。
3年だ、3年我慢してくれ――。
ぽと、と顔にしずくが落ちた。雨だ。
「一日も早く、約定が終わる日を願っています」
帰りたいのです。

ソウセツの顔色が変わったのをエンジュは見なかった。
「この、西に安定が戻れば。そうすれば、私の存在意義はありません」
あなたが大公につこうが、議会に与しようが、それはいいのです。
「……そう、だった」
ソウセツは唇を引き上げ、馬の歩みを再開させた。
雨がぽつ、ぽつ、と落ち始めた。
草をぬらし始める。
「君はそうだった。私とは、」
違う。
ソウセツの喉の奥から、ひっかかるような笑いがこみ上げた。
「この婚約は、約定だった。サイカや羽鳥と引き換えの…それで情に流されてしまいそうになるなんて」
ソウセツが嗤う。エンジュは黙って、彼を見つめていた。雨が徐々に激しさを増していく。2人の頬を肩を、雨が濡らした。
唐突に、彼は笑いを消した。
「海に建つあの塔が見えますか、」
ソウセツは振り返って、白塔を指さした。エンジュの返事をまたずに、彼は続ける。
「あれは、かつてこの地へ嫁いできた青家の姫を、閉じ込めた牢獄。彼女は魔女として処刑された。君は、愚かな期待はしない方がいい」
冷ややかな声。
「たくさんの友人がいるようだが、ここでは役に立たない。君に必要なのは、ただ西への恭順のみ。半月後の夏至の祭りに合わせて、グルジムカからクオンの妹が戻ってきます。彼女は君と違って、弱

音など吐かなかった」
見ならうといい。
自分自身の思いをふりきるように言い捨てるや、ソウセツは馬に鞭をあてた。エンジュに背をむけ、激しい雨の中へ、走り出す。
「先に帰ります」
語尾はすでに、雨音に消えていた。

50

夏至祭りの日。
彩白（サイハク）は未明から雨だった。
小窓から眺める外は、激しい雨足に、何もかも白い。
「……ジュ、エンジュ！」
「は、はい、」
大きな声に、エンジュはようやく窓から離れた。

「どうした？先程から何度も呼んでいるのに」
「申し訳ありません、浮白（ウキシロ）様」
彼女は急いで公妃の側に行き、脇に控える。儀式の衣装を整えている侍女たちが、金と銀でしゃらしゃらと揺れる細工の冠を、まげをつくった頭にゆっくりのせていた。
「今朝はずっと浮かない顔でぼんやりしておる。どこか具合でも悪いか、」
「いえ」
エンジュは床に目を落とし、短く答える。
耳の奥にソウセツの言葉が残ったままだった。その狭間に聞いた雨音も。

「これだけ降れば、グルジムカの方々もさぞ大変でしょう、」
彼女は誰にも話してはいなかった。理深にさえ。
何を間違ったのだろう。いや、言い方を誤ったのか。
あのとき。
ソウセツは何を求めていたのだろう。
今となっては、もう聞くことはできない。
しかし、忙しい理深にこれ以上、不安や心配をかけることもできない。

話したら、きっと何かが壊れてしまう。
そんな漠然とした不安が、エンジュに口を噤ませた。
「そうだな。我々にとっても、異国の訪問を迎えての鎮魂祭など初めてだ」
浮白は首を巡らせて、格子となった窓に目をやる。薄く重ねた純白の衣、薄絹のくちなし色の帯には、金糸で刺繍が縫いとられ、縁には真珠がちりばめられている。
公妃としての正装であった。
「穏やかに、終わってくれることだけを望むが、」

ざわめきが、エンジュの胸を襲う。
海をへて、グルジムカの訪問団が上陸したとの知らせを受けたのは昨夜遅くだった。大使はクオンの嫁いだ妹・羽鳥だという。
暗い感情が、彼女の内をせめぐ。気のせいだと言い聞かせても、気は晴れない。
「先に行って、様子を見てきます」
じっとしていると息苦しさを感じるばかりで、エンジュは公妃の控えの間から、回廊に向かった。
準備をする者たちが、大階段を行き来している。儀式用の荷を運んだり、指示をとばしたりしている。
気がつくと、広間まで来ていた。出入り口にある柱の両脇には、鎧をつけた兵士が、矛を手に立っている。どちらの顔にも見おぼえがあった。ソウセツに近い、騎士団の青年たちだ。
「ここから先は、ご遠慮ください」
反対側へ回れ、と彼らはエンジュの前に矛を立てる。その隙間から彼女は中をのぞき込んだ。

広間は中庭に面して開かれ、厚い帳が下りている。
中央に置かれた白虎の椅子の脇に、既に騎士団副長であるタイハクが座っていた。エンジュの婚約式に参列した人物である。側には

幼い少年に話しかける女性の姿。あれはキキとヴェルハナだろう。
ごった返す階段の波を抜けて、見知った顔があらわれた。
「エンジュ、こちらです」
理深は珍しく、正装だった。エンジュの側に来ると、彼はじろじろ見つめながら言う。エンジュの格好が気になるらしい。
「波白から、評議員たちが到着しました。あなたは随分…その、何というか、身軽そうですね」
エンジュは肩をすくめた。
装飾の少ない白い衣は床に届くか届かないかくらいの丈で、薄い紗の布で頭を覆っている。喪の衣装だ。多くの貴族たちが集まる場で悪目立ちするのは、いいことではない。そう浮白に言われて、用意した衣だ。
2人は連れだって、広間の脇の通路から中へ入った。

広間を埋めているのは、西方の貴族とその供たちである。
彼らの仲間に入ったのだと考えても、エンジュにはさっぱり実感が湧かない。
貴族とひと口にいっても、様々だ。儀式の中心である広間に入れるのは、原則として評議院に席次を持つ、上級貴族くらいのものだ。彼らは帝に所領を賜り、そこから上がる収益で暮らし、『エル（真の）』を名乗る。下級貴族にも家名や領地こそあるものの、その収入の多くは騎士としての俸禄で、名乗りには『テ（名誉ある）』を使う。
エンジュに与えられた席は、貴族の中でも1段高かったが、12家のなかでは隅の方だった。中央の白虎の席を中心に半円を描くように12家の当主とその妻たちが立ち並ぶ。

騎士たちが広間の大扉を開けた。
長剣が天井に掲げられ、その間を香炉をもった神官たちが進んだ。

ゆるく煙が立ち上る。
紫衣を長くひいた高位の神官が数人。後ろには薄紅の衣をまとった下位の神官たちが、続く。帝国のために死んだ騎士たちに哀悼をあらわすため、この日に合わせて聖都から送られてきた神官たちだ。多くは、白髪に赤目の容貌である。人々が膝を曲げ、頭を垂れた。
ソウセツはまだ、姿を見せない。
そのうちに、白虎が身の丈の2倍はありそうな長い裳裾をひいて姿をあらわし、中央の椅子に向かった。ゆったりと歩くその足運びは、左足を庇うものだ。彼の右側でその補佐をしているのは、妻たる浮白。一歩遅れて、ソウセツがつき従うのが見えた。

大公の椅子は、皆よりも一段高いところに置かれている。全員が位置に着くと、白虎は広間を睥睨した。
「日神が与えし恩寵と、我らが一族の繁栄を。亡き者たちに、永久の安寧を。風の精霊の名と共に」
全員が唱和する。
「永久の安寧を！」
「風の精霊の名に！」
エンジュも慌てて口を動かす。ここで、こんな催しに参加したのは初めてだ。エンジュがやってきたときは冬のはじまりで、行事など何もなかった。
ざわめきが残るなか、白虎がかるく手をあげた。
「今日の夏至に合わせ、我らが友、グルジムカから使節が来た」

51

グルジムカの使者は女だった。

彼女が姿をあらわすと、人々は手を差しだし、ある者は歓喜の表情である者は涙で迎えた。

白虎の妹。

敵国に嫁いだ、人柱。

羽鳥（ハトリ）という名の彼女は、周囲をグルジムカの武人たちに囲まれながら、中央を進んでいく。見知った顔に会えば微笑し、かるく頷き返しながら。

羽鳥はグルジムカの衣装を身に着けていた。

詰襟の白い上着に、釣鐘の形をしたスカート。髪は頭頂で渦が巻くように高く、まとめられている。

首には、見たこともないくらい大粒の赤珠が輝いていた。

彼女が段の前で一度足を止めると、異国の武人たちは一歩離れて膝をついた。

「兄上！」

「よく来た、羽鳥。どんなに会いたかったか」

歓喜の声。

すすり泣きが場を支配する。

段を下りた白虎クオンが、妹をしっかり抱きしめるのが目に焼きついた。

白虎はいまだかつてエンジュが聞いたこともないほど、嬉しそうに話した。こんなに感情的な人物だったのかと驚かされたほどだ。

「この日が来るのを待ちわびました。再び兄上のお元気な姿を見ら

れて、こんなに嬉しいことはありません」
「私もだ、羽鳥」
白虎は羽鳥の頬を手で挟むと、いとおしげに顔を寄せた。
「夫に無理をお願いした甲斐がありました。ここでこうして、また皆に会えるなんて」
「グルジムカは、…太子は、お前によくしてくれるか」
「はい。ここまで船で送ってもらいました」
羽鳥は頬を染めながら、言う。
白虎は微笑んだまま妹から手をはなし、脇を振り返った。
「懐かしい顔だろう、ソウセツ」

2人の視線が交わると同時に、なぜかエンジュの胸の圧迫感が強まった。
深々と一礼して、ソウセツが顔をあげる。
「今は評議院で任にあたっている。そう、あなたの案内役も彼がかって出てくれました」
横から口をはさんだのは、浮白だ。
「まあ、そうでしたか。お久しぶりね、ソウセツ」
「――――妃殿下」

段下の近くに立つエンジュには、彼が、聞き取れないほど小さな声で「羽鳥、」と口にするのが聞こえた。

夕刻には、宴が開かれた。
これは、隣国の使者を歓迎してのものではない。死者の魂を慰撫するためのものだ。
常闇の宴という。

それぞれが手に明りをもち、静かに語らい合う。会場は広間と中庭だ。雨はもう止んでいる。ソウセツは騎士としての正装を身につけ、小さな角明を手に階段を上った。

宴席は、庭の東に設けられていた。

終わりかけた日の、荘厳な光の柱の合間に、彼女はいた。

羽鳥――――。

ソウセツの目には、彼女自身もまぶしく輝いて見えた。彼女は光であり、炎だ。

黒い目が彼を認める。彼女は微笑み、手を差し伸べた。動悸が静まることを祈りながら、ソウセツは膝をつき、なめらかな手の甲に口づけを落とす。

顔をあげれば、彼女がまとっている光の環が見えた。

結い上げた黒髪の上に、星をかたどったダイヤモンドが幾つも輝いている。長いまつ毛は夕日の名残を宿して赤く染まり、目は穏やかな夜の海を思わせる。

近くて、遠い。

胸が痛くなるほど、美しい。

その眼差しを受けることは、今はなぜか苦痛だった。やわらかいはずの声も、彼の耳には強すぎる。心臓が、痛い。

「婚約した、と聞いたわ」

「ええ」

「お相手は今どちらに？」

「さあ、」

今日は会っていない、とソウセツは言った。

羽鳥は苦笑する。

「相変わらずなのね。――――あら、あそこにいるのはヴェルナ様かしら、」

少しご挨拶してくるわ。

す、と通り過ぎようとした彼女の手を、立ち上がり際、ソウセツ

は握りしめて留めた。

「何、」

「話があります、一緒に来てもらいたい」

ソウセツは、羽鳥の手を離さずにそう、言った。

52（前書き）

できる限りぼかして書きますが、苦手な方は、どうぞ１０行目ぐらいで次話にお進みください。

52

2人は暗い部屋で向かい合った。

「話って何、」

こんな所で何を話そうというの。

長い沈黙が落ちた。

羽鳥は小首をかしげるようにして、かつての婚約者を見上げた。

「なぜそんな格好をしている、羽鳥」

「格好？」

ソウセツは静かに、彼女に問うた。その目には得体の知れない感情が浮かんでいた。

羽鳥は、聞きかえしながら胸元に手をやった。不安にかられ、首にかかった大粒の宝石を右手で握りしめる。グルジムカで採れる『赤き血』と呼ばれる石だ。これを贈った人物は今、彩白の沖にいる。彼女の帰りを待って。

「なぜ、ここの衣装を身につけない」

ソウセツは繰り返した。

「私は、すでに嫁いだ身。相応しい衣装を身にまとってきたわ」

勿論、慣れ親しんだ衣装を身につけたいと思ったことがないわけではない。長く敵と見なしてきた国へ嫁いだのだ。家族や故郷と別れて。

けれど、この1年つらいことばかりではなかった。新たに出会った人々は、皆彼女に親切にしてくれたし、慣れぬ習慣にもやがてなじめることを知った。それに、夫は――。

羽鳥は知らず、笑みを浮かべる。

船で待っていてくれるサージャのことを思い出した。彼女の側で、誓いを守ってくれるただ1人の。

「サージャが選んでくれたのよ」

布地から。

にっこりと羽鳥はソウセツを見上げる。

しかし、彼女の笑みは、思わぬ反応を呼び起こす。それまで穏やかだったソウセツが、突然表情を変えたのだ。目にした者の多くが美しいと言うだろうその顔に浮かんだのは、まぎれもない怒りだ。

「サージャ？…羽鳥、もしかして君は、真名を与えたのか」

震えるような声が落ちた。

それは真名の誓いだ。古くから帝国貴族に伝わる慣習。親愛の証に、相手に自らの名をあずけるというものだ。親がつたえた、その人個人をあらわす、字。

言霊の呪術を恐れ、血をわけた兄弟であろうと滅多に名を交わすことはないというのに。

「無論よ。彼は、私の夫。あなたに責められる謂われはないわ！」

「馬鹿馬鹿しい、」

とソウセツは言った。

「戻ってこい、羽鳥。私が何とかする。君が無理をする必要はないんだ、お願いだ」

私のところに――――。

羽鳥は一歩後ろに下がった。ソウセツが手をのばすのを、彼女は力の限り、振り払った。

「やめて」
「――羽鳥、」
「いやよ。愛してるの」
彼女は言った。
両手を腹部に置いて。
その手には、黄金の指輪が光っている。彼女はひと言ずつ切って、言った。

「私は、サージャを愛している」
ここには、私たちの愛の証があるわ。

ナニヲ、イッテイル？

その言葉に、ソウセツの何かが断ち切れた。
激情に我を忘れる。
悲鳴だ。
悲鳴が耳をつんざく。
泣き叫ぶ声。
布をきりさく音。
悲鳴が響く。
怒りに、目の前が真っ赤に染まる。赤だ。

無茶苦茶にしたい。彼女を目茶苦茶にして――――。
愛、だと？
あの日々は嘘だったというのか。
”――早く帰ってきてね”
あの日々は、あの笑顔は、いったい、

羽鳥は腹部をかばうように手をあげた。
その行為はソウセツの怒りを煽っただけだった。
やめて、やめて、やめて、やめて、やめて――――
服が破られる。
首すじに落とされる口づけ。熱い息。執拗なその手。彼女は逃げようと必死に身をよじった。目の前がちかちかする。
守らなくては。
この子は、何としても。
「サージャ！」
その言葉にソウセツが手を振りあげたのが、見えた。短剣だ。
短剣を握っている。
首をふると、赤色が目に入った。
鼻をつく臭気。
血だ。
血が。
血が、血が！
羽鳥は悲鳴をあげた。
何だ。
この痛みは何だ。
夫の顔が浮かんだ。
この子の誕生を心待ちにしている、と言ってくれた人だ。
失ってはならない。
失っては…。
サージャ。
羽鳥は全身で腹部を庇った。

大きな音を立てて扉が外から開かれる。
ああ、ごめんなさい――。
羽鳥は痛みとともに意識を手放した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6875y/

黄昏をとどめて

2011年12月29日03時46分発行